

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
6	弥生 甕	-×5.20×(13.0) 輪横 外面 頸部-輪横痕1段残存 胴部-ナ テ後一部ヘラミガキ 内面 ナテ後一部ヘラミガキ 頸部-輪横痕を もつ 底部-緩い上げ底 胴部-中央部に影らみをもつ	明橙褐 軟	普 砂粒多	1/4	外面一部スス付 着
7	弥生 甕	-×(9.00)×(18.6) 輪横 外面 ナテ 内外面とも器面の剥離が多くみられる 内面 ナテ 胴部-輪横痕を利用した段が1段みられる	暗赤褐 普	普 砂粒少	1/4	内面下部にスス 付着
8	弥生 甕	(19.0)×-×(10.8) 輪横 外面 口唇-押上 口縁-頸部-ナテ 下端- 刻み目 胴部-ナテ 内面 口縁-頸部-ナテ 胴部-ヘラケズリ 口縁-外反 頸部-有段(下端に刻み目) 胴部-上半が影らむ	明橙褐 普	普 砂粒少	1/4	輪横
9	弥生 甕	-×-×(10.3) 輪横 外面 頸部-ナテ 胴部-結筋5段→付加糸縄文 内面 器面の剥離が著しく不明 胴部-中央部に影らみをもつ	赤褐 普	普 砂粒多	1/4 以下	黒斑有 外面一部スス付 着
10	弥生 甕	-×-×(14.2) 外面 頸部-ナテ 胴部-付加糸縄文 内面 ナテ	暗褐 普	普 砂粒多	1/4 以下 胴部	
11	弥生 甕	-×5.50×(6.00) 外面 ヘラナテ後ヘラミガキ 内面 ヘラナテ後 ミガキと思われるが、器面磨耗のためはっきりしない 底部-上底 高台状の部位に側面よりの焼成前の穿孔2ヶ所有	褐 普	普 砂粒多 小石微	1/4 以下	胴-底部遺存 黒斑有
12	弥生 甕	-×8.50×(6.00) 輪横 外面 ナテ後ヘラミガキ(ハケ状工具でのナテと思われる) 内面 器面磨耗のため不明 底部-平底 磨耗著しい	明橙褐 普	普 砂粒多	1/4 以下	
13	弥生 甕	23.0×-×(8.20) 輪横 外面 口唇上-押圧 折り返し部-ナテ 頸部-ナテ 内面 ナテ 口縁-外反・折り返し 頸部-ゆるい「く」の字状	橙褐 軟	普 砂粒少	1/4 以下	
14	弥生 甕	-×-×(9.00) 輪横 外面 ヘラミガキ→沈織→網目状燃糸文 内面 器面磨耗のため残存一部 横位のヘラミガキか?	明橙褐 普	普 粗砂粒 多	1/4 以下 胴部	
15	弥生 甕	-×-×10.7 輪横 外面 ヘラミガキ→結筋6段→R L半筋縄文 内面 ヘラケズリ 頸部-長頸	明橙褐 普	粗 粗砂粒多	1/4 以下 胴部	
16	弥生 甕	-×-×(12.0) 輪横 外面 羽状縄文(L R→R L)→網目状燃糸文→ヘラミガキ 内面 器面磨耗のため不明 内外面とも器面の磨耗が著しい	橙褐 普	粗 粗砂粒多	1/4 以下 胴部	
17	弥生 甕	-×-×(3.30) 外面 襷指横縄文→付加糸縄文 内面 輪横痕	明橙褐 普	普 粗砂粒多	1/4 以下 胴部	
18	弥生 甕	口径15.1×つまみ径4.50 輪横 口唇部-R L半筋縄文施文 外面 つまみ部-ヘラケズリ 体部-ナテ後ヘラミガキ 蓋口縁部- ナテ後ヘラミガキ 内面 つまみ部-ヘラケズリ 体部-ヘラミガキ	橙褐 普	普 砂粒多	完形	折り返し口縁
19	弥生 甕	つまみ径4.20×器高(4.00) 輪横 テツクネ 外面 つまみ部-ヘラケズリ後ナテ 体部-ナテ 厚手で雑な作り 内面 つまみ部-ヘラケズリ 体部-ナテ	暗褐 普	普 砂粒多	1/4 以下	つまみ部破片遺 存
20	弥生 甕	つまみ径3.20×器高(2.90) 輪横 テツクネ 外面 つまみ部-ヘラケズリ後ヘラミガキ 体部-ナテ後ヘラミガキ 内面 つまみ部-ヘラケズリ後ナテ 体部-ナテ後ヘラミガキ	褐 普	粗 砂粒多	1/4 以下	
21	弥生 高坏 (脚部)	-×(7.30)×(4.90) 輪横 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 下端-ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ナテ 脚部-「ハ」の字状 高坏の脚部	暗赤褐 普	普 砂粒少	1/4 以下 脚部片	
22	弥生 甕	-×(6.20)×(1.40) 輪横 外面 ナテ 内面 ナテ 底部-中心部に凹み有 木葉痕	暗赤褐 普	普 砂粒多		底部 破片

23	剥片	4.10×2.30×厚さ0.50 5.1g 縦長剥片。蜘蛛の一部に二次加工痕をもつ いわゆるリタッチド・フレイクである				母石-砂岩
24	石製品	29.8×22.0×7.60 5380g 大型の石皿(砥石) 1/3ほどを欠くが全面に良好な研磨痕を残し、平滑。一部は大きく凹む				砥石
25	石製品	4.90×11.6×5.30 13.9g 大型の軽石製品。もともとは大きな円形ないし楕円形を呈していたものと思われる。一面に研磨による明瞭な平坦面をもつ				軽石
26	石製品	2.40×2.20×1.30 1.1g 小型の軽石製品。弱い研磨痕が見られる他は、明瞭な加工痕は見られない				軽石
27	石製品	2.90×2.10×1.50 1.5g 小型の軽石製品。弱い研磨痕が見られる他は、明瞭な加工痕は見られない				軽石
28	石製品	2.80×1.80×0.80 1.3g 小型の軽石製品。長楕円形を呈し全体に磨痕が見られる				軽石
29	石製品	1.80×1.90×1.20 0.8g 小型の軽石製品。弱い磨痕をもち一側面が凹む				軽石
30	石製品	2.20×1.40×0.80 0.5g 小型の軽石製品？明瞭な加工痕は見られない				軽石
31	石製品	1.70×1.60×0.80 0.6g 小型の軽石製品。弱い磨痕が見られる他は、明瞭な加工痕は見られない				軽石
32	石製品	1.70×1.60×1.20 0.8g 小型の軽石製品。弱い磨痕が見られる他は、明瞭な加工痕は見られない				軽石
33	石製品	1.60×1.10×0.90 0.4g 小型の軽石製品？明瞭な加工痕は見られない				軽石？
34	石製品	1.90×1.50×0.60 0.5g 小型の軽石製品？明瞭な加工痕は見られない				軽石
35	石製品	2.30×2.30×0.70 2.2g 小型の軽石製品。一面に直交する二列の小さな刻みが見られるが、全体の形状は不安定である				軽石
36	石製品	2.70×1.80×0.80 2.1g 小型の軽石製品。弱い磨痕が見られる他は、明瞭な加工痕は見られない				軽石
37	石製品	2.00×1.60×1.40 2.4g 小型の軽石製品？明瞭な加工痕は見られない				軽石

A082

遺 構 ロームの床であるが全体的に軟弱である。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に12層に分層。自然堆積による埋没が想定される

遺 物 覆土中から床面直上にかけて少量出土した。

所 見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。南関東系の土器と印手系土器が共存する住居跡で、南関東系の土器の比率がやや高い。本遺跡では、小型の住居跡に属する。

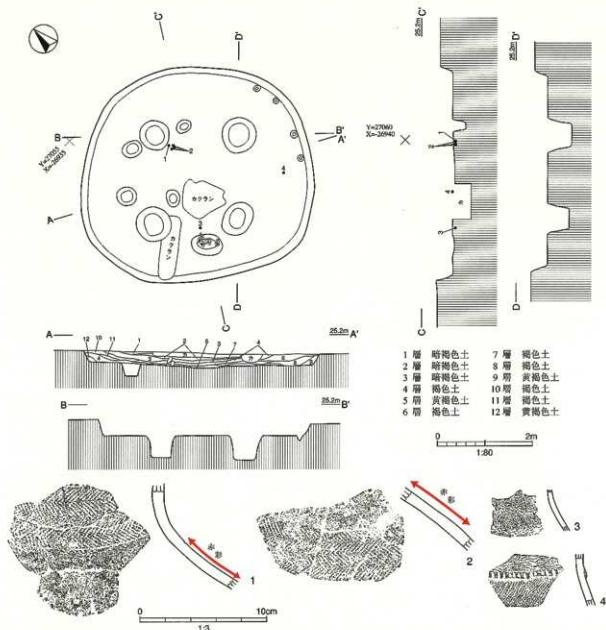


図89 A082

表35 A082遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	外面 頸部-上下を沈線で区画 区画内-LR+RL+LR+RLの羽状縄文 胴部-ヘラミガキ 内面 器面剥離のため不明 輪襷	明橙褐 普	粗 砂粒少	1/4 以下	頸-胴部片 赤彩 大型甕
2	弥生 甕	外面 ヘラミガキ→羽状縄文 ※羽状縄文は沈線により区画されていた 可能性があるが、残存していないので不明 内面 器面剥離・磨耗のため不明 輪襷	橙褐 普	粗 粗砂粒多	1/4 以下 胴部片	器面剥離著しい 赤彩 A082-1と同一?
3	弥生 甕	輪襷 外面 頸部-結節(残存)2段+3段→斜格子目文→結節3段 内面 ナテ	橙褐 普	普 砂粒少	1/4 以下	
4	弥生 甕	外面 結節3段→粘土帯貼付の上、ハケ状工具による刻み目→付加糸 縄文 内面 ナテ	暗赤褐 普	普 砂粒多	1/4 以下 胴部片	

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は部分的に検出された。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に14層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上の住居跡北側で土器が比較的多く出土した。(1)は蓋形土器の一部で床面直上の出土であった。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。印手系の住居跡と考えられ、本遺跡では、小型の住居跡に属する。

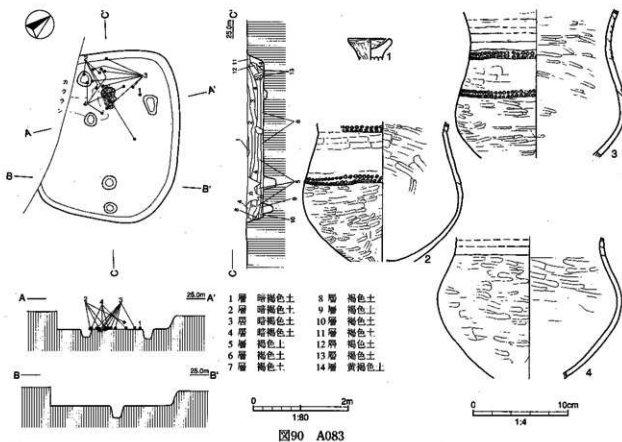


図90 A083

表36 A083遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高 特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生蓋 外面 ヘラケズリ後ナデ 内面 ヘラケズリ			暗褐色	普 砂粒多	1/4 つまみ 部片	
2	弥生甕	最大径16.9 胴上部-ナデ 胴部-ナデ後ヘラミガキ	輪積 外面 頸部-輪積痕上に 2列の刺突文 胴上部-ナデ 2列の刺突文。 内面 ナデ後一部ヘラミガキ	暗褐色	粗 砂粒多	2/3	黒斑有
3	弥生甕	最大径17.8 胴上部-ナデ 胴下半-ナデ後ヘラミガキ	輪積 外面 頸部-輪積痕上に 2列の刺突文 内面 ナデ後一部ヘラミガキ	暗褐色	粗 砂粒多	2/3	黒斑有 胴下半に少量 ス付寄
4	弥生甕	最大径19.6 胴部-ナデ後ヘラミガキ 頸部-輪積痕 胴部-やや上部に膨らみをもつ	輪積 外面 頸部-輪積痕を残す 胴部-ナデ後ヘラミガキ 内面 ナデ後一部ヘラミガキ	明褐色	普 砂粒多	1/4 胴部 破片	内外面ス コケ状付着物

A084

遺構 ロームの床であるが全体的に軟弱である。壁はロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に9層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が少量出土した。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。印手系の住居跡と考えられ、本遺跡では、A083同様、小型の住居跡に属する。

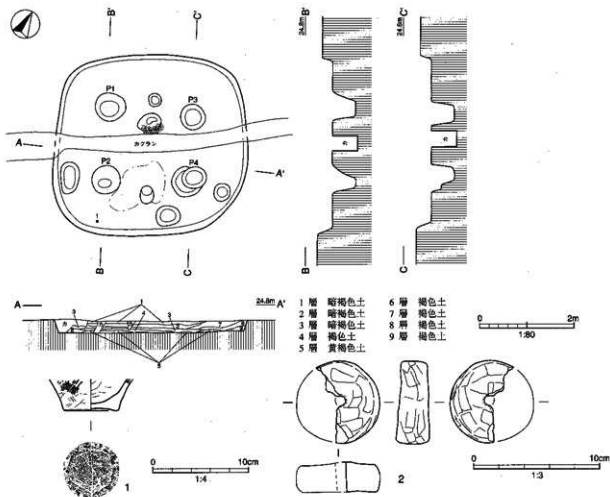


図91 A084

表37 A084遺物観察表

(単位:cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	—×6.00×残存3.30 外周 付加糸縄文 下端—ヘラナデ後一部ヘラミガキ 内面 ヘラナデ 底部—やや上げ底 木葉痕	暗褐色 青	菅 砂粒多	1/4 以下	胴部—底部遺存
2	弥生 土製品	推定径4.40×推定孔径0.50×厚さ1.30—1.60 外周 ヘラナデ 両側で厚みが異なる。孔はやや斜めに穿たれる 内面 ヘラナデ	橙褐色 青	粗 砂粒多	1/2	土製紡錘車

A085

遺構 ロームの床で軟弱である。硬化面は認められない。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に7層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が比較的多く出土した。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。遺物は、弥生時代後期印手系の土器群を主体に、南関東系の土器群を客体として出土している。出土遺物(3)については、平安時代の土師器が床面直上レベルで出土している。本住居跡においては炉が2基検出されており、遺構の形態も不正形を呈している。このことから、調査時においては捉えることができなかったが、本住居跡では弥生時代後期の住居跡のみならず、平安時代の遺構が重複していた可能性がある。

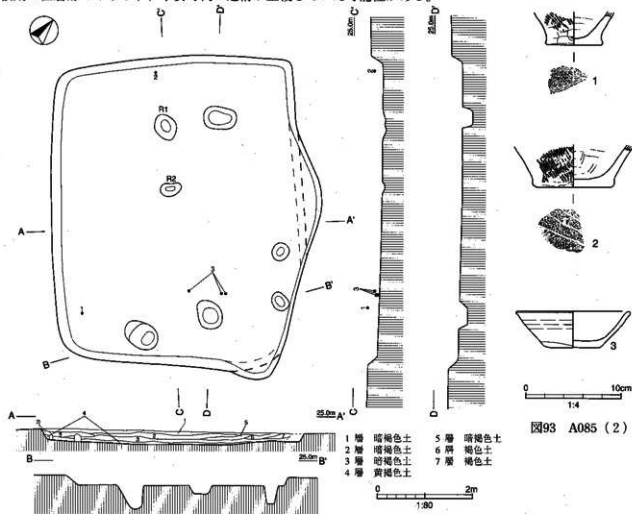


図93 A085 (2)

表38 A085遺物観察表

図92 A085

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	-×推定6.00×残存3.50 輪楕 外面 胴部-付加条縄文 下端-ヘラケズリ 内面 ナテ 底部-平底 木葉痕	橙褐色 青	青 粗砂粒多	3/4 以下	胴部~底部
2	弥生 甕	-×推定8.00×残存4.60 輪楕 外面 付加条縄文 下端-ヘラケズリ 内面 ナテ後ミガキ 底部-平底 木葉痕	暗褐色 青	青 粗砂粒多	3/4 以下	胴部~底部 内面スス付着
3	土師器 坏	(12.0)×6.00×3.90 外面 ロクロ成形 体部下端-回転ヘラケズリ	青		1/3	雲母粒一微 赤色粒一微

A086

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面が住居跡中央に広範囲に広がる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に19層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から床面直上にかけて比較的多量に出土。覆土上層から墨書土器(7)が出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。印手系土器と南関東系土器が共存する住居跡である。

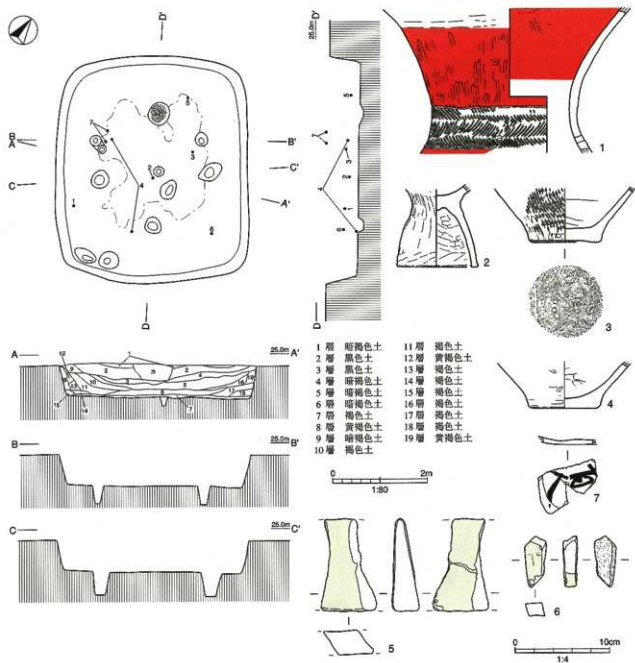


図94 A086

表39 A086遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 大型甕	-×-×残存15.5 輪積 外面 ナデ後ヘラミガキ→羽伏縄文施 文後上下を沈線で区画。縄文帯の中に5ヶ所径5mm程の小孔が焼成後 に穿たれる 内面 ナデ後ヘラミガキ	明褐色 普	粗 砂粒多	1/4 以下	頸部破片 赤彩
2	弥生	-×8.60×残存8.70 輪積 頸部-やや丸みを帯び下端で弱く内側に入る 外面 ヘラケズリ後一部ナデ 内面 接合部-ヘラケズリ・ヘラナデ	橙褐色 普	普 粗砂粒少		頸部 破片
3	弥生 壺	-×7.70×残存5.90 輪積 外面 付加条縄文 下端-ヘラケズリ 内面 ヘラナデ 底部-やや上げ底 木炭痕	暗褐色 普	普 砂粒少	1/4 以下	底部破片
4	弥生 甕	-×7.10×残存5.00 輪積 外面 ナデ後ヘラミガキ 内面ナデ 底部-平底	暗褐色 普	普 砂粒多	1/4 以下	胴部-底部
5	砥石	9.80×5.90×厚さ2.90 153.8g やや大型の砥石。両端部を欠損しているが、髄線を含め残存部の全面 に良好な研磨痕を残し、平滑である				硬質砂岩
6	砥石	5.40×2.00×厚さ1.50 22.1g 砥石の残片。二面に比較的良好な研磨面を残す				砂岩
7	土師器 坏	-×-×- 外面 体部下端-静止ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	普	雲母黒 色白色 微		墨書(底部外面) 「□人」

A087

遺 構 ロームを踏み固めた床であるが、住居跡中央部では、やや軟弱である。壁はロームの壁
ではほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に14層に分層。床面直上、壁際に若干の焼土粒子が検出されたもののおおむね、自
然堆積による埋没と思われる。

遺 物 覆土中から床面直上にかけて小破片が少量出土。(1)北関東系の後期弥生土器の壺形土器
の胴部片で床面直上からの出土である。(10)については覆土中の出土である。

所 見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。印手系土器を主体にするが、北関東海
描文土器の影響を強く受けている住居跡と考えられる。

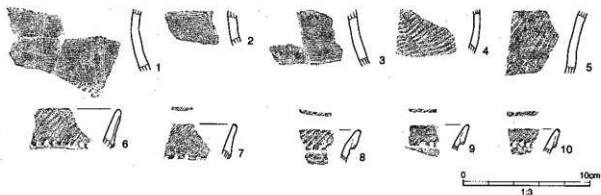


図95 A087

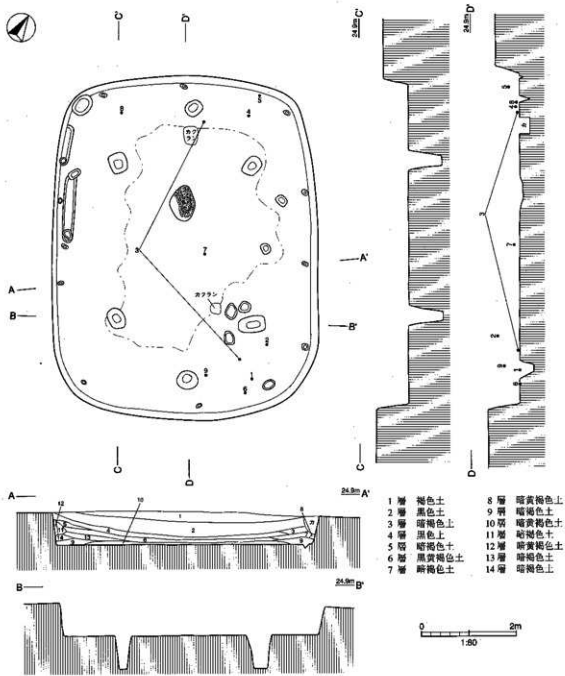


図96 A087(2)

表40 A087遺物観察表

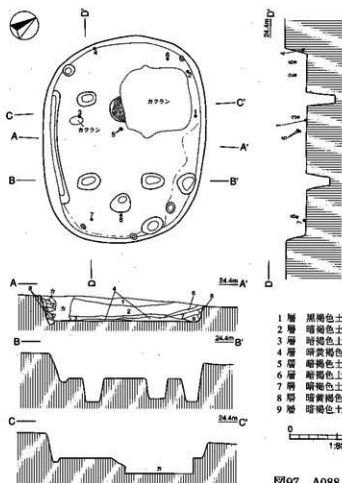
(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕 輪積 外面 内面	櫛拵による縦区画充填(横走)文→付加条縄文 ヘラミガキ	暗褐色 音	密 砂粒	1/4 以下 頸部	
2	弥生 甕 輪積 外面 内面	櫛拵による縦区画充填(横走)文 ヨコヘラミガキ	暗褐色 音	密 砂粒多	1/4 以下 頸部	
3	弥生 甕 輪積 外面 内面	櫛拵による縦区画充填(横走)文 ヨコヘラミガキ	暗褐色 音	密 砂粒多	1/4 以下 頸部	

表40 A087遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
4	弥生 甕	輪横 外面 熱糸文 内面 ナデ後一部ヘラミガキ	暗褐 軟	普 砂粒少	1/4 以下 胴部	外面スス付着
5	弥生 甕	輪横 外面 熱糸文 内面 ナデ後一部ヘラミガキ	暗褐 普	普 砂粒少	1/4 以下 胴部	
6	弥生 甕	輪横 外面 L R縄文施文 下端に刻み目(施文具不明) 内面 ヨコヘラミガキ 口縁-複合口縁	暗褐 普	密 砂粒多	1/4 以下 口縁部	
7	弥生 甕	輪横 外面 口径上-口縁-L R単節縄文 下端-結節?→口縁下 端-縄文原体による押圧 内面 ヘラクスリ後ヨコヘラミガキ 口縁-やや外反	暗褐 普	普 粗砂粒多	1/4 以下 口縁部	
8	弥生 甕	輪横 外面 口径上-L R単節縄文 口縁部-ヨコナデ後L R単節縄文 (ヘラ状工具による刺突がナ所あるが施文か?) 下端に施文具小羽の 刻み目→縦位の櫛描文 内面 ナデ後ヘラミガキ 口縁-複合口縁	暗褐 普	密 砂粒少	1/4 以下 口縁部	
9	弥生 甕	輪横 外面 口径上-L R単節縄文・熱糸文を施文後下端ヘラ状工 具による刻み目。口縁下に横位の櫛描文。櫛歯状工具による山形の文 様が一部見られる 内面 ヘラミガキ 口縁-複合口縁	暗褐 普	普 砂粒少	1/4 以下 口縁部	
10	弥生 甕	輪横 外面 口径上口縁-L R単節縄文 下端-刻み目(施文具不明) 櫛歯波状文 内面 ナデ後ヘラミガキ 口縁-複合口縁	明褐 普	粗 粗砂粒 石英多	1/4 以下 口縁部	



A088

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面が広範囲に広がる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。炉は大部分が攪乱によって壊されていたが、本来、掘り込みのしっかりした地床炉であったと思われる。

覆土は色調を基本に9層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から床面直上にかけて小破片が少量出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。印手系土器を主体に出土する住居跡で、本遺跡では小型の住居跡に属する。

図97 A088

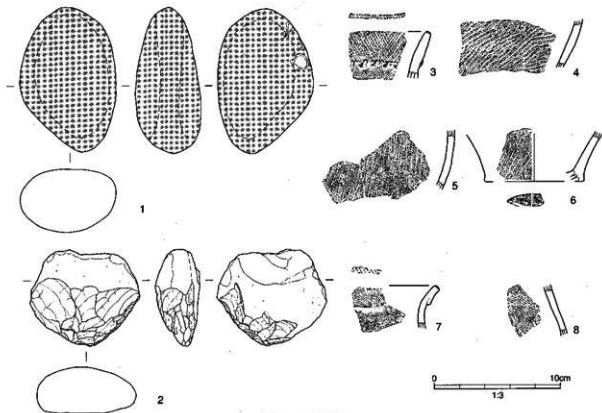


図98 A088(2)

表41 A088遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口徑×底徑×器高	重量	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	石製品 磨石	完形の磨石 ほぼ全面に良好な磨痕を残す		11.5×7.50×厚さ5.20 567.6g				凝灰岩
2	石製品 礫器	両面加工の礫器 粗い剥離により刃部が作出されている。一方の上端には粗い敲打痕が残されており、敲石あるいはハンマーストーンとしての使用も考えられる		8.20×8.60×厚さ3.60 263.3g				チョッピング ツール
3	弥生 甕	輪積 外面 L1唇上~口縁-付加条縄文の羽状構成 下端に波状の隆帯文 柳指の山形文 内面 ナア後ヘラミガキ 口縁-やや外反			明褐色	昔粗砂 粒雲母 石英多	口縁部 片	北関東系の土器? (二軒屋式系?)
4	弥生 甕	輪積 外面 付加条縄文 内面 ヘラケズリ後ヘラミガキ			暗褐色	昔 砂粒多	胴部片	
5	弥生 甕	輪積 外面 燃糸文 内面 ミガキ?器面の剥離多く判断が難しい			暗褐色	昔 砂粒多	胴部片	
6	弥生 甕	輪積 外面 燃糸文 内面 ヘラミガキ 底部~底面に木葉痕 平底			暗褐色 硬	昔 砂粒多	胴部片	外面スス付着
7	弥生 甕	輪積 外面 L1唇上-R L単節縄文 口縁部-R L単節縄文施文->ヨコナア 内面 ヘラケズリ後ヨコヘラミガキ 口縁-複合口縁			暗褐色 骨	昔 粗砂粒 雲母多	口縁部 片	
8	弥生 甕	輪積 外面 付加条縄文+結節2段 内面 ナア後一部ヘラミガキ 口縁-複合口縁			暗褐色 骨	昔 粗砂粒 雲母多	口縁部 片	

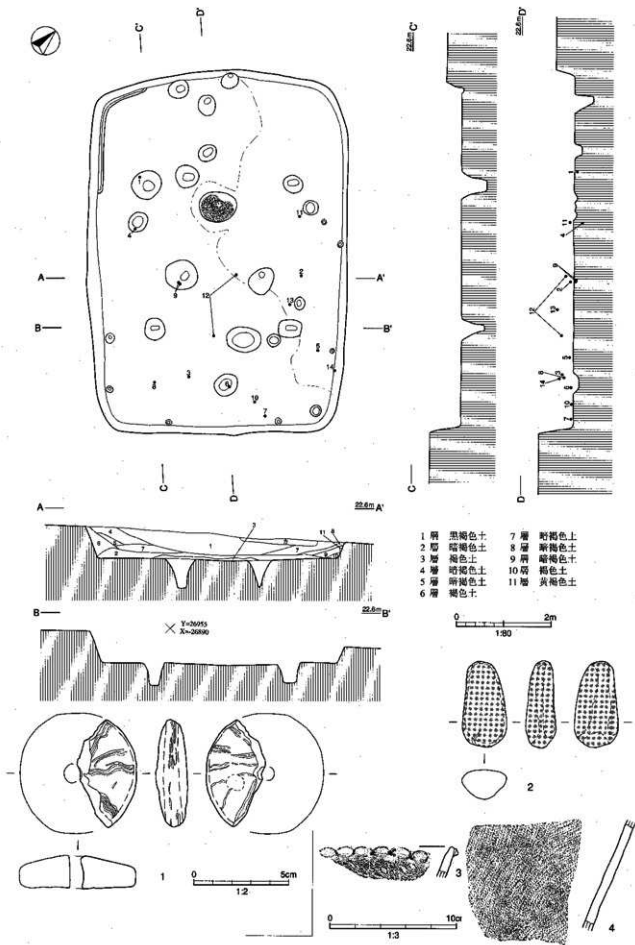


图99 A089

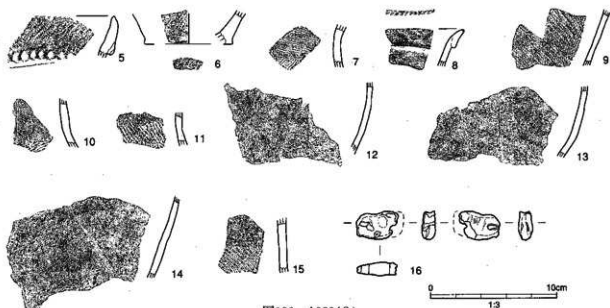


図100 A089(2)

表42 A089遺物観察表

(単位:cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高 の寸法	重量	材質	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 土製品	上下側面に襷指による施文がされる	2.90×5.70×厚さ1.70	74.0g	テズクネ	褐 軟	粗 粗砂粒多	1/3	土製紡錘車
2	石製品 磨石	小形礫のほぼ全面良好な研磨痕あり。ただし通常の磨石とは異なり、礫の原形をほぼとどめており、砥石的な用途も考えられる	6.80×3.50×厚さ2.40	74.0g					母石→不明 砥石?
3	弥生 壺	輪積 外面 隆帯文を貼付(隆帯上に指環による押圧を加える)→施文具不明の押圧 内面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 口唇下をヘラ状工具による凹線状に強くなぞられ、段状になっている	-×-×-			明褐色 硬	青 粗砂粒多	口縁部 破片	口縁→やや外反
4	弥生 壺	輪積 外面 付加条縄文 内面 ナデ	-×-×-			明褐色 軟	粗 粗砂粒多	胴部 破片	外面少量ス ス付着
5	弥生 壺	輪積 外面 L R 単節縄文 下沿→半円状の工具による刻み目 内面 ヨコナデ 器面剥離著しい 口縁部→複合口縁	-×-×-			明褐色 軟	粗 粗砂粒多	口縁部 破片	
6	弥生 壺	輪積 外面 摺糸文 内面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 底部→底面に木炭痕	-×-×-			暗赤褐色 硬	密 砂粒多	底部 破片	
7	弥生 壺	輪積 外面 襷指による縦区画充填(波状)文→格子目文 内面 ヨコヘラミガキ	-×-×-			暗褐色 硬	密粗砂 粒雲母 石多	頸部 破片	外面スス付着
8	弥生 壺	輪積 外面 口唇上→L R 単節縄文 口縁部・頸部→ヨコナデ 内面 ヨコナデ 内外面磨耗著しい	-×-×-			暗褐色 軟	粗 砂粒多	口縁部 破片	内面スス付着
9	弥生 壺	輪積 外面 摺糸文 内面 ナデ	-×-×-			明褐色 滑	滑 砂粒多	胴部 破片	
10	弥生 壺	輪積 外面 襷指による縦区画充填(横)文→付加条縄文 内面 ヨコナデ	-×-×-			暗褐色 滑	砂粒多	頸部 破片	外面少量ス ス付着
11	弥生 壺	輪積 外面 縦位の襷指波状文→摺糸文 内面 ヘラケズリ	-×-×-			赤褐色 硬	滑 砂粒多	頸部 破片	

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
12	土師器 甕	—×—×— 輪積 外面 ナデ後一部ミガキ 内面 ナデ後一部ミガキ	暗赤褐 青	普 砂粒 雲母多	胴部 破片	外面スス付着
13	土師器 甕	—×—×— 輪積 外面 ナデ後一部ミガキ 内面 ナデ	暗褐色 青	普 砂粒 雲母多	胴部 破片	黒斑有
14	土師器 甕	—×—×— 輪積 外面 ナデ後一部ミガキ 内面 ナデ	暗赤褐 青	普 砂粒多	胴部 破片	黒斑有 内面スス付着
15	弥生 甕	—×—×— 輪積 外面 ナデ→渦糸文 内面 ナデ	暗褐 硬	普 粗砂粒多	胴部 破片	
16	石製品 有孔 垂飾	1.50×2.20×厚さ0.70 2.60g 有孔垂飾の一部。両端に孔が穿たれていたものと思われる 加工は非常に軽い				母石—チャート?

A089

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は住居跡南側に広がる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に11層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から床面直上にかけて小破片が少量出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。印手系土器を主体に出土する住居跡である。

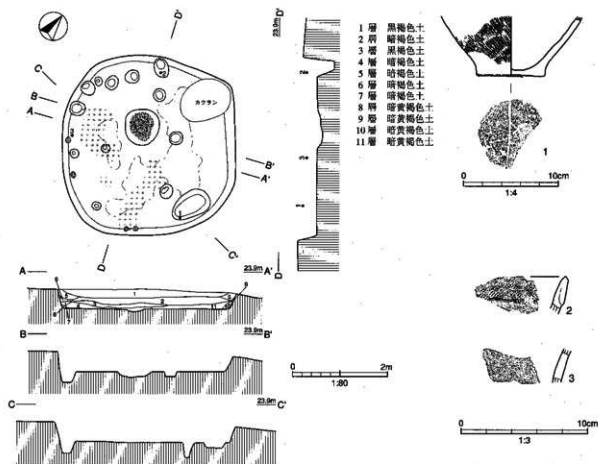


図101 A090

A090

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は比較的広範囲に広がる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上る。

覆土は色調を基本に11層に分層。層として形成するには至っていないが住居跡南側において比較的多量の焼土、炭化物を検出していることから住居廃絶時に火を焚いたと思われる、人為的な埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が少量出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。印手系土器を主体に出土する住居跡で、本遺跡においては小型の住居跡である。

表43 A090遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の 特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	一×7.20×(6.30) 輪積 外面 付加糸縄文 内面 器面の剥離著しく不明 底面に木葉痕	明褐色 普通	粗 粗砂粒多	1/4 底部	胎土-チャート・石英等多
2	弥生 甕	輪積 外面 L R 単節縄文+ヨコナデ 器面の剥離・磨耗著しい 内面 ヘラケズリ後ヨコヘラミガキ 口縁-複合口縁	暗褐色 軟	粗 粗砂粒多	1/4 口縁 破片	外面スス付着 胎土-雲母・石英
3	弥生 甕	輪積 外面 タテナデ 内面 ナデ	暗褐色 普通	粗 粗砂粒 雲母多	鋼破片	外面スス付着

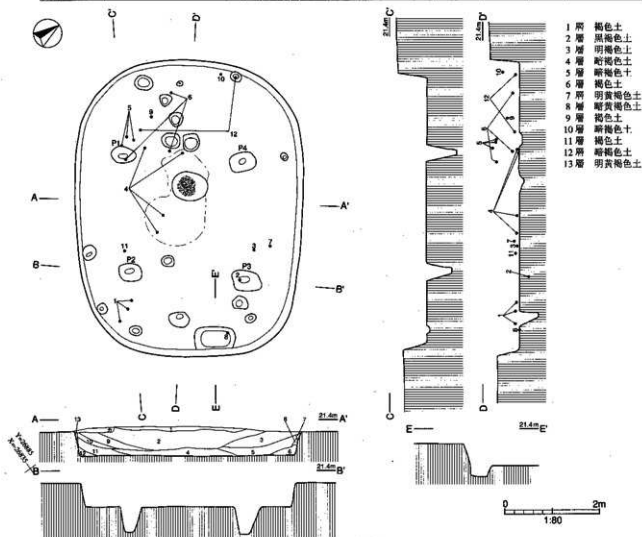


図102 A091

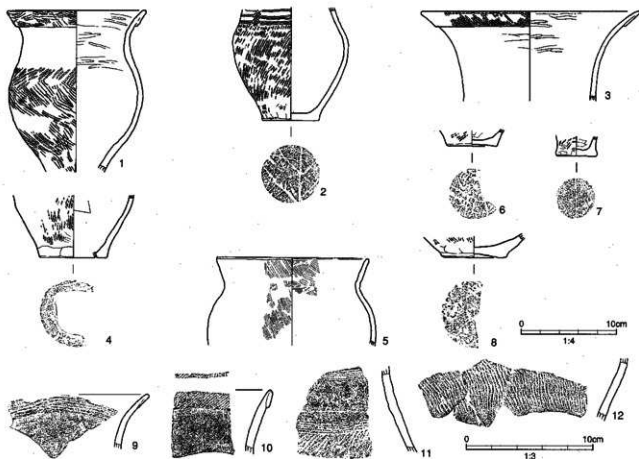


図103 A091(2)

表44 A091遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	14.6××(17.2) 外面 口径上~口径部-Lの燃糸 胴部-ナテ 胴部-1位LR単節縄文-Lの燃糸 内面 口径~胴部-ヘラケズリ 後ヘラミガキ 胴部-ナテ 口径-複合口径・外反	明褐色 硬	密 砂粒多	完形	底部欠損
2	弥生 甕	-×6.0×(12.1) 胴部 柳摺による斜格子文をはきで、柳摺横走文 胴部 付加条縄文、下端ヘラケズリ木葉痕	暗褐色 硬	普 砂粒多	2/3	
3	弥生 甕	(23.0)××(9.60) 外面 口径上・口径部-RL単節縄文 胴部-ヨコナテ 内面 ヨコナテ後一部ヨコヘラミガキ 口径-複合口径・外反	明褐色 普	粗 粗砂粒多	1/4	口径部 胎上-石英等多
4	弥生 甕	-×7.10×(6.70) 外面 L R単節縄文 ヘラケズリ後一部ヘラミガキ 下端-ヘラケズ リ 内面 ヘラケズリ後ヨコナテ 底部-平底 底面に木葉痕	暗褐色 硬	普 粗砂粒多	1/4 底部片	
5	弥生 甕	(20.0)××(9.30) 胴部 「く」の字状に屈曲 外面 口径部-ヨコナテ 口径~胴部-ナナメのハケ 内面 口径部-ヨコ及びナナメのハケ 胴部-ナテ	暗褐色 普	普 砂粒多	1/4 口径部片	
6	弥生 甕	-×5.40×(1.90) 外面 燃糸文 内面 ヘラケズリ後ナテ 底部-やや上げ底 底面に木葉痕	暗褐色 硬	普 砂粒少	1/4 底部片	
7	弥生 小型甕	-×4.40×(2.10) 外面 L R単節縄文 下端-ヘラケズリ後 部ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ナテ 底部-平底 底面に木葉痕	暗褐色 硬	普 砂粒少	1/4 底部片	
8	弥生 甕	-×(7.00)×(2.60) 外面 燃糸文 下端-指痕による押さえのあと？ 内面 ヨコナテ 底部-やや上げ底 底面に木葉痕	暗褐色 硬	密 砂粒	1/4 底部片	

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
9	弥生甕	外面 捺糸文→ヨコナア後ヘラミガキ 内面 ヨコナア後ヨコヘラミガキ 口縁-複合口縁・外反	黒褐 普	密 砂粒多	口縁 部片	外面スス附着
10	弥生甕	外面 口唇上・口縁部-無節縄文→クテヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ヨコヘラミガキ 口縁-複合口縁・やや外反	暗褐 普	普 砂粒多	口縁 部片	外面スス多量 附着
11	弥生甕	外面 櫛歯の横走文→無文(もしくはナダ?)→櫛歯の横走文→L R縄 文? 内面 器面剥離により不明	明褐 軟	粗 粗砂粒多	頸部片	
12	弥生甕	外面 捺糸文 内面 ヨコナア	黒褐 普	密 砂粒多	胴部片	外面スス附着

A091

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面が部分的に広がる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上る。

覆土は色調を基本に13層に分層。人為的な堆積が想定される。

遺物 覆土中から床面直上にかけて比較的多く出土。

所見 古墳前期の土師器と考えられる土器も出土しているが、全体の遺物出土状況から弥生時代後期の住居跡と判断した。印手系土器を主体に出土する住居跡である。

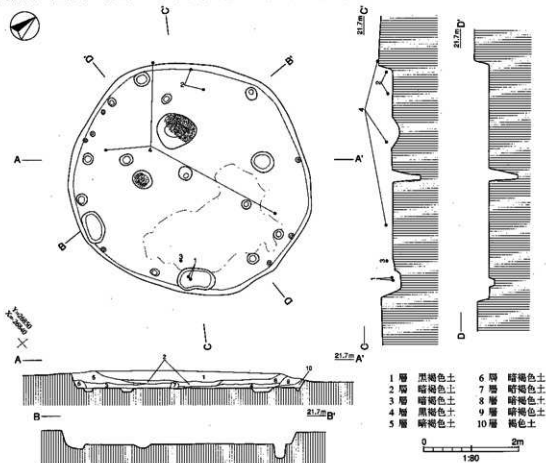


図104 A092

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は住居跡南東部で一部検出。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上る。

覆土は色調を基本に10層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

炉は2基検出されたが、ピットの配列、覆土の堆積状況から拡張等の形跡は認められず、当初から2基あったものと思われる。検出状況及び火床の観察等からR1が主たる炉でR2が補助的な炉であったと考えられる。

遺物 覆土中から少量出土。(5)については覆土中の出土である。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。印手系土器を主体に出土する住居跡で、本遺跡においては小型の住居跡である。

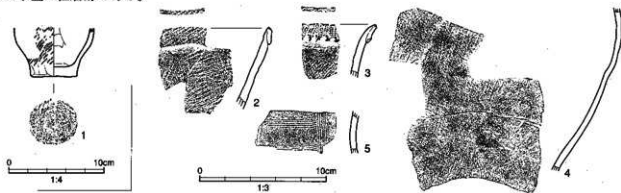


図105 A092(2)

表45 A092遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の 特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 小型壺	-×5.00×(5.20) 外面 L R 単筋縄文 下端ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ 底部平底 底間に木葉痕	暗褐 硬	密 砂粒少	1/4 以下 底部	
2	弥生 壺	-×-×- 外面 口唇、口縁、胴部とも付加条縄文 内面 ヘラミガキ	暗褐 硬	密 雲母微	口縁 部片	複合口縁
3	弥生 壺	-×-×- 外面 口唇、口縁ともに付加条縄文、口縁下端、縄文原体の押圧、 頸部、無文、胴部付加条縄文 内面 ヘラミガキ	黒褐 硬	密	口縁 部片	複合口縁
4	弥生 壺	-×-×- 外面 胴部全面に付加条縄文 内面 ナテ後 部ヘラミガキ	黒褐 硬	密 雲母 白色粒	胴部 片	
5	弥生 壺	-×-×- 外面 梯描横走文を梯描縦走文で区画 内面 ヘラミガキ	黒褐 硬	密 雲母微 白色粒	頸部 片	

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は炉を中心として広範囲に広がる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上る。

覆土は色調を基本に13層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

炉は2基検出されたが、ピットの配列、覆土の堆積状況から拡張等の形跡は認められず、炉の作り替えが行われたと考えられる。検出状況及び各炉の覆土の観察等からR2からR1へ作り替えたと判断される。

遺物 床面直上から覆土中にかけて出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。印手系土器と南関東系土器とが共伴する住居跡である。

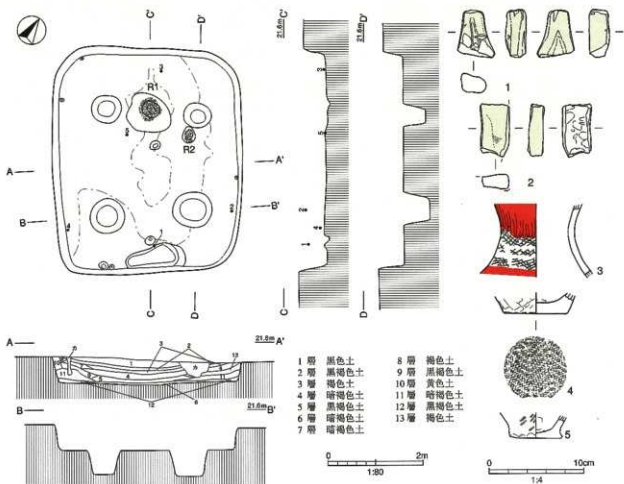


図106 A093

表46 A093遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	石器 砥石	5.00×4.00×2.20 47.4g 一端を欠くが四面に研磨痕があり、特に幅広の二面には溝状に研磨痕が残る				母石-砂岩
2	石器 砥石	5.50×3.10×1.80 47.2g 一部が残存するだけであるが、残存部の全面に研磨痕が見られ平滑				砂岩
3	弥生 壺	-×-(7.80) 外面 頸部-上半クテハラミガキ 下半-網目状鬚糸文 内面 器面剥離が著しいがナデと思われる	明褐色 軟	普 砂粒多	1/4 以下 頸部片	赤彩
4	弥生 甕	-×6.60×(2.20) 外面 ハラケズリ後ナデ 内面 ハラケズリ 底部-平底 網代痕-2本越え1本潜り1本割り	褐色 硬	普 砂粒少	1/4 以下 底部片	
5	弥生 甕	-×5.60×(2.70) 外面 無筋縄文 下端-ハラケズリ 内面 ナデ 底面-ハラケズリ	暗褐色 普	密 粗砂粒少	1/4 以下 底部片	

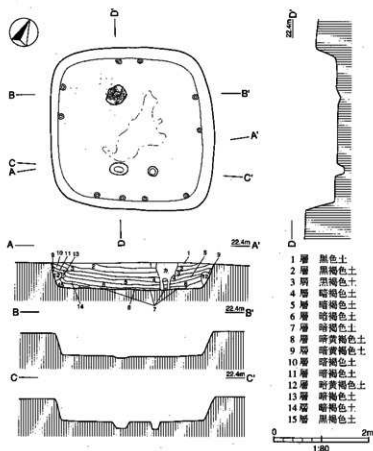


図107 A094

A094

遺構 ロームを踏み固めた床で、住居跡中央部はやや軟弱であった。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上る。

覆土は色調を基本に15層に分層。覆土上層にて若干の焼土を検出しているもの、おおむね、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が少量出土したのみである。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。本遺跡においては小型の住居跡である。

- 1層 黒色土
- 2層 黒褐色土
- 3層 黒褐色土
- 4層 暗褐色土
- 5層 暗褐色土
- 6層 暗褐色土
- 7層 暗褐色土
- 8層 暗褐色土
- 9層 暗褐色土
- 10層 暗褐色土
- 11層 暗褐色土
- 12層 暗褐色土
- 13層 暗褐色土
- 14層 暗褐色土
- 15層 黒褐色土

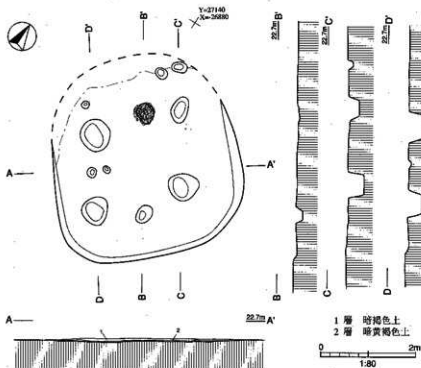


図108 A095

A095

遺構 ロームを踏み固めた床である。壁については、住居跡南側でわずかに立ち上がりを検出したのみで、北側においては検出するには至らなかった。

覆土は色調を基本に2層に分層。自然堆積による埋没と思われる。

遺物 覆土中から小破片が少量出土したのみである。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。本遺跡においては小型の住居跡である。

- 1層 暗褐色土
- 2層 暗褐色土

A096

遺構 ロームを踏み固めたしっかりとした床である。壁はロームの壁ではほぼ垂直に立ち上る。

覆土は色調を基本に4層に分層。覆土中層で焼土を多量に含む層を検出しており、人為的な堆積が想定される。

遺物 床面直上から覆土中にかけて少量出土。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。本遺跡においては小型の住居跡である。

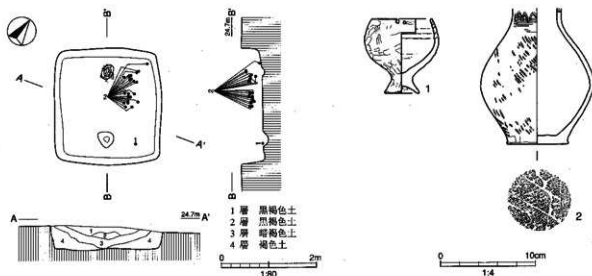


図109 A096

表47 A096遺物観察表

(単位:cm)

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 台付甕	6.40×3.70×8.00 輪積 外面 口縁～胴部～ヘラケズリ後一部ヘ ラミガキ 脚部～ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 ナテ 胴内面～ヘ ラケズリ後ヘラミガキ	暗褐色 青	砂粒多	完形	ミニチュア土器
2	弥生 甕	～×6.60×(14.5) 輪積 外面 頭部～櫛掻横走波状文～櫛掻横走文 胴部～付加糸縄文 下端 ～ヘラケズリ 内面 器面刺履のため不明	明褐色 軟 黒褐色	粗 粗砂粒多	3/4	

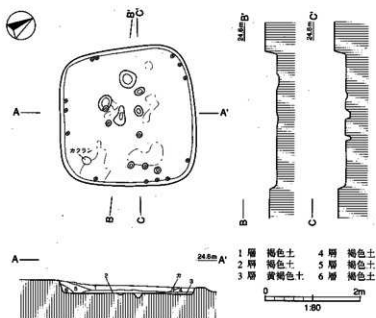


図110 A097

A097

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は部分的に検出された。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上る。

覆土は色調を基本に6層に分層。焼土、炭化材を含む層が多く、人為的な埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が少量出土したのみである。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。本遺跡においては小型の住居跡である。覆土の観察及び遺物の出土状況から本住居跡は廃絶の際に火を燃やし、遺物は持ち去ったものと考えられる。

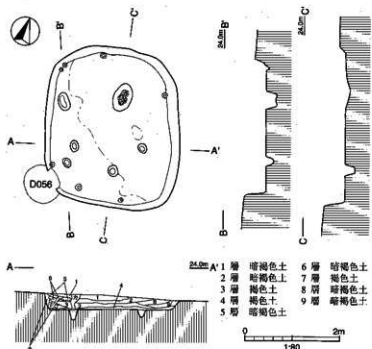


図111 A098

A098

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は広範囲に広がる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上る。

覆土は色調を基本に9層に分層。覆土上層に微量の焼土、炭化材を含むがおおむね自然堆積と思われる。D056と重複関係にあるが、覆土の観察から本住居跡の方が古い。

遺物 覆土中から小破片が少量出土したのみである。

所見 出土遺物、規模及び形態から弥生時代後期の住居跡と判断した。本遺跡においては小型の住居跡である。

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は住居跡南側に広がる。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上る。

覆土は色調を基本に12層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土中にかけて比較的多く出土した。

所見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。印手系土器と南関東系土器とが伴する住居跡である。本遺跡においては小型の住居跡である。

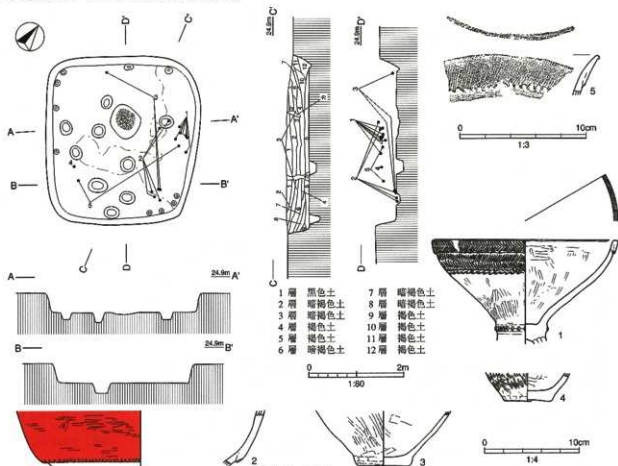


図112 A099

表48 A099遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	粘土	遺存	備考
1	弥生 高坏	外面 口縁-羽状縄文 下端-縄文原体の押圧 口唇上-LR卑踏縄文 体部-羽状縄文→結節2段→ナア後低位のヘ ラミガキ 接合部-突起状に縄文原体の押圧 内面 ナア後ヘラミガキ		暗褐色 青	粗 粗砂粒多	1/2	押圧を施した突起をもつ
2	弥生 壺	外面 胴部-ナア後ヨコヘラミガキ一部タテヘラミガキ 有段部下端 に刻み目 内面 器面の剝離が著しく不明 胴部-有段部をもつ	一×一×(6.00)	褐色 青	粗 粗砂粒多	1/4 以下	赤影
3	弥生 壺	外面 ヘラケズリ後タテヘラミガキ 下端-ヨコヘラケズリ 内面 ヘラナア	一×5.30×(5.80)	明褐色 青	普 砂粒多	1/4 以下	胴-底部遺存
4	弥生 壺	外面 付加糸縄文 下端-ナア部ヘラケズリ 内面 ヘラナア 底部-平底	一×5.00×(3.00)	暗褐色 青	普 砂粒多	1/4 以下	胴-底部遺存
5	弥生 壺	外面 口唇上~口唇部-付加糸縄文 口縁下端-棒状工具による剝突 頸部-ナア 内面 ナア 口縁-やや外反		暗褐色 青	普 砂粒少	1/4 以下	口縁部片遺存

表49 竪穴住居跡一覧

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模：長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位置 周溝・備考
A-055	F9-69	隅丸長方形 4.64×4.12×0.51 N-44°-W	床面 ロームを踏み固めた床で、中央部がやや軟弱。硬化面 部分的にあり	カクランのため不明 周溝 一部有り 周溝幅 0.12m
		覆土中に少量出土。住居南側にやや集中	色調を基本に12層に分層。自然堆積	
A-056	F9-78	隅丸長方形 4.24×3.31×0.32 N-34°-W	床面 ロームを踏み固めた床。住居中央部がやや軟弱。硬化面 部分的にあり	地床炉 中央からやや北による 周溝 検出されず
		覆土中に少量出土	色調を基本に13層に分層。自然堆積	
A-057	F9-49	小判形 4.43×3.54×0.42 N-36°-W	床面 ロームを踏み固めた床 住居中央部がやや軟弱	地床炉 中央からやや北による
		遺物量少ない。床直交形遺物1点出土	色調を基本に16層に分層。おおむね自然堆積であるが強設の途中で焚かれる	
A-058	G9-61	不整形 4.00×3.52×0.12 N-13°-W	炉が検出されていないが、床はロームを踏み固めた床で、硬化面部分的にあり	炉 検出されず 柱穴 2本 周溝 なし
		遺物量少ない	色調を基本に9層に分層。自然堆積	
A-059	G9-84	小判形 4.13×3.50×0.44 N-35°-W	床面 ロームを踏み固めた床 硬化面 炉を中心に広範囲に広がる	地床炉 中央からやや北による 周溝 一部有り 周溝幅 0.12m
		覆土中から小破片2点のみ	色調を基本に15層に分層。自然堆積	
A-060	G10-22	隅丸方形 3.23×2.93×0.31 N-31°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面 炉を中心に住居中央部に広範囲に広がる	地床炉 中央からやや北による 周溝 検出されず
		覆土中から少量出土	色調を基本に9層に分層。自然堆積	
A-061	G10-12	小判形 6.41×5.40×0.31 N-47°-W	床 ロームを踏み固めた床 住居中央部はやや軟弱である	炉 検出されず 柱穴 4本 周溝 全周 周溝幅 0.23m
		覆土中に少量出土	色調を基本に13層に分層。自然堆積	
A-062	G10-4	不整形 2.78×2.90×0.46 N-41°-W	床ロームを踏み固めた床	地床炉 中央からやや北による 柱穴 1本 周溝 検出されず
		遺物量少ない	色調を基本に11層に分層。自然堆積	
A-063	G10-23	不整形 3.74×3.34×0.44 N-40°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面 炉を中心に住居中央に広がる	地床炉 中央からやや北による 柱穴 2本 周溝 一部有り 周溝幅 0.12m
		遺物量は少ない	色調を基本に19層に分層。自然堆積	
A-064	G10-3	隅丸長方形 4.90×3.78×0.58 N-39°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面 炉を中心に住居中央に広範囲に広がる	地床炉 中央からやや北 西壁による 柱穴 4本 周溝 一部有り 周溝幅 0.12m
		遺物量は少ない	色調を基本に15層に分層。自然堆積	

遺構番号	検出調査区	平面形 規模：長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位 置 周溝・備考
A-065	G10-4	隅丸長方形 4.80×4.26×0.56 N-50°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面 炉を 中心に住居中央で広範囲に広がる	地床炉 中央からやや北 西側壁による 柱穴 4本 周溝 検出されず
		遺物は少ない	色調を基本に12層に分層。自然堆積	
A-066	G9-94	小判形 8.98×7.18×0.68 N-50°-W	床 ロームを踏み固めた床。住居中央はや や軟弱	地床炉 2基。2基共に 中央からやや北による 柱穴 4本 周溝 検出されず 柱穴の配列から拡張が考 えられる
		遺物は少ないが、床直遺物が比較的 多い	色調を基本に18層に分層。自然堆積	
A-067	G9-87	隅丸方形 3.10×2.86×0.20 N-56°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面 一部 あり	炉 検出されず 周溝 検出されず
		遺物は少ないが床直遺物あり	色調を基本に12層に分層。自然堆積	
A-068	G9-96	小判形 8.51×6.50×0.52 N-66°-W	床 ロームを踏み固めた床。住居中央はやや 軟弱。硬化面 一部あり	地床炉 4基有り 柱穴 6本うち2本は並 張後のものと考えられる 周溝幅 0.12m
		遺物は少ない	色調を基本に15層に分層。自然堆積	
A-069	G9-87	小判形 7.40×5.64×0.34 N-51°-W	床 ロームを踏み固めた床。住居中央はや や軟弱	地床炉 中央からやや北 西壁壁による。2基有り 柱穴 4本 周溝 一部有り 周溝幅 0.1m
		覆土上層～床直にかけて大量に出土	色調を基本に16層に分層。自然堆積	
A-070	G9-19	隅丸方形 3.20×3.00×0.30 N-24°-W	床 ロームの床でやや軟弱。掘り込みの浅 い住居跡	地床炉 中央からやや北 による 柱穴 4本 周溝 検出されず
		遺物は少ない	色調を基本に9層に分層。自然堆積	
A-071	H9-12	小判形 -×-×0.52	床 ロームを踏み固めた床 中央部はやや軟弱	地床炉 周溝 一部有り 周溝幅 0.21m 調査区外へ遺構がのびる
		遺物は少ない	色調を基本に20層に分層。自然堆積	
A-072	H9-12	小判形 4.20×3.60×0.40 N-16°-W	床 ロームを踏み固めた床で、全体的にし っかりしている	地床炉 中央からやや北 による 柱穴 4本 周溝 一部有り
		床直から覆土中にかけて比較的多く出 土	色調を基本に11層に分層。自然堆積	
A-073	H8-93	小判形 5.90×4.70×0.60 N-37°-W	床 ロームを踏み固めた床で全体的にし っかりしている	地床炉 中央から北によ り、柱穴間 柱穴 4本 周溝 一部有り 周溝幅 0.18m
		覆土中から少量出土	色調を基本に16層に分層。自然堆積	
A-074	H8-94	隅丸長方形 -×5.41×0.31	床 ロームを踏み固めた床で壁際に硬化面 が広がる。住居中央ではやや軟弱	地床炉 中央から北によ り、柱穴間 柱穴 4本 周溝 一部有り 周溝幅 0.2m 調査区外へ遺構がのびる
		覆土中から小破片が少量出土	色調を基本に15層に分層。自然堆積	

遺構番号	検出 調査区	平面形 規模；長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	焼跡施設・位置 周溝・備考
A-075	HB-94	小判形 5.40×4.70×0.60 N-30°-W	床 ロームを踏み固めた床で壁際に硬化面が広がる。住居中央ではやや軟弱	地床炉 中央から北による 柱穴 2本 周溝 一部有り 周溝幅 0.14m
		覆土中から小破片が少量出土	色調を基本に17層に分層。自然堆積	
A-076	H9-2	小判形 11.0×8.30×0.50 N-33°-W	床 ロームを踏み固めた床。中央部はやや軟弱	地床炉 中央からやや北により、柱穴間 柱穴 4本 周溝 全周 周溝幅 0.2m
		床面直上から覆土中にかけて少量出土	色調を基本に16層に分層。自然堆積	
A-077	HB-82	隅丸長方形 6.10×5.00×0.60 N-24°-W	床 ロームを踏み固めた床で、全体的にしっかりしている	地床炉 中央から北による 柱穴間 柱穴 4本 周溝 検出されず
		床面直上から覆土中にかけて少量出土 壁際からの出土が比較的多い	色調を基本に17層に分層。自然堆積	
A-078	HB-75	不整形 6.10×5.00×0.50 N-31°-W	床 ロームを踏み固めた床。別の側面に一部硬化面有り	地床炉 中央から北による 柱穴間 柱穴 4本 周溝 一部有り 周溝幅 0.2m
		覆土中から小破片が少量出土したのみ	色調を基本に13層に分層。自然堆積	
A-079	HB-74	不整形 6.12×5.40×0.50 N-38°-W	床 ロームを踏み固めた床。全体的にしっかりしている	地床炉 中央から北による 柱穴間 柱穴 4本 周溝 一部有り 周溝幅 0.21m
		覆土中から床面直上にかけて少量出土 住居南側及び東側コーナーでやや多め	色調を基本に14層に分層。自然堆積	
A-080	HB-73	小判形 10.33×8.10×0.50 N-27°-W	床 ロームを踏み固めた床。中央部やや軟弱	地床炉 中央から北により、柱穴間 柱穴 4本 周溝 はほぼ全周 周溝幅 0.11m 壁柱穴の配列から拡張と考えられる
		床面直上から覆土中にかけて少量出土 床面レベルで金属品出土	色調を基本に9層に分層。自然堆積	
A-081	HB-64	隅丸長方形 11.2×8.50×0.80 N-40°-W	床 ロームを踏み固めた床。住居南側に硬化面が広がる	地床炉 中央から北による 柱穴間 柱穴 4本 周溝 はほぼ全周 周溝幅 0.21m
		床面直上から覆土中にかけて土器を中心に多量に出土	色調を基本に25層に分層。自然堆積	
A-082	HB-54	不整形 4.60×4.90×0.30 S-32°-W	床 ロームの床であるが、全体的に軟弱な床である	地床炉 南側側による 柱穴 4本 周溝 検出されず
		床面直上から覆土中にかけて少量出土	色調を基本に12層に分層。自然堆積	
A-083	HB-43	不整形 3.60×-×0.40 N-53°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面 部分的にあり	地床炉 西側側による 周溝 検出されず
		床直上、住居跡北側で土器が比較的多く出土	色調を基本に14層に分層。自然堆積	
A-084	HB-23	隅丸方形 3.80×4.10×0.30 N-26°-W	床 ロームの床。硬化面 一部にあり	地床炉 中央から北による 柱穴 4本 周溝 検出されず
		覆土中から小破片が少量出土	色調を基本に9層に分層。自然堆積	

遺構番号	検出調査区	平面形 規模：長軸×短軸×埋高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位置 周溝・備考
A-085	H8-24	隅丸長方形 6.50×5.30×0.20 N-45°-W	床 ロームの床で軟弱である。硬化面は認められない	地床炉 2基有り 中央から北西による 周溝 検出されず
		少量出土	色調を基本に7層に分層。自然堆積	
A-086	H8-25	隅丸長方形 4.80×4.00×0.70 N-34°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面 住居 中央に広範囲に広がる	地床炉 中央から北による 周溝 検出されず
		覆土中から床直にかけ比較的多く出土	色調を基本に19層に分層。自然堆積	
A-087	H7-84	隅丸長方形 7.30×5.60×0.70 N-34°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面 住居 壁際で検出。住居中央はやや軟弱	地床炉 中央からやや北による 柱穴 4本 周溝 一部にあり 周溝の検出状況から拡張されたものと考えられる
		遺物量は少ない	色調を基本に14層に分層。自然堆積	
A-088	H7-62	楕円形 4.40×3.50×0.50 N-53°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面は広範囲 に広がる	地床炉 中央やや西による 柱穴 (4本) 周溝 一部有り 周溝幅 0.15m
		遺物量は少ない	色調を基本に9層に分層。自然堆積	
A-089	G7-49	隅丸長方形 7.70×5.50×0.70 N-47°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面 住居 南西に広範囲に広がる	地床炉 中央からやや北西による 周溝 一部有り 周溝幅 0.22m
		遺物量は少ない	色調を基本に11層に分層。自然堆積	
A-090	G7-10	不整形 3.90×3.80×0.40 S-23°-W	床 ロームを踏み固めた床	地床炉 中央からやや北による 周溝 検出されず
		遺物量は少ない	色調を基本に11層に分層。人為的堆積か？	
A-091	G6-83	小判形 6.20×4.70×0.50 N-55°-W	床 ロームを踏み固めた床。	地床炉 中央からやや北西による 柱穴 4本 周溝 検出されず
		遺物量は少ない	色調を基本に13層に分層。人為的堆積	
A-092	G6-44	不整形 4.80×5.00×0.30 N-58°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面 住居 南東部で一部検出	地床炉 2基あり、それぞれ中央から西側による 周溝 検出されず
		遺物量は少ない	色調を基本に10層に分層。自然堆積	
A-093	G10-32	隅丸長方形 4.68×3.90×0.54 N-32°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面 炉を 中心として広範囲に広がる	地床炉 2基ありそれぞれ中央から北側による 周溝 検出されず
		床直上から覆土中にかけて出土	色調を基本に13層に分層。自然堆積	
A-094	G9-38	隅丸長方形 3.44×3.34×0.44 N-27°-W	床 ロームを踏み固めた床。住居跡中央は やや軟弱である	地床炉 住居跡中央から北面コーナーによる
		遺物量は少ない	色調を基本に15層に分層。自然堆積	

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆上の状況	燃焼施設・位置 周溝・備考
A-095	G9-49	隅丸方形 4.31×3.84×0.03 N-34°-W	床 ロームを踏み固めた床	地床炉 住居跡中央から 北側コーナーによる 周溝 検出されず
		遺物量は少ない	色調を基本に2層に分層。自然堆積	
A-096	H8-55	方形 2.43×2.21×0.42 N-35°-W	床 ロームを踏み固めたしっかりとした床	地床炉 住居跡中央から 北西壁による 周溝 検出されず
		覆土中からの出土が多い	色調を基本に4層に分層。人為的堆積	
A-097	H8-72	隅丸方形 3.00×2.90×0.20 N-52°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面 部分的にあり	地床炉 住居中央から西 壁側による 周溝 検出されず 焼失家屋か?
		出土量はごくわずかであった	色調を基本に6層に分層。炭化材・焼土粒 を含み人為的堆積	
A-098	H8-71	隅丸長方形 3.40×2.90×0.30 N-12°-W	床 ロームを踏み固めた床で硬化面が広範囲に広がる	地床炉 住居中央から北 側による 周溝 検出されず
		出土量はごくわずかであった	色調を基本に9層に分層。覆土上層に炭化 材・焼土を微量含む。自然堆積	
A-099	H8-43	隅丸長方形 3.60×3.20×0.50 N-37°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面が住居 南側に広がる	地床炉 中央から北西壁 による 周溝 検出されず
		床面直上から覆土上層にかけて比較的 多く出土した	色調を基本に12層に分層。自然堆積	

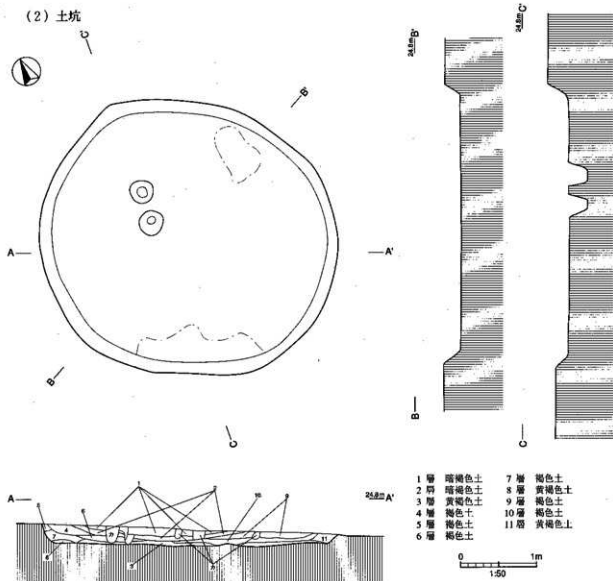


図113 D046

D046

検出地区 H8-27G

遺構 長軸4.0m、短軸3.8m、深さ0.22m、長軸の方位は、N-2°Wの不正形を呈する土坑である。底面はロームの底面ではほぼ平坦。一部に踏み固められた部分がある。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。付属施設として底面に小穴を2基検出。

覆土は色調を基本に11層に分層され、自然堆積による埋没が考えられる。

遺物 覆土中から小破片が少量出土したのみ。

所見 当初、規模・形態から住居跡としての検討も行ったが、炉が検出されず、遺物出土量も少ない。これらの事などから、ここでの判断としては、出土遺物等から弥生時代後期とした。

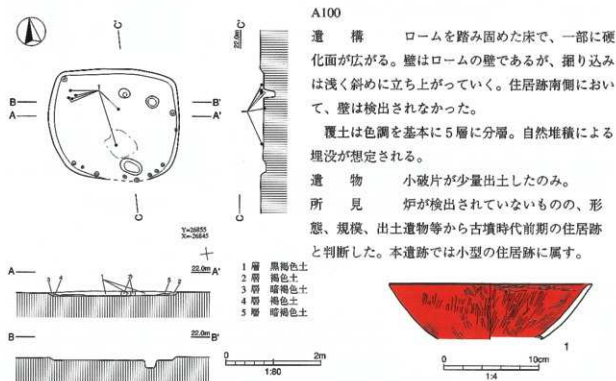
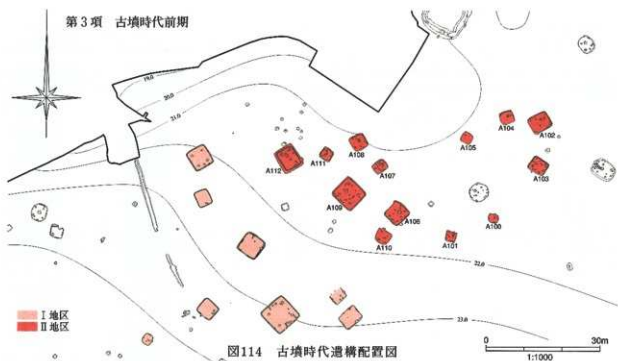


表50 A100遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高坏	(214)××(59) 輪絞 口縁；二次的板蒸 外面 タテハラミガキ 内面 ヨコハラミガキ後タテハラミガキ		明橙褐色	粗砂較少	1/4	内面スス付着 赤彩

A101

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は住居跡壁際に広範囲に広がる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に14層に分層。焼土が広範囲から検出され、焼失住居の可能性がある。人為的堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土中にかけて少量出土。

所見 出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と判断した。本遺跡では小型の住居跡に属す。

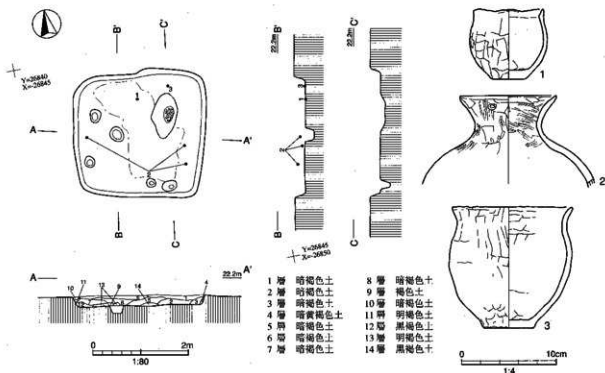


図116 A101

表51 A101遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 鉢	75×38×75 外面 ヘラケズリ後ナデ 内面 ヘラケズリ後コナデ	明褐色 普	普 砂粒多	ほぼ 完形	
2	土師器 壺	102×-×(94) 外面 ヘラケズリ後タテハラミガキ 内面 ヘラケズリ後コハラミガキ	暗赤褐色 硬	普 砂粒少	1/4 口縁- 胴部	
3	土師器 小型甕	128×55×13 輪積 外面 口縁部-ヘラケズリ 胴部-ヘラナデ 胴下端-ヘラケズリ 内面 口縁部-ヘラケズリ 胴部-ナデ 胴下端-ヘラケズリ 口縁・やや外反 底部・平底	橙褐色 普	粗 粗砂粒 多	完形	風痕有 外面スス付着

A102

遺構 ロームを踏み固めた床で、一部に硬化面が広がる。貯蔵穴の周囲に凸堤有り。壁は、わずかであるがロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に6層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土下層にかけて多量に出土。

所見 出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と判断した。

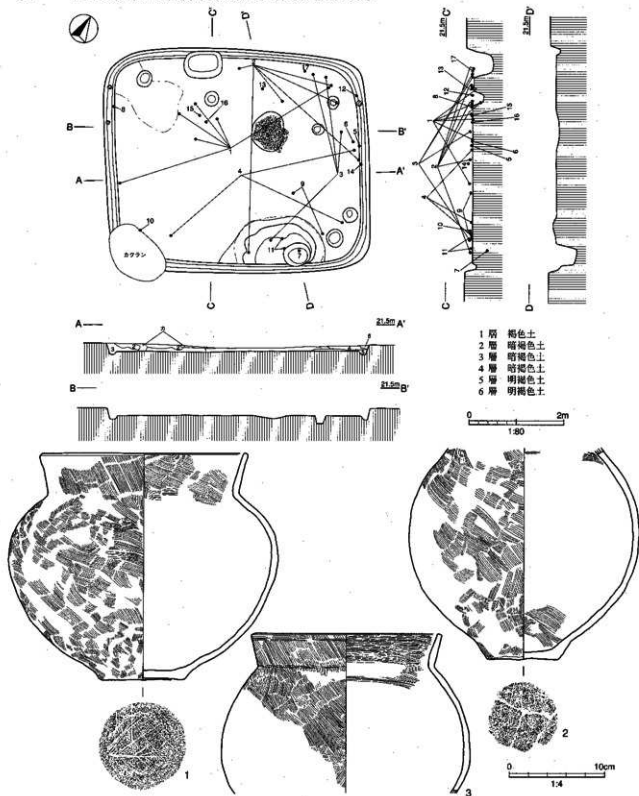
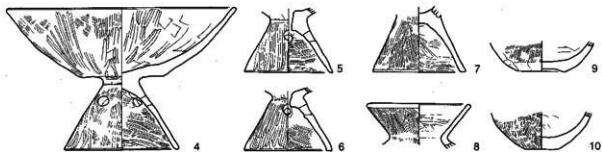
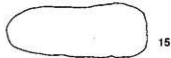
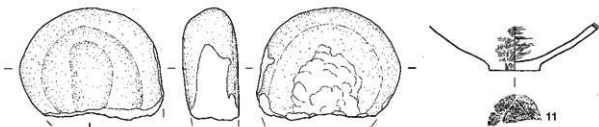


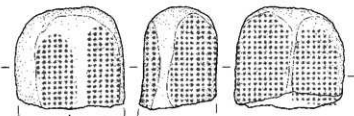
図117 A102



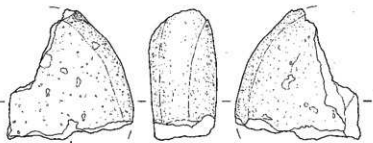
0 10cm
1:4



15



16



17



12



13



14



18

0 10cm
1:3

图118 A102(2)

表52 A102遺物観察表

(単位mm)

No	種別形	法象 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	(220)×90×243 外面 不定方向のハケ 内面 口縁部-ヨコハケ 胴部-ナデ? 器面の剥離著しい	明橙褐 軟	普 粗砂粒多	2/3	外面にスス付着 底面に木葉痕
2	土師器 甕	-×75×(225) 外面 不定方向のハケ 内面 ナデ 頸部及び胴下半-ヨコ・ナナメのハケ	明黄褐 普	密 砂粒多	1/2	底面に木葉痕
3	土師器 甕	200×-×(170) 外面 口唇-ナデ 胴部-ハケ 口縁部-ハケ後一部ナデ 内面 口縁-頸部-ヨコハケ 胴部-ナデ	暗褐 普	粗 砂粒多	1/4	外面スス付着
4	土師器 高坏	(242)×120×151 外面 タテ・斜位のハケ後タテヘラミガキ 内面 ヘラナデ後タテヘラミガキ 胴内面-ヨコハケ	明橙褐 普	密 砂粒多	2/3	体部下端に横右 脚部「ハ」の字状 底面透し孔2個
5	土師器 器台	-×94×(67) 外面 接合部-ヘラケズリ、タテヘラミガキ 内面 接合部-ヘラケズリ、ヨコ・ナナメのハケ 器受部底面-ヘラケズリ後ヘラミガキ	明橙 普	密 砂粒多	1/2 脚部	中央に貫通孔 脚部透し孔2個 「ハ」の字状
6	土師器 器台	-×94×(67) 外面 接合部-ヘラケズリ 脚部-タテハケ後タテヘラミガキ 内面 器受底面ヘラミガキ 接合部-ヘラケズリ 脚部-ハケ	橙 硬	普 砂粒多	1/2 脚部	脚部中央貫通孔 透し孔2個 「ハ」の字状
7	土師器 甕	-×96×(67) 外面 タテハケ 内面 接合部-ヘラケズリ ナナメのハケ	明赤褐 軟	普 砂粒多	1/4 脚部	脚部「ハ」の字状
8	土師器 壺	110×-×(146) 外面 口縁部-ヨコナデ後ナナメハケ 内面 ヘラケズリ後ヨコナデ後ヨコヘラミガキ	暗橙 普	普 砂粒多	1/4 口縁部 片	
9	土師器 甕	-×50×(30) 外面 タテハケ 下端-ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	暗黄褐 軟	普 砂粒多	1/4 底部片	
10	土師器 小甕	-×36×(39) 外面 タテ・ナナメのハケ 底面-ハケ 内面 ヘラナデ	明橙褐 普	普 粗砂粒多	1/4 底部片	
11	土師器 甕	-×(54)×(47) 外面 タテ・ナナメのハケ 内面 不定方向のヘラミガキ	明赤褐 普	粗 砂粒少	1/4 底部片	底面に木葉痕
12	弥生 甕	外面 ヨコナデ後ヨコヘラミガキ 下端に棒状工具による押圧無節L 内面 ヨコナデ 縄文、施文、内外面とも器面が磨 耗している	暗褐 軟	粗 砂粒多	L 部片	複合口縁
13	弥生 甕	外面 複合上部に縄の末端のループとRL単節縄文か? 器面の磨耗が著しい為判断が難しい 内面 ヘラケズリ後ヨコヘラミガキ	暗褐 軟	普 砂粒・ 雲母多	口縁 部片	複合口縁
14	弥生 甕	外面 ヨコナデ後無節L→結節1段 内面 ヨコナデ	暗褐 普	普 砂粒多	口縁 部片	複合口縁
15	石器 石皿	90×114×45 610.7g 1/3程欠くが、片面に良好な磨痕があり凹んでいる もう片面は中央部を中心に敲打痕が多く残されており凹石として使用 も考慮される				泥石
16	石器 磨石	82×87×60 509.3g 平欠、大形の磨石 粗い磨痕が残されており、一部凹みを持つ				
17	石器 石皿	104×100×56 647.3g 一部のみ残存 両面に良好な磨痕が見られるが、凹みはない				安山岩
18	弥生 甕	外面 ヨコナデ後無節L縄文→結節1段 内面 ヨコナデ後ヨコヘラミガキ	暗褐 軟	普 砂粒多	口縁 部片	複合口縁

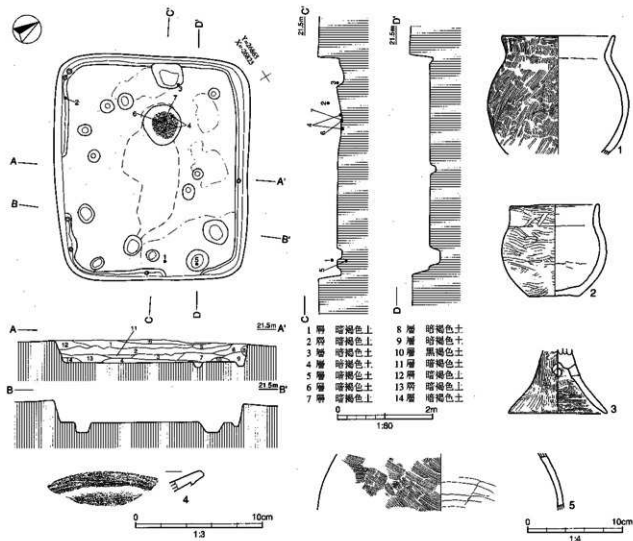


図119 A103

表53 A103遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 壺	(120)×-(126) 最大径150 輪襖 外面 口唇部-ヨコナデ 胴-胴部-ハケ 下半-一部ヘラミガキ? 内面 ナデ 口縁-やや外反 胴部-球胴状 頸部-緩やか	明褐色	密砂粒多	2/3	
2	土師器 小型壺	94×54×98 最大径110 輪襖 外面 口縁部-ナデ後ヨコヘラミガキ、一部ナメのヘラミガキ 胴部-ヘラケズリ後ヨコヘラミガキ 内面 口縁-直口縁 底部-平底、粘上直を残す ×106×(67) 輪襖	暗褐色 青	粗砂粒多	完形	黒炭有 内外面スス付着
3	土師器 高坏	外面 タテハケ後タテヘラミガキ 胴部-ヨコヘラミガキ 内面 接合部-ヘラケズリ後ナメ及びヨコのハケ 底部-脚部透し孔2個	明褐色	粗砂粒多	1/2 脚部	
4	土師器 壺	-X-X- 輪襖 外面 不定方向のハケ 内面 ヨコナデ 器面の剝離一部有	明赤褐色	粗砂粒多	1/4 以下 胴部	外面に少量の スス付着
5	土師器 壺	-X-X- 外面 ヨコナデ後ヨコヘラミガキ 内面 ヨコナデ後タテ・ヨコのヘラミガキ 口縁-緩合口縁	明褐色	密砂粒・ 雲母多	口縁 部片	

A103

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は部分的に数ヶ所に広がる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に14層に分層。炭化材が多量に出土し、焼失住居である。人為的堆積による埋没が想定される。

遺物 全体の出土量は少ないが、床面直上から覆土下層にかけて比較的多く出土した。

所見 出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と判断した。本遺跡では小型の住居跡に属す。

A104

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は部分的に広がる。住居跡中央部はやや軟弱。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に13層に分層。暗褐色土系の覆土が主体になる。人為的堆積による埋没が想定される。

遺物 小破片が少量出土。

所見 出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と判断した。本遺跡では小型の住居跡に属す。

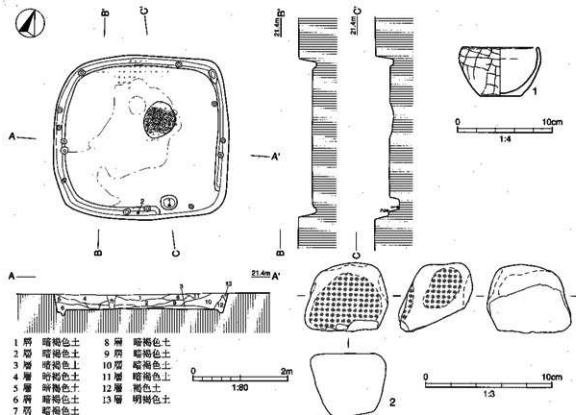


図120 A104

表54 A104遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 鉢?	80×45×52 外面 ヘラケズリ後ナテ 内面 ナテ 口縁やや内湾	明褐色 軟	普通 砂粒	ほぼ 完形	
2	石器 磨石	55×60×48 半分程欠損するが、残存する各面に良好な研磨痕が残されており、磨石もしくは砥石的な用途が考えられる				

A105

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は部分的に広がる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に7層に分層。炭化材が床面直上で多量に出土し、焼失住居である。人為的堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土下層にかけて少量出土した。

所見 出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と判断した。本遺跡では小型の住居跡に属す。

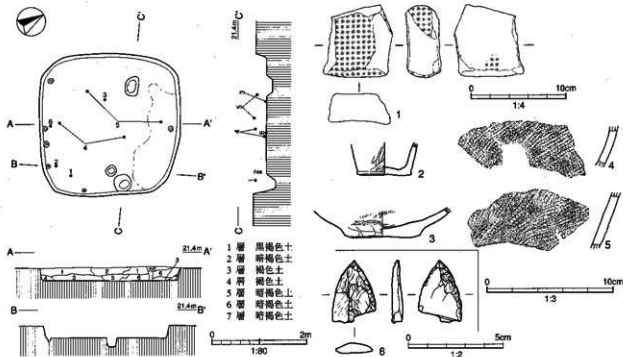


図121 A105

表55 A105遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	石器 砥石	76×73×43 253.9g 一端を欠くが、一面に良好な研磨痕や線条痕が残されており、中央部は深く凹んでいる。もう片面や側面にも部分的に研磨痕が認められる				母石-泥岩
2	土師器 甕	外側 ヘラケズリ後ヘラミガキ 内側 器面の割離が著しく不明 底面-平底	明褐色	并 砂粒多	1/4 以下 底部	
3	土師器 甕	外側 タテハケ後ヨコハケ 下端-ヘラケズリ 内側 一部ヨコヘラミガキ 器面の磨耗著しい 底面-平底	明褐色 軟	粗 粗砂粒多	1/4 以下 底部	
4	弥生 甕	外側 付加糸縄文 内側 ナデ後ヘラミガキ	暗赤褐色	青 砂粒多	1/4 以下 胴部片	
5	弥生 甕	外側 付加糸縄文 内側 ナデ後ヘラミガキ	暗赤褐色	密 砂粒多	1/4 以下 胴部片	
6	石器 石鏃	33×23×6 3.6g 基部を欠損するが、大型の石鏃(快入の浅い凹基無茎鏃?)と思われる				母石-凝灰岩

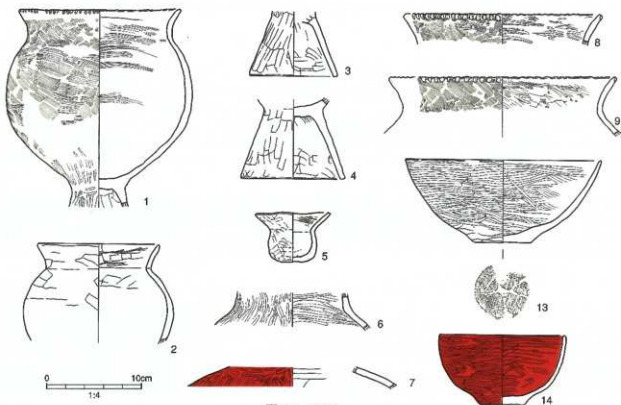
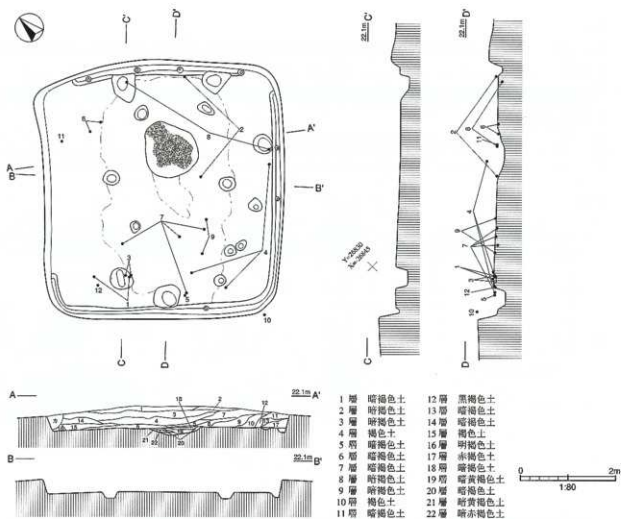


圖122 A106

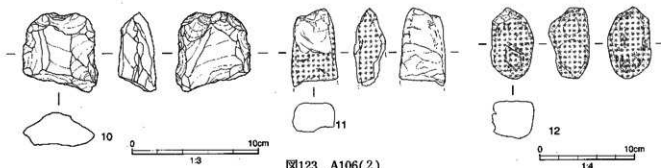


図123 A106(2)

表56 A106遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	七脚器 台付甕	170×-×(210) 最大径196 外面 口唇部-刻み 口縁部-ヨコナデ 胴部-ハケ 胴下半-脚接合部-ハケ後ヘラミガキ 内面 口縁上-ナデ 口縁下-ハケ 胴部-ナデ 脚部-ヘラケズリ		暗褐色 青	青 砂粒多	2/3 胴部 欠損	
2	土師器 甕	(130)×-×(103) 最大径 推定(160) 外面 ヘラケズリ後ナデ 内面 ヘラケズリ後ナデ 一部ヨコヘラミガキ	輪積-内外面とも明確に残す	赤褐色	青 砂粒多	1/4	
3	土師器 台付甕	-×93×(68) 輪積 外面 タテヘラケズリ(ハラナデ?) 内面 台部接合部-ヘラケズリ 胴部-ハラナデ		暗褐色	青 砂粒少	1/4 以下 台部	
4	土師器 甕	-×(110)×(86) 外面 タテヘラケズリ 内面 ナナメ・ヨコヘラケズリ 台部-「ハ」の字状		暗褐色 青	青 砂粒多	1/4 以下 台部	
5	土師器 埴	80×30×53 輪積 外面 口唇部-ナデ 口縁-胴上半部-ヘラケズリ後ナデ 胴下半-底部-ヘラケズリ 内面 口縁部-ヘラケズリ後ナデ 胴部-ヘラケズリ		暗褐色 青	粗 砂・黒 雲母少	完形	
6	土師器 甕	-×-×(36) 輪積 外面 タテヘラミガキ 内面 ヨコヘラミガキ		明褐色 黒斑有 硬	青 砂粒少	1/4 以下 頸部	
7	土師器 甕	-×-×(23) 外面 ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ 内面 ヘラナデ 器面磨耗 口縁-胴部-ナデ層(外にひろく)		明褐色 青	青 粗砂粒少	1/4 以下 胴部	赤彩
8	土師器 甕	(210)×-×(32) 輪積 外面 口唇部-ハケ状工具による押圧 内面 ヘラケズリ後ヨコヘラミガキ		暗褐色 硬	青 砂粒多	1/4 以下 口縁	
9	土師器 甕	(240)×-×(60) 輪積 口縁-外反 頸部-「ク」の字状に屈曲 外面 口唇部-ハケ状工具による押圧 ナナメのハケ 内面 ヨコハケ後ヨコヘラミガキ		暗褐色 硬	青 砂粒多	1/4 以下 口縁部	
10	石器 打製 石斧	64×59×30 127.7g 一端を欠く打製石斧の残存部分である。元々は楕円形か?全面調整が施されている。縦縁部は複数の剝離痕により急角度に調整されている					
11	石器 砥石	83×49×33 162.6g 全体に欠損が著しく用途を特定しにくい。残存する4面に研磨痕が残されており、特に一面は凹みを持つことから、砥石のか?					
12	石器 (砥石)	76×46×43 28.8g 両面に研磨痕や線条痕、特に一部は激しい使用のために明確な凹みを残している					母石-砥石
13	土師器 鉢	208×60×88 外面 口縁部-ナデ後ヘラミガキ 胴部-ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 口縁部-ナデ後ヘラミガキ 胴部-ヘラケズリ後ヘラミガキ		暗褐色 青	青 砂粒多	完形 口縁 部欠損	
14	土師器 鉢	135×45×74 輪積 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 底面-ヘラケズリ後不定方向のヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後不定方向のヘラミガキ	ヘラミガキは内外面ともきめ細かい	暗褐色 黒斑有 硬	青 砂粒多	完形	赤彩

A106

遺 構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は住居跡中央部に広範囲に広がる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に17層に分層。18～22層は炉のセクション。焼土が部分的に検出され、人為的堆積の後、自然堆積による埋没が考えられる。

遺 物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土。

所 見 出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と判断した。

A107

遺 構 ロームを踏み固めた床で、住居跡中央部に貼床が広がる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。炉は2基検出されたが、検出状況・火床の状況等からR1からR2への作り替えが行われたと考えられる。

覆土は色調を基本に5層に分層。暗褐色土系の覆土を主体とする。自然堆積による埋没が考えられる。

遺 物 覆土中から小破片が少量出土。床面直上から小型器台(1)が出土。小型丸底埴と小型器台がセットになった珍しいタイプと言えよう。(6)は覆土中一括遺物である。

所 見 出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と判断した。本遺跡では小型の住居跡に属す。

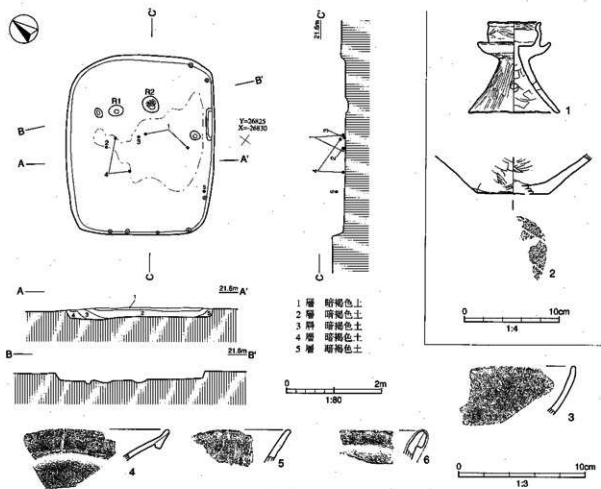


図124 A107

表57 A107遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 器台	56×96×96 輪積 外面 口縁部・器受部→ナデ後ヘラミガキ 器受部隅縁に刻み目 脚部→ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 口縁部・器受部→ナデ後ヘラミガキ 脚部→ヘラケズリ 口縁→器受部が鐮状突起の形態をなし、その上に鉢形土器が結合した ような形状を呈す。頸部・胴部・底部→結合形状器台もしくは裝飾 器台と呼ばれるものか? 脚部→透し孔4個	暗赤褐 軟	菅 砂粒多	完形	器受部一部欠損
2	土師器 壺	(76)×(43)×- 輪積 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 ヘラナデ後ミガキ? 底部→平底、底面に木炭痕	暗赤褐 菅	菅 砂粒多	1/4 以下 底部	
3	土師器 鉢	-×-×- 外面 縦位のヘラミガキ 内面 横位のヘラミガキ 内面外面とも一部器面剝離	淡褐 菅		口縁 部片	複合口縁 (折り返し口縁)
4	土師器 壺	-×-×- 外面 ナデ 内面 横位のヘラミガキ→縦位のヘラミガキ	橙褐 菅		口縁 部片	
5	土師器 壺	-×-×- 外面 縦位のヘラミガキ 内面 ナデ	褐 菅		口縁 部片	
6	土師器 壺	-×-×- 内外面とも丁寧なヘラミガキ	褐 硬		口縁 部片	複合口縁 内・外面赤彩

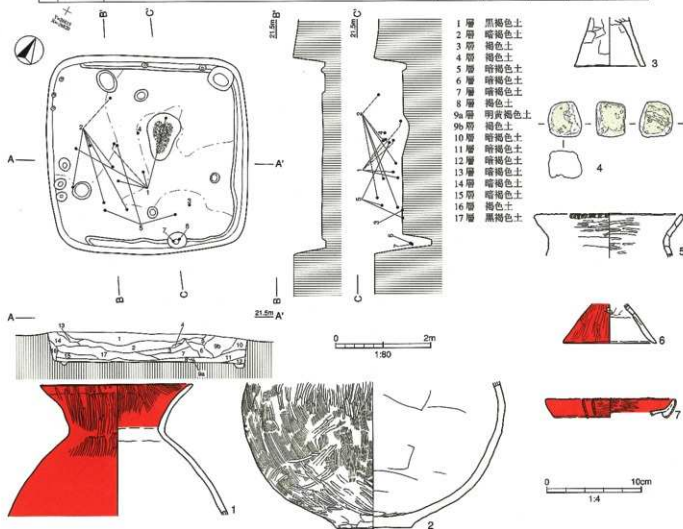


図125 A108

表58 A108遺物観察表

(単位:mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	上師器 壺	(160)×-(139) 輪積 外面 口縁部-ナデ後ヘラミガキ 胴部-ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 口縁部-ナデ後ヘラミガキ 胴部-ヘラケズリ L1縁-外反	明褐色 硬	普 砂粒多	1/4	内外面少量スス 付着 赤彩
2	上師器 甕	-(80)×(156) 輪積 外面 ハケ後一部ヘラミガキ 下端-ヘラケズリ 内面 ヘラナデ 胴部-球胴状 底部-平底	明褐色 硬	普 砂粒多	1/4	黒炭有
3	上師器 甕	-(76)×(53) 輪積 外面 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ 底部-台付兼の台部 器面に上等の付着物多い	暗赤褐 軟	粗 砂粒多	1/4 以下 台部片	遺存状態悪
4	石器 (砥石)	37×35×31 五面に研磨痕残存 砥石的な使用か?				軽石
5	弥生 甕	(160)×-(46) 輪積 外面 輪積痕を数段残す 外面 口唇部-縄文条体の押圧 ナデ後ヘラミガキ 内面 ナデ後ヘラミガキ 口縁-外反	暗褐 硬	密 砂粒多	1/4 以下L1 縁部片	外面スス付着
6	上師器 高杯	-(100)×(42) 輪積 外面 ヘラミガキ 内面 上部-ヘラケズリ 裾部-ナデ 胴部-脚残存部には透し孔1個 胴部-内面折り返し?	暗赤褐 普	普 砂粒多	1/4 以下 脚部片	赤彩
7	弥生 壺	(140)×-(20) 輪積 外面 口唇上-刻み目。口縁部-棒状浮文2本残存(下半に2ヶ所の 刻み目)下端に刻み目。ヘラミガキ 頸部-ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ 口縁-やや外反する複合L1縁	明褐色 普	粗 顆砂粒多	1/4 以下口 縁部片	内外面赤彩

A108

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は広範囲に広がる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は色調を基本に17層に分層。人為的堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から比較的多く出土。

所見 出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と判断した。本遺跡では小型の住居跡に属す。

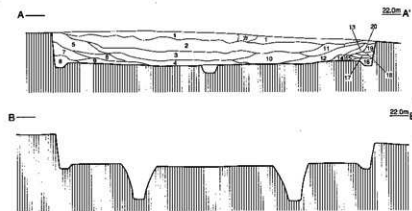
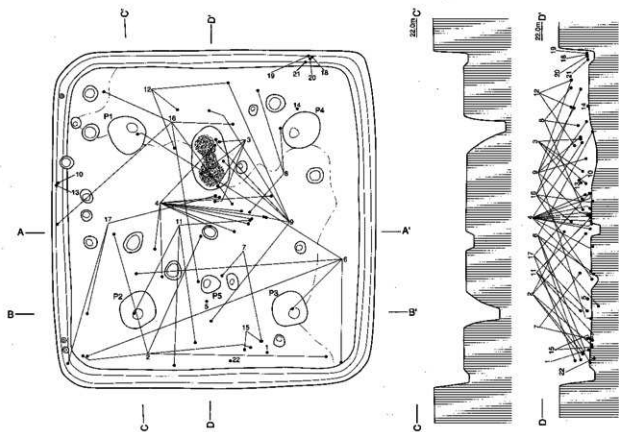
A109

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は住居跡北側に比較的広範囲に広がる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に20層に分層。覆土上層では若干の焼土を検出しており、人為的堆積による埋没が想定される。

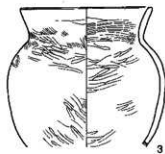
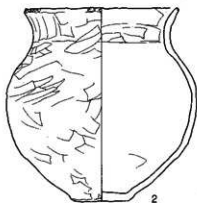
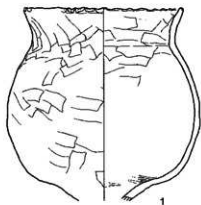
遺物 床面直上から覆土中にかけて多量に出土。床面直上から土玉出土。

所見 主柱穴はP1からP4、出入り口施設はP5と考えられる。その他のピットの配列から縄文或いは弥生時代の住居跡が重複していた可能性がある。出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と判断した。本遺跡では大型の住居跡に属す。



- | | |
|-----------|-----------|
| 1 層 暗褐色土 | 11 層 暗褐色土 |
| 2 層 黑褐色土 | 12 層 褐色土 |
| 3 層 褐色土 | 13 層 暗褐色土 |
| 4 層 褐色土 | 14 層 暗褐色土 |
| 5 層 褐色土 | 15 層 褐色土 |
| 6 層 褐色土 | 16 層 黑褐色土 |
| 7 層 暗褐色土 | 17 層 黑褐色土 |
| 8 層 暗褐色土 | 18 層 褐色土 |
| 9 層 暗褐色土 | 19 層 暗褐色土 |
| 10 層 暗褐色土 | 20 層 暗褐色土 |

0 2m
1:80



0 10cm
1:4

圖126 A109

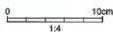
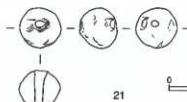
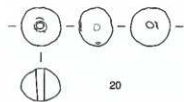
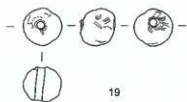
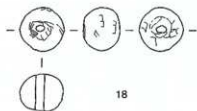
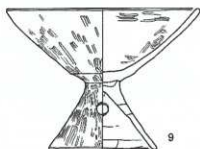
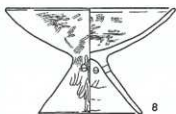
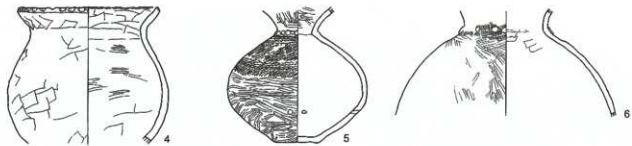


图127 A109(2)

表59 A109遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 □径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	170×-×(205) 外面 □唇部-押圧 ヘラケズリ後ヘラナデ 内面 ヘラケズリ後ナデ 底面近く・部ヨコヘラミガキ	暗褐色	密 砂粒多	2/3 底部 欠損	外面スス付着
2	土師器 甕	164×60×205 外面 □唇部-押圧 ヘラケズリ後ヘラナデ 内面 ヨコナデ	明褐色	普 砂粒多	完形	
3	土師器 甕	140×-×(148) 外面 □縁部-ハケ後ナデ 胴部-ハケ後ヘラミガキ 内面 □縁上部-ハケ後ナデ 胴部-ナデ後一部ヘラミガキ	暗赤褐色	普 砂粒多	2/3 底部 欠損	
4	土師器 甕	150×-×(145) 外面 □唇部-押圧 ヘラケズリ後ヘラナデ 内面 ヘラケズリ後ヘラナデ 一部ヨコヘラミガキ	暗褐色	密 砂粒多	2/3 底部 欠損	
5	弥生 小型甕	-×48×(144) 外面 □縁部-ナデ後ヘラミガキ 頸部-円形浮文帯る 胴部-結節4段-付加糸縄文 R+R?→結節4段-付加糸 内面 □縁部-ナデ後ヘラミガキ R R 縄文	明褐色	密 砂粒少	ほぼ 完形	
6	弥生 壺	-×-×(115) 外面 頸部-タテハケ ボタン状貼付(残存5個) 胴部-ヘラケズリ 後ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ナデ	暗赤褐色	普 砂粒多	1/4	
7	弥生 壺	62×-×(136) 外面 ヘラケズリ後ナデ・部ヘラミガキ 器面が磨耗している 内面 □縁-肩部ヘラケズリ後ナデ 胴部-ヘラケズリ 不詳明	明褐色	普 粗砂粒多	1/2	石英・チャート 雲母多い
8	土師器 高坏	(180)×110×112 外面 坏部-ナデ後不定方向のヘラミガキ 脚部-タテヘラミガキ 内面 坏部-ナデ後不定方向のヘラミガキ 脚部接合部-ヘラケズリ	明褐色	普 砂粒多	1/2	脚部透し孔3個 「ハ」の字状 外面スス付着
9	土師器 高坏	203×113×149 外面 坏部-□縁ナデ後ヘラミガキ 脚部-ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 坏部-ナデ後不定方向のヘラミガキ 脚部-ヘラケズリ	明褐色	密 砂粒多	2/3	脚部透し孔3個 坏部-下端に後 をもつ
10	土師器 甕	-×96×(78) 外面 胴部-ヘラミガキ 台部-ヘラケズリ 下端-ナデ 内面 接合部-ヘラケズリ後ナデ	明赤褐色	普 砂粒多	1/4	脚部「ハ」の字状
11	土師器 高坏	-×108×(66) 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 裾部-ナデ後ヘラミガキ 内面 接合部-ヘラケズリ 裾部-ナデ	暗褐色	普 粗砂粒多	1/2 脚部片	透し孔4個 赤影
12	土師器 高坏	-×(112)×(41) 外面 上半-目のかいタテハケ 下端-目の大きいハケ後ヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ヘラナデ	暗赤褐色	密 砂粒多	1/4 脚部片	脚部透し孔4個
13	土師器 甕	-×94×(69) 外面 タテヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	暗褐色	粗 砂粒多	1/4 台部片	台部「ハ」の字状
14	土師器 甕	-×(90)×(60) 外面 タテヘラケズリ 内面 接合部-ヘラケズリ ナデ	暗褐色	粗 砂粒多	1/4 台部片	
15	土師器 甕	(207)×-×(83) 外面 □縁部-ナデ 頸-胴部-ナナメのナデ後一部ヘラミガキ 内面 ヨコナデ後一部ヘラミガキ	暗褐色	普 砂粒少	1/4 □縁部 片	
16	土師器 甕	-×(84)×(88) 外面 ヨコヘラケズリ後タテヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ナデ	暗赤褐色	普 砂粒少	1/4	
17	土師器 甕	-×60×(85) 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 下端-ヘラケズリ 内面 ナデ後ナナメのヘラミガキ	暗赤褐色	密 砂粒少	1/4 以下	

No	種別 器形	法 量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色 調 成	胎 土	遺 存	備 考
18	土製品 土玉	36×30 穿孔幅7 34.6g 外面 穿孔後孔周囲等にヘラによる調整が施される	暗褐色 硬	菅 砂粒多	完形	
19	土製品 土玉	30×28 穿孔幅6 23.1g 外面 調整は軽い 一部に指痕は度がみられる	暗褐色 硬	菅 砂粒多	完形	
20	土製品 土玉	31×26 穿孔幅6 26.2g 外面 ヘラによる調整 指痕の痕跡有	明褐色 硬	菅 砂粒多	完形	
21	土製品 土玉	34×30 穿孔幅5 31.3g 外面 孔の片側に切りこみがあり、ゆがんだ穿孔、調整も粗く雑な作り。指痕の痕跡有	暗褐色 硬	菅 砂粒多	完形	
22	石器 軽石	30×32×14 ほぼ完形か？明確な加工痕みられず。用途不明				
23	石器 軽石	21×21×10 0.7g 一部欠損 明確な加工は認められず。用途不明				

A110

遺 構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は部分的に広がる。壁はロームの壁であるが、掘り込みは浅く、斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本に4層に分層。暗褐色上系の覆土が主体となる。人為的堆積による埋没が想定される。5層から7層は炉のセクションである。

遺 物 覆土中から小破片が数点出土したのみ。

所 見 出土遺物・規模・形態等から古墳時代前期の住居跡と判断した。本遺跡では小型の住居跡に属す。

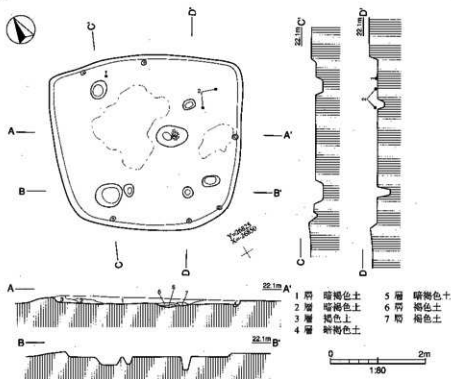


図128 A110

A111

遺構 ロームを踏み固めた床で、硬化面は部分的に広がる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に15層に分層。床面直上で全体に焼土を多く検出し、焼失家屋である。人為的堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土中にかけて少量出土。

所見 出土遺物等から古墳時代前期の住居跡と判断した。本遺跡では小型の住居跡に属す。

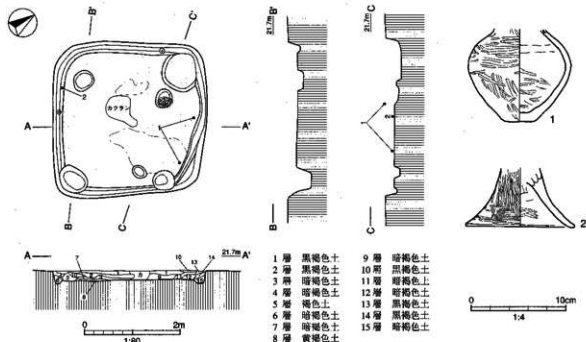


図129 A111

表60 A111遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 小型壺	—×30×(98) 外面 ナナメのハケ後タテ→ヨコ→タテヘラミガキ 内面 一部ヨコヘラミガキ 輪痕を明瞭に残す部分有	暗褐色 香	菅	2/3	砂粒少
2	土師器 高坏	—×116×(62) 外面 タテヘラミガキ 裾部→ヨコヘラミガキ 内面 ヘラケズリ後ヨコヘラミガキ	暗褐色 香	粗	1/2	砂粒少 舞部片

A112

遺構 D068と重複関係にあるが、本住居跡の方が古い。ロームを踏み固めた床で、硬化面は部分的に広がる。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。炉は2基検出され、ともに地床炉であるが、検出状況、完掘状況等からR1からR2への作り替えが行われたものと考えられる。

覆土は色調を基本に12層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。a層からd層は炉のセクションである

遺物 床面直上から覆土中にかけて多量に出土。

所見 出土遺物から古墳時代前期の住居跡と判断した。拡張住居と思われる。

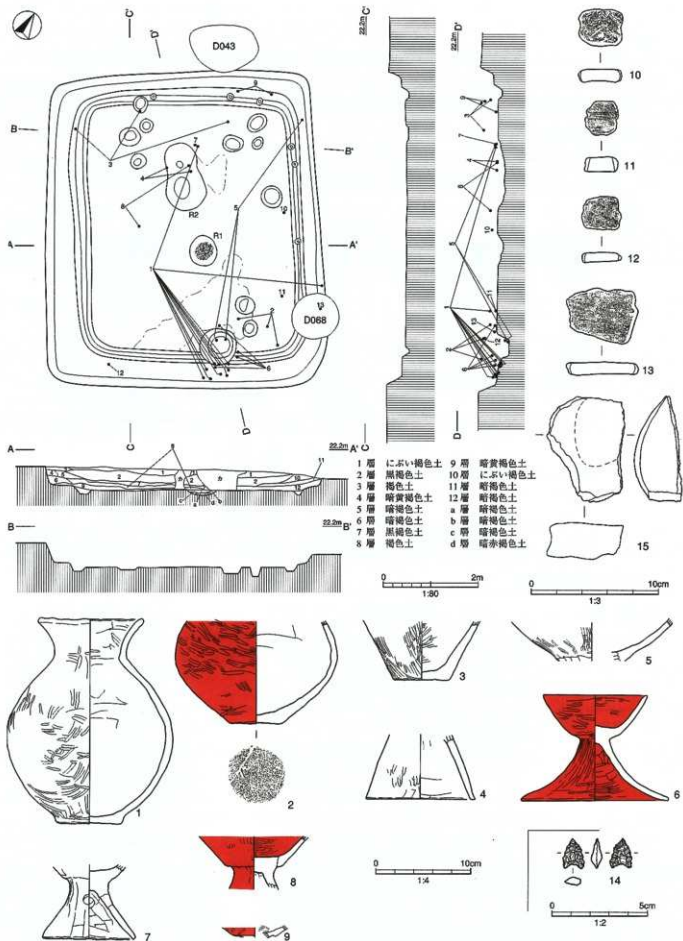


図130 A112

表61 A112遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 壺	112×70×216 外面 口縁部-ヨコナデ 胴部-タテ・ヨコのヘラミガキ 下端ヘラズリ 内面 口縁-頸部-ヨコナデ後ヨコヘラミガキ 胴部-ヨコナデ -×60×(109)	暗褐色	粗 砂粒多	2/3	黒斑有
2	土師器 壺	外面 ハケ後ヘラズリ 胴下半が指円状に膨らむ 内面 ナデ器面の剥離著しい 平底、底面に木葉痕	明褐色 黒斑有 軟	粗 粗砂粒少	1/4	赤彩
3	土師器 甕	-×58×(63) 輪積 外面 ヘラズリ後ヘラミガキ 底面-ヘラズリ後ヘラミガキ 胴部-底部から急傾斜で立ち上がる 内面 ナデ後不定方向のヘラミガキ 平底	明褐色 硬	粗 砂粒多	1/4 以下 底部	黒炭多 石英少
4	土師器 甕	-×116×(68) 外面 ヘラズリ後ヘラミガキ 器面の磨耗著しい 内面 ヘラズリ後ナデ 底部・台部-「ハ」の字状	明褐色 普	普 砂粒多	1/4 台部	
5	土師器 甕	-×(70)×(38) 輪積 外面 ヘラミガキ 下端ヘラズリ 内面 ナデ? 器面の剥離著しい 底部平底	暗褐色 軟	粗 砂粒多	1/4 以下 底部	
6	土師器 高坏	110×156×113 外面 坏部-ナデ後ヘラミガキ 脚部-ナデ後ヘラ ミガキ 裾部-ヘラミガキ 内面 坏部-ナデ後ヘラミガキ 脚部-ヘラズリ後ヘラミガキ 口縁、坏部逆台形状。下端に稜をもつ 脚部、接合部から中位は急傾斜、裾部はゆるやかな傾斜で大きく広がる	明褐色 軟	粗 砂粒多	完形	内外面赤彩
7	土師器 高坏	-×(100)×(79) 輪積 外面 ヘラナデ 内外面とも器面の磨耗著しい 内面 ヘラズリ 脚-透し孔3個	明褐色 軟	粗 粗砂粒多	2/3 脚部	赤彩
8	土師器 高坏	-×-×(55) 底部、坏部下端に稜をもつ 外面 ヘラズリ後ヘラミガキ 器面の磨耗が著しい 内面 坏部-ヘラズリ後ヘラミガキ 接合部-ヘラズリ 分割	赤褐色 軟	普 砂粒多	1/4 接合	赤彩
9	土師器 高坏	-×-×(13) 輪積 外面 タテ・ナメのヘラミガキ 内面 ヨコヘラミガキ 頸部、坏部下端に稜をもつ	暗褐色 普	普 砂粒多	1/4 以下 坏	赤彩
10	土師器 土製品	32×28×8 両端に刻みあり。	褐色 普	粗 砂粒多		土器片鏝
11	土師器 土製品	21×26×13 両端に明瞭な刻みあり。	暗褐色 普	普 砂粒少	口縁 部片	土器片鏝
12	土師器 土製品	31×25×55 両端に刻みあり。	褐色 普	粗 砂粒多		土器片鏝
13	土師器 土製品	53×39×9 両端に刻みあり。右端の刻みは明瞭である。	褐色 普	粗 砂粒多		土器片鏝
14	石器 石鏝	16×12×6 6g 小型の凹基無茎鏝の完形品である。全面調整が施される			完形	黒曜石
15	石器 石皿?	83×62×47 2380g 一部が残存するのみであるが、全体の大きさ一部などから判断すると 石皿としての使用も考えられる。良好な磨痕が残されている				凝灰岩

表62 竪穴住居跡一覽(2)

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	焼施設・位 周溝・備考
A-100	G6-55	隅丸方形 2.32×2.74×0.08 N-8°-E	床 ロームを踏み固めた床で、硬化面一部に広がる。立ち上がりがわずかに残る	炉 検出されず 周溝 検出されず 南壁 検出されず
		小破片が少量出土したのみ	色調を基本に5層に分層。自然に堆積	
A-101	G6-45	隅丸方形 2.7×2.76×0.21 N-9°-E	床 ロームを踏み固めた床。硬化面 住居跡断端に広範囲に広がる。焼土が広範囲から検出され、焼失家屋の可能性あり	地床炉 中央から北東コーナーによる
		遺物量は少ない	色調を基本に14層に分層。人為的堆積	周溝 検出されず
A-102	G6-62	隅丸長方形 5.48×4.68×0.14 N-65°-E	床 ロームを踏み固めた床。硬化面一部にあり。貯蔵穴の周りに凸塊あり	地床炉 中央から北東コーナーによる 周溝 全周する 周溝幅 0.13m
		床面直上から覆土下層で多量に出土 小型器台出土	色調を基本に6層に分層。自然に堆積	
A-103	G6-63	隅丸長方形 4.64×4.00×0.42 N-54°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面は部分的に敷片所広がる。炭化材が多量に出土。焼失家屋である	地床炉 中央から北コーナーによる。土器片がつかささる。 土器器台の一種か 周溝 ほほ全周する 周溝幅 0.13m
		全体の遺物量は少ないが床面直上から覆土下層にかけて出土	色調を基本に14層に分層。人為的堆積	
A-104	G6-52	隅丸方形 3.42×3.64×0.24 N-17°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面は部分的に広がる。住居跡中央はやや軟弱	地床炉 中央から北東コーナーによる 周溝 ほほ全周する 周溝幅 0.08m
		小破片が少量出土	色調を基本に13層に分層。人為的堆積	
A-105	G6-42	隅丸方形 2.92×2.96×0.23 N-59°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面は部分的に広がる。炭化材が床面直上で多量に出土。焼失家屋である	地床炉 中央から北コーナーによる
		床直上から覆土中にかけて少量出土	色調を基本に7層に分層。人為的堆積	周溝 検出されず
A-106	G6-25	隅丸長方形 5.41×4.94×0.30 N-47°-E	床 ロームを踏み固めた床。硬化面は住居跡中央部に広範囲に広がる	地床炉 中央から北東コーナーによる 周溝 約3/4周する 周溝幅 0.13m
		床面直上から覆土上層かけて多量に出土	色調を基本に17層に分層。18~22層は炉のセクション。人為的堆積の後自然堆積	
A-107	G6-23	隅丸長方形 3.73×3.04×0.08 N-53°-E	床 ロームを踏み固めた床。住居跡中央部に貼床が広がる	地床炉 2基検出。中央から北コーナーによる
		覆土中から小破片が少量出土。床面直上から器台出土	色調を基本に5層に分層。自然に堆積	周溝 一部で検出
A-108	G6-13	隅丸方形 4.12×4.16×0.44 N-28°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面は広範囲に広がる	地床炉 住居北コーナーによる
		覆土中から比較的多く出土	色調を基本に17層に分層。人為的堆積	周溝 約3/4周する 周溝幅 0.14m

遺構番号	検出調査区	平面形 規模；長軸×短軸×増高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位置 周溝・備考
A-109	G6-14	隅丸方形 7.03×6.70×0.61 N-45°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面 住居 北側に比較的広範囲に広がる	地床炉 中央から北西壁 柱穴間に位置する 周溝 全周する 周溝幅 0.22m
		床面直上から覆土上層にかけて多量に 出土。床直から上玉出土	色調を基本に20層に分層。人為的堆積	
A-110	G6-25	不定形 3.90×3.62×0.12 N-124°-E	床 ロームを踏み固めた床。硬化面は部分 的に広がる	地床炉 中央から北東コ ーナーによる
		床面から小破片が数点出土したのみ	色調を基本に4層に分層。5～7層は炉地 層。人為的堆積	周溝 検出されず
A-111	G6-3	隅丸方形 3.12×3.18×0.14 N-55°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面は部分 的に広がる。床面直上で多量の焼土を検 出。焼失家屋である	地床炉 中央から北コ ーナーによる 周溝 全周する 周溝幅 0.11m
		床面直上から覆土中にかけて少量出土	色調を基本に15層に分層。全体に焼土を多 く含む。人為的堆積	
A-112	G5-93	隅丸長方形 6.60×5.80×0.40 N-30°-W	床 ロームを踏み固めた床。硬化面一部に 広がる。拡張住居か？	地床炉 2基。R1→R2へ 住居中央から北西壁へ移 動 周溝 全周する
		床面直上から覆土中にかけて多量に出 土	色調を基本に12層に分層。自然堆積 a～d層は炉のセクション	

第4項 古墳時代後期

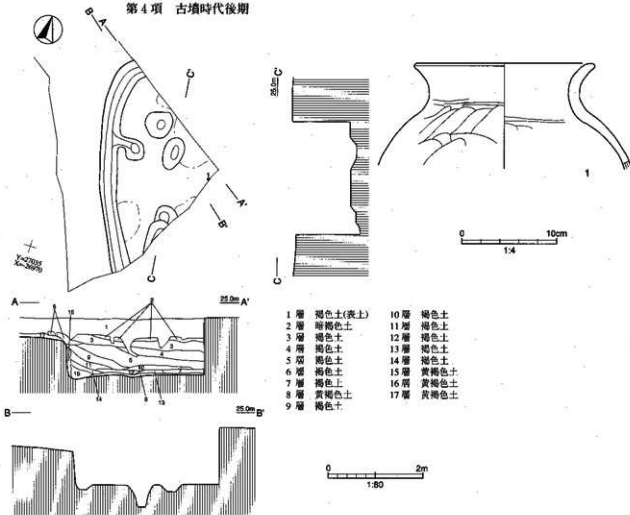


図131 A113

表63 A113遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	192×-×(112) 外面 タテヘラケズリ ナナメヘラケズリ 内面 ヨコナデ	普	雲母微 長石微	1/4 口縁 胴上部	黒色粒了少

A113

検出地区 H8-37G

遺構 遺構の大部分が調査区域外に続いているため、形態・規模・主軸方位などは不明である。深さは、最深で約0.8mである。床はロームを踏み固めた床でほぼ平坦。硬化面が部分的に検出されている。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。付属施設としては、床面に小穴を5基検出している。カマド等の燃焼施設を検出するには至らなかった。

覆土は色調を基本に17層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土。

所見 出土遺物が少なく、調査を実施できた部分も少なく、時期決定に決定打を欠くが、(1)の土器が出土していることから、古墳時代後期の住居跡の一部と判断した。

第3節 奈良・平安時代

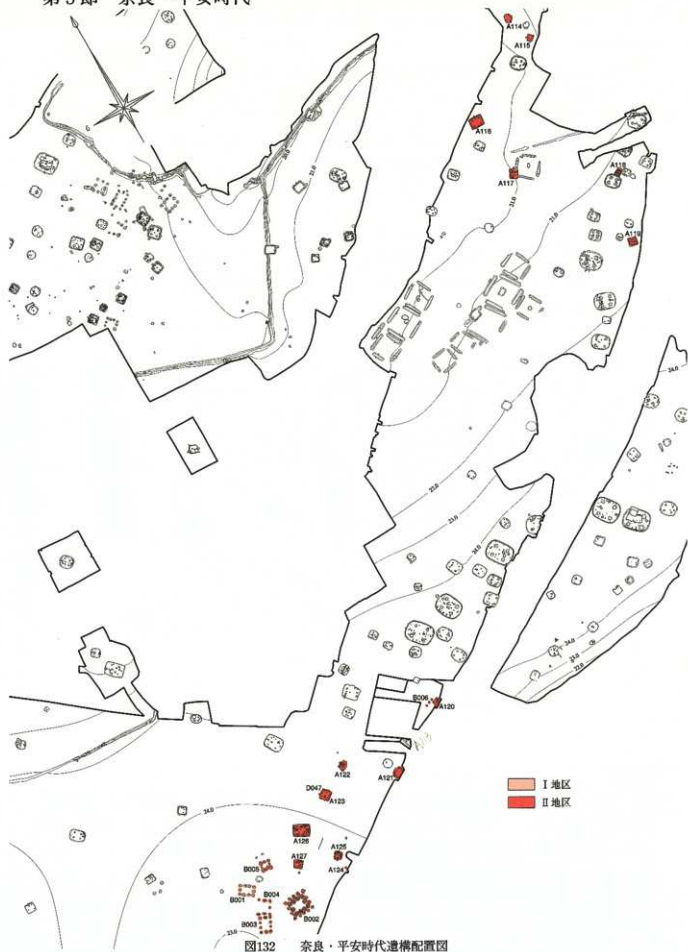


图132 奈良・平安時代遺構配置图

栗谷Ⅱ地区における奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡14軒、掘立柱建物跡5棟、その他の遺構3基が検出されている。

集落の立地であるが、栗谷遺跡が位置する舌状台地先端部にあたる台地北東部縁辺部に集中する一群と台地南側縁辺部に集中して立地する一群がある。北東部縁辺部に立地している一群はⅢ地区で報告する事になる一群と有機的な関係にあると思われる。

南側縁辺に立地する一群の集落であるが、本来、Ⅰ地区で報告した竪穴住居跡群の一部も含む集落である可能性が高い。また、この一群が立地する地形は上谷遺跡と栗谷遺跡を分離する小支谷の谷頭にあたる部分でもあり、上谷遺跡との関係も注意しなければならない。ここで注目されるのが、この一群にⅠ地区で報告した掘立柱建物跡を含め、5棟の掘立柱建物跡が検出されている事である。竪穴住居跡と掘立柱建物跡との関係等、上谷遺跡との成果を踏まえて考えていかなければならない問題となるだろう。栗谷遺跡の奈良・平安時代の集落について検出遺構数とその立地を中心に概観したが、以下個別の遺構についての報告に移りたい。詳細は以下の記述、遺構一覧表および遺物観察表を参照されたい。

(1) 竪穴住居跡

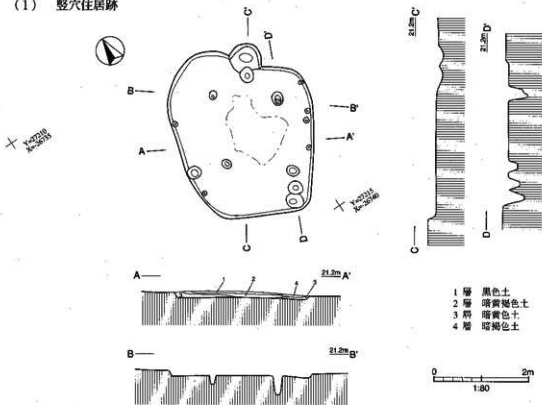


図133 A114

A114

遺 構 ロームを踏み固めた床で、東へやや傾斜している。中央部はやや軟弱である。壁はロームの壁で、堀り込みが浅く、斜めに立ち上がる。竈の袖部、天井部は検出されなかった。竈は壊されたものと思われる。覆土は色調を基本に4層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 覆土中から小破片が少量出土したのみ。

所 見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。

A115

遺構 ロームを踏み固めた床で、中央部はやや軟弱である。壁はロームの壁で、斜めに立ち上がる。竈は2基検出されている。竈の検出状況と、周溝の状況と考え合わせると、本住居跡は拡張されていることが判る。まず北壁側に竈を作り、拡張と同時にコーナーに竈を作り替えている。覆土は色調を基本に16層に分層。焼土、炭化物を多量に検出し、人為的な堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が少量出土。竈の前、床面直上から土師器の杯(3)が完形で出土。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。当初作られた竈が、東北地方に多い、煙道部の長いタイプの竈であることは、興味深い。

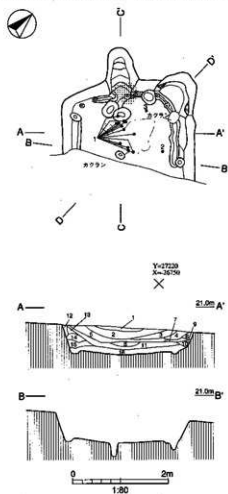


図134 A115

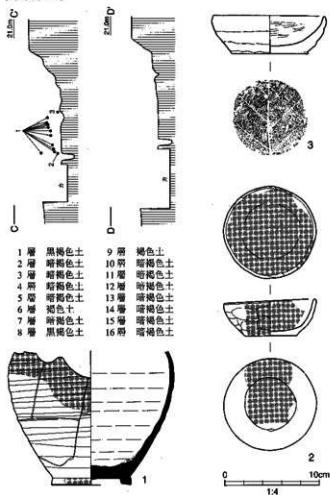


図135 A115(2)

表64 A115遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 長頸壺	一×8.40×(14.1) 外面 ロクロ成形後ナデ 回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	青	石炭粒 白色粒 子微	口縁部 なし	外面に自然彩
2	土師器 杯	9.70×5.50×3.70 外面 ロクロ成形 体部一横位ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	青	雲母粒 赤色粒 子微	完形	内面にスス付着
3	土師器 杯	11.8×8.20×4.10 輪板 外面 輪積裏を明確に残す ナデ 内面 ナデ後ヘラミガキ 底部一木葉痕	褐 青	密 砂粒多	完形	口縁一やや内溝 スス・タル状 付着物

A116

遺構 ロームを踏み固めた床で、中央部はやや軟弱である。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。竈は北壁ほぼ中央で検出され、両袖とも残る良好な状態であった。覆土は色調を基本に4層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 全体としての出土量は少ないが、覆土中層から比較的多く出土。覆土中層から下層において、黒書土器(9)出土。

所見 古墳時代後期にあたる遺物も出土しているが、全体の遺物出土状況から判断して奈良・平安時代の住居跡とした。

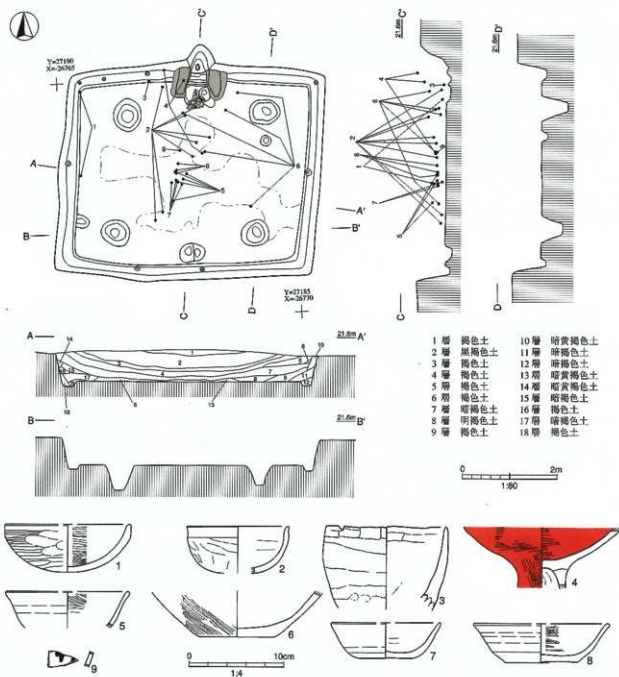



図136 A116

表65 A116遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の 特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 (丸高) 坏	(13.2)×-×5.10 外面 横位ヘラケズリ後密なヘラミガキ 内面 密なヘラミガキ	普	雲母粒 長石 微	1/2	
2	土師器 坏	(10.8)×-×(5.00) 外面 ロクロ成形 体部に横位・縦位のヘラケズリ 内面 ナア	普	雲母粒 白色粒 微	2/3	
3	土師器 鉢	(12.8)×-×(8.80) 輪積 外面 口縁部-ヘラナデ 体部-輪積面 指による調整 内面 口縁部-ヘラナデ 体部-ヘラケズリ後ナア	暗褐 普	砂粒 雲母多	2/3	厚手の作り
4	土師器 高坏	-×-(6.40) 輪積 外面 体部-ヨコヘラミガキ 脚部-タテヘラケズリ後タテヘラミガキ 内面 体部-ヨコヘラミガキ 脚部-ヘラケズリ	明褐褐 硬	砂粒多	1/4 以下	体-脚部片 遺存 赤彩有り
5	土師器 坏	13.1×-×(3.90) 外面 ロクロ成形 内面 密なヘラミガキ	普	雲母・ 赤色粒 微	1/3	口縁及び体部 遺存
6	土師器 甕	-×7.80×(4.90) 外面 密なヘラミガキ	軟	石英少 赤色粒 微	1/2 底部	胴下端片遺存
7	土師器 坏	(5.80)×6.00×3.80 外面 ロクロ成形 体部下端-回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	普	雲母・ 赤色粒 微	1/2 底部及び 体部	
8	土師器 坏	(14.4)×7.60×4.20 外面 ロクロ成形 体部下端-回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形 粗いヘラミガキ	普	雲母・ 赤色粒 微	底部 及び 体部片	
9	土師器 坏	-×-×- 外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	普	雲母微	小破片	墨書 体部外面 「  」?

A117

遺 構 ロームを踏み固めた床でしっかりしている。壁はロームの壁で掘り込みは浅いものの、ほぼ垂直に立ち上がる。C010と重複関係にあるが、本住居跡の方が新しい。竈は北壁ほぼ中央で検出されたものの、袖を検出することはできなかった。住居廃絶時に竈を壊したものと思われる。煙道部は緩やかに立ち上がっていく。住居跡の掘り込みが浅いことを考え合わせると、本来、煙道を長く掘り込むタイプの竈であったと考えられる。覆土は色調を基本に6層に分層。覆土中から若干の炭化物、焼土を検出しているが、概ね、自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 全体としての出土量は少ないが、掘り込みが浅いためか、床面直上からの出土が多い。竈内から土師器の甕型土器が出土。

所 見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。

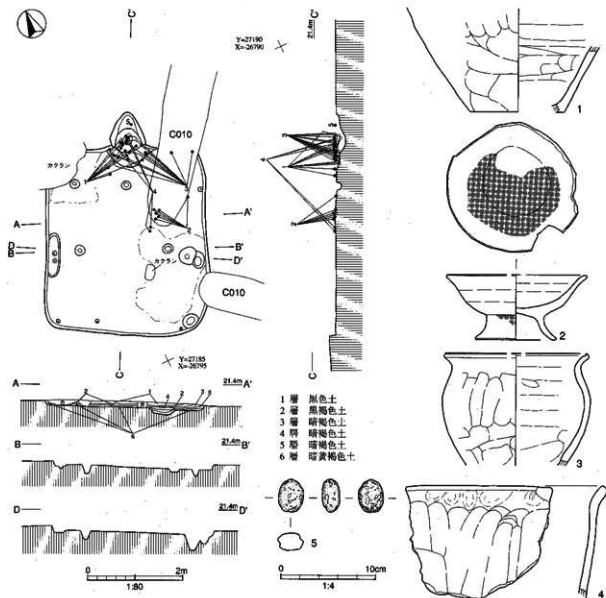


図137 A117

表66 A117遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	外面 胴部一縦位ヘラケズリ 胴下部一横位ヘラケズリ 内面 横位ナデ 底部一ヘラケズリ、磨止	—×(10.0)×(11.0)	軟	雲母 長石 微	1/3 胴底部 欠損	
2	土師器 高台付 杯	外面 ロクロ成形 高台部に少しスス有り 内面 ロクロ成形 ナデ 体部内面にスス痕有り	(14.4)×—×6.90 台部径8.20 底部一高台部ロクロ成形 高台部に少しスス有り	青	雲母 石英 微	3/4	
3	土師器 甕	外面 胴部一縦位ヘラケズリ 胴下部一横位ヘラケズリ 内面 横位ナデ	(15.4)×—×(11.9)	青	雲母 長石 微	1/2	口縁部・胴下部 遺存
4	土師器 甕	外面 縦位ヘラケズリ 口縁一指頭痕有り 赤彩	—×—×(12.0)	軟	雲母・ 石英・ 長石微	1/4 口縁 胴部	
5	石器 砥石	小型の卵状の砥石製品。明瞭な加工痕は見られない	3.50×2.60×厚さ1.90 5.4g				砥石?

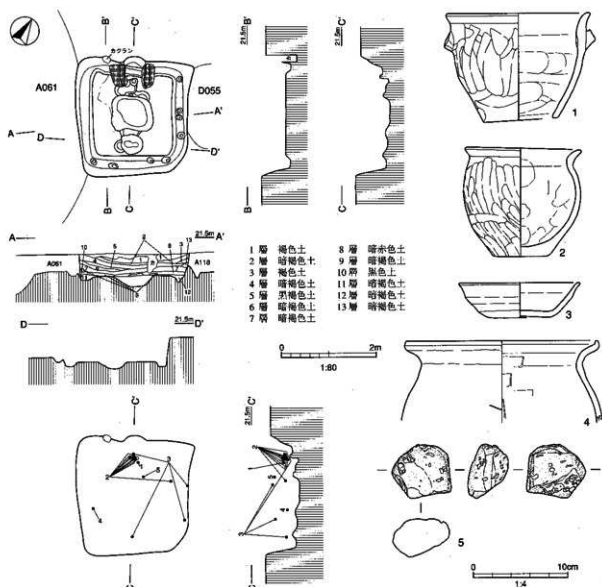


図138 A118

表67 A118遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色 調成	胎土	遺存	備考
1	土師器 瓶	15.2×7.60×11.4 外面 胴下部一横位ヘラケズリ 胴上部一縦位ヘラケズリ 内面 胴部一横位ナデ 胴部下端一ヘラケズリ	青	雲母 長石 微	ほぼ 完形	外面 黒褐色 内面 暗茶褐色
2	土師器 小型甕	12.3×5.80×11.4 外面 胴上半部一縦位ヘラケズリ 内面 胴部一横位ナデ	黒褐色	雲母少 長石・ 白色微	ほぼ 完形	
3	土師器 坏	(12.8)×6.70×3.70 外面 ロクロ成形 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	青	雲母中 長石・ 赤色微	1/3	
4	土師器 甕	20.7×-×(8.70) 外面 胴部一横位ナデ 内面 胴部一横位ヘラナデ	暗茶褐色	雲母中 石英・ 長石微	1/8	1/縁
5	石器 磨石	5.30×6.30×厚さ4.30 全体におむすび状を呈するが、4面ほどが磨鈍(研磨?)により、やや平滑となっている。磨石あるいは、砥石のな用途に使用か?				

A118

遺構 ロームを踏み固めた床・壁はロームの壁で、斜めに直線的に立ち上がる。A061、D055と重複関係にあるが、古い順にA061、A118、D055となる。竈は北壁ほぼ中央で検出され、両袖も残る良好な状態であった。覆土は色調を基本に13層に分層。覆土中から比較的多量の炭化物、焼土を検出している。焼失家屋であり、人為的堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。竈の前、住居跡中央に比較的大型のビット2基を検出している。本住居跡の性格であるが、検出されたビットの床面に対する占拠率から考えて、単に居住用のものではなく特殊な用途を考えなければならないが、その用途までは特定するには至らなかった。

A119

遺構 ロームの床であるが、やや軟弱で中央はやや窪んでいる。壁はロームの壁で、直線的に立ち上がる。竈は北壁ほぼ中央で検出されたが、両袖も検出することはできなかった。完掘状況から周溝は袖の下を廻っていたことが判る。覆土は色調を基本に16層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。

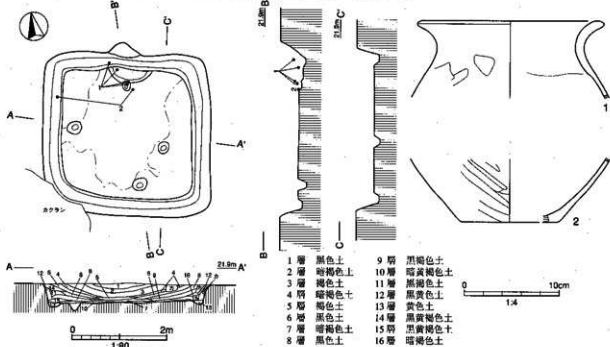


図139 A119

表68 A119遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	(19.6)×-(8.20) 外面 胴部-斜位ヘラケズリ 内面 胴部上端-ナデ	軟	長石微 白色少	胴底部 1/4 以下	
2	土師器 甕	-(10.3)×(6.70) 外面 胴部-横位ヘラケズリ 斜位ヘラミガキ	軟	雲母・ 石英・ 赤色微	胴底部 1/4 以下	長石少

A120

遺構 ロームの床であるが全体に軟弱である。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。竈は北壁ほぼ中央で検出されたが、攪乱によって大部分が壊されている。覆土は色調を基本に2層に分層した。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土。覆土上層から墨書土器(4)が出土している。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。

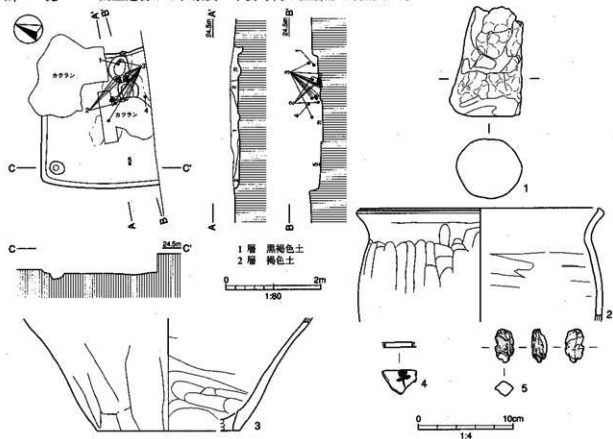


図140 A120

表69 A120遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土製品 支脚	上部径(5.10)×(5.00) 器高(10.5) 下部径7.00×6.00 重量465g 指痕痕	軟	長石散		
2	土師器 甕	26.2××(12.0) 外面 胴上半部-縦位ヘラケズリ 内面 横位ナデ	普	雲母・ 石炭散 赤色散		
3	土師器 甕	×15.0×(11.9) 外面 縦位ヘラケズリ 内面 横位ヘラナデ	硬	雲母・ 長石・ 白色散		赤色粒子少
4	土師器 坏	内面 密なミガキ 黒色	普	雲母・ 赤色散		墨書 底部外面 「□」
5	石器 軽石	3.60×2.00×厚さ1.60 29g 中型の軽石製品の不定形を呈し、明瞭な加工痕は見られない				砥石?

A121

遺構 ロームを踏み固めた床で、全体的に硬い。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。竈は北壁ほぼ中央で検出され、両袖も残る良好な状態であった。覆土は色調を基本に17層に分層。若干の焼土を検出しているものの、概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土中で土器を中心に多量に出土。墨書土器・鉄製品の出土が目立ち、床面直上からは刀子も出土している。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。

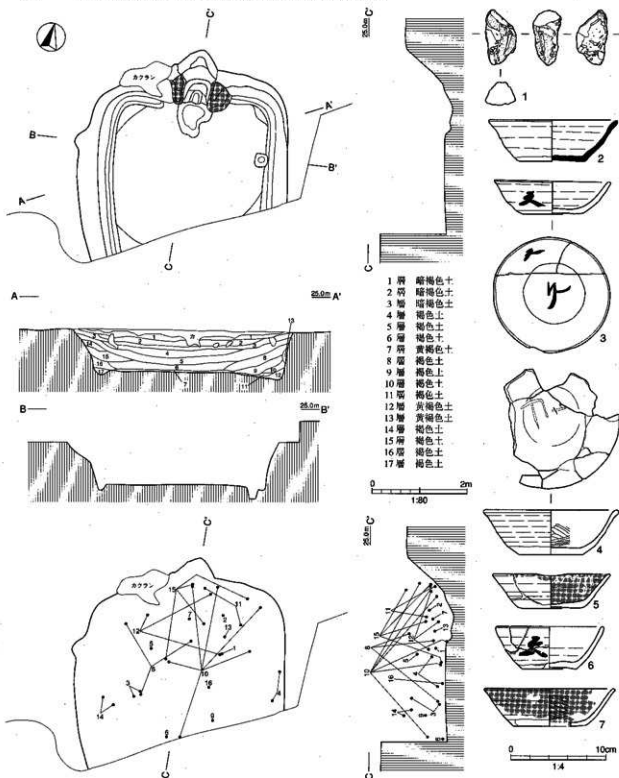


図141 A121

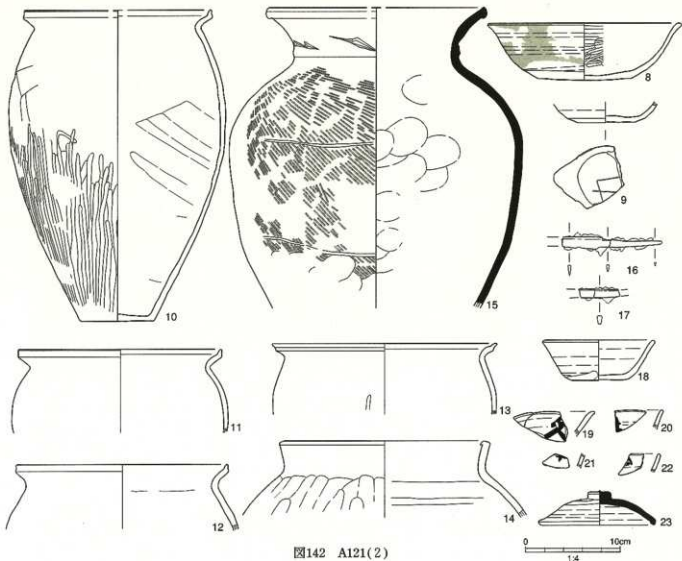


図142 A121(2)

表70 A121遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	石器 軽石	5.80×3.30×2.50 8.1g 中型の軽石製品 不定形を呈し、明瞭な加工痕は見られない				
2	須恵器 坏	13.6×7.00×4.40 外面 ロクロ成形 体部下端-ヘラケズリ 内面 ロクロ	昔	雲母微	ほぼ 完形	
3	土師器 坏	12.2×6.40×3.50 外面 ロクロ成形 体部下端-ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	昔	雲母・ 白色微	完形	墨書 胴部外面「天」 底部外面「久」
4	土師器 坏	14.2×6.60×4.80 外面 ロクロ成形 胴部下端-回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形 内面-ミガキ	昔	雲母・ 白色微	2/3	線刻 底部内面 「加」
5	土師器 坏	12.4×6.60×3.60 外面 ロクロ成形 体部下端-回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形 内黒	昔	雲母・ 長石・ 白色微	2/3	灯明皿
6	土師器 坏	11.4×5.70×4.50 外面 ロクロ成形 体部下端-回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	昔	雲母・ 白色微	1/3	墨書 体部外面 「矢」

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
7	土師器 坏	(13.8)×(7.60)×4.00 外面 ロクロ成形 体部下端-回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形 密なヘラミガキ	普	雲母・ 石英微	1/2	外内面スス有り
8	土師器 坏	(20.4)×9.80×6.10 外面 ロクロ成形 体部下端-回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形 密なヘラミガキ	普	雲母・ 長石・ 白色微	2/3	外面スス付着
9	土師器 坏	—×(6.00)×(2.20) 外面 ロクロ成形 体部下端-回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	普	白色微	2/3 底・体 部-部	鑲刻 底部外面 「□」
10	土師器 甕	(19.8)×(7.60)×33.0 外面 胴下部-横位ヘラケズリ 胴中下部-密なヘラミガキ 内面 斜位ヘラナデ	普	雲母微 石英・ 長石中	2/3	木葉痕
11	土師器 甕	(21.4)×—×(8.80) 外面 — 内面 —	軟	雲母・ 長石微 石英少	1/3 口縁部	
12	土師器 甕	(22.2)×—×(6.80) 外面 — 内面 横位のナデ	軟	雲母・ 長石微 石英少	1/4 以下	口縁部片遺存
13	土師器 甕	(23.8)×—×(7.50) 外面 胴部-縦位ヘラミガキ 内面 —	軟	雲母・ 石英微	1/4 以下	口縁部片遺存
14	土師器 甕	(21.0)×—×(8.10) 外面 胴上半部-縦位のヘラケズリ 内面 横位のナデ	普	雲母・ 白色微	1/4 以下 口縁部	
15	須恵器 甕	(23.3)×—×(31.7) 外面 胴部-タタキメ 胴下端-横位のヘラケズリ 内面 胴部-当具痕	普	雲母・ 石英少 長石中	1/2 口縁部	白色粒子微 胴部 1/3 遺存
16	鉄製品 刀子	(10.6)×1.10×0.30 0.70×0.30 0.40×0.20	11.3g			
17	鉄製品 刀子	(4.40)×0.90×0.50	4.6g			
18	土師器 坏	11.8×5.60×4.30 外面 ロクロ成形 体部下端-回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	普	雲母・ 長石・ 白色微	1/4	
19	土師器 坏	—×—×— 外面 ロクロ成形 体部下端-ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	普	雲母・ 白色微	口縁部 体部片	墨書 体部外面 「久」
20	土師器 坏	—×—×— 外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	普	雲母・ 赤色微	口縁 部片	墨書 体部外面 「□」
21	土師器 坏	—×—×— 外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	普	雲母微	体部片	墨書 体部外面 「□」
22	土師器 坏	—×—×— 外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	普	雲母微	口縁・ 体部片	墨書 体部外面 「□」
23	須恵器 甕	(12.4)×—×3.60 外面 ロクロ成形 体部-回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	普	白色微	1/2	

A122

遺 構 ロームの床で、やや軟弱。硬化面が一部に有り。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。竈は北壁ほぼ中央で検出され、両袖も残る良好な状態であった。覆土は色調を基本に12層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 床面直上から覆土中で多量に出土。覆土上層から墨書土器(8)が出土している。鉄製品(17)は、覆土一括遺物。

所 見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。

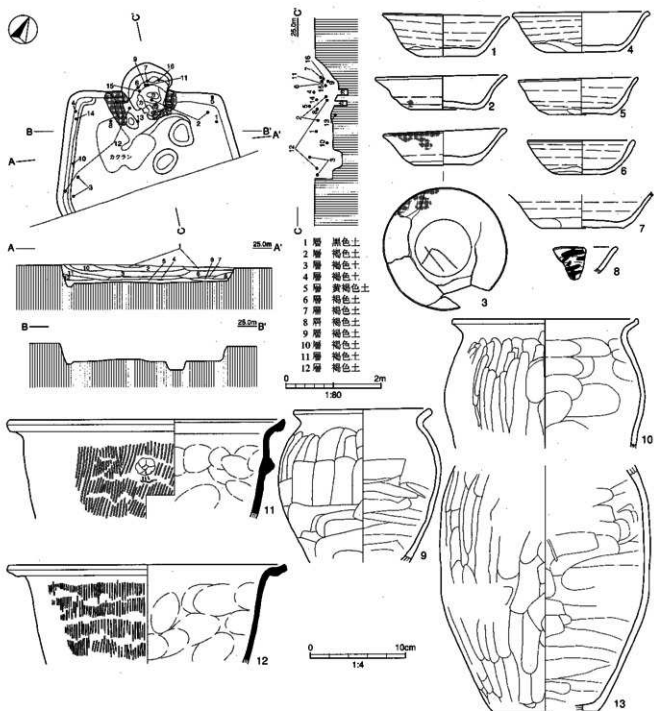


図143 A122

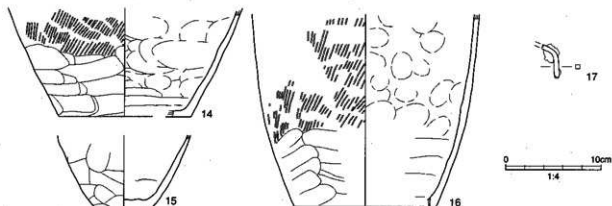


図144 A122(2)

表71 A122遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法象 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	13.4×6.30×4.30 外面 ロクロ成形 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	青	雲母少 石英微	ほぼ 完形	
2	土師器 杯	13.6×6.90×3.60 外面 ロクロ成形 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	暗淡褐 青	雲母・ 赤色微	完形	スズ痕有り
3	土師器 杯	13.1×6.00×3.60 外面 ロクロ成形 体部下端ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	青	雲母・ 長石微	ほぼ 完形	織刺底部「凹」 体部外面スズ有
4	土師器 杯	13.1×7.80×4.40 外面 ロクロ成形 体部下端一静止ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	青	雲母・ 長石・ 赤色微	完形	
5	土師器 杯	12.7×6.80×3.80 外面 ロクロ成形 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	青	雲母・ 赤色微	ほぼ 完形	
6	土師器 杯	(11.4)×4.80×3.60 外面 ロクロ成形 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	青	雲母石 石英長石 白色少	2/3	
7	土師器 杯	—×8.90×(3.80) 外面 ロクロ成形 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	青	雲母・ 長石・ 白色微	2/3	
8	土師器 杯	—×—×— 外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	青	雲母微	口縁 部片	墨書 体部外面 「□」
9	土師器 甕	14.4×—×(16.2) 外面 輪積後胴部上位縦ヘラケズリ 下部一横位ヘラケズリ 内面 輪積後横位ヘラナデ	青	赤色・ 白色微	底部欠	
10	土師器 甕	19.4×—×(13.7) 外面 胴上部一縦位ヘラケズリ 内面 胴上部一横位ナデ	青	雲母石 石英長石 白色微	口縁 胴上部 1/3	
11	須恵器 甕	(29.2)×—×(10.5) 外面 胴部一タタキ 内面 胴部一当具痕	青	白色微	胴上部 1/3	
12	須恵器 甕	(29.0)×—×(10.5) 外面 胴部一タタキ 内面 胴部一当具痕	青	長石・ 白色微	口縁 胴部 1/5	
13	土師器 甕	—×11.0×(26.1) 外面 縦位ヘラケズリ 内面 輪積後横位ヘラナデ	青	雲母・ 石英・ 長石微	底部よ り胴部 1/3	

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
14	土師器 甕	—×14.0×(11.5) 外面 胴部-タタキ 胴下部-横位のヘラケズリ 内面 胴部-当兵痕	軟	雲母・ 赤色微 白色少	胴下 半部 1/4	
15	土師器 甕	—×6.50×(7.70) 外面 ヘラケズリ 内面 輪痕有り ナデ	普	雲母・ 長石微	底部 より 1/3	
16	土師器 甕	—×15.0×(20.4) 外面 胴部-中位タタキメ 下部-ヘラケズリ		雲母・ 赤色微 白色中	底部 胴部 1/3	
17	鉄製品	(3.40)×0.50×0.40 5.2g				棒状

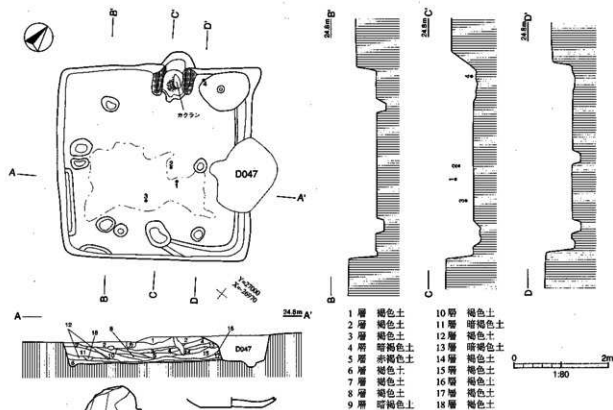


図145 A123

A123

遺構 ロームを踏み固めた床で、住居跡中央部はやや軟弱。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。D047と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。竈は北壁ほぼ中央で検出され、両袖とも残る良好な状態であった。覆土は色調を基本に18層に分層した。覆土中層において焼土を多量に検出している。人為的堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。

表72 A123遺物観察表

(単位cm)

No.	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	十部器 坏	一×(6.60)×(1.10) 外面 ロクロ成形 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	青	雲母・ 白色微	1/4 以下	
2	十部器 坏	一×(7.60)×(1.70) 外面 ロクロ成形 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形 密なミガキ	青	雲母・ 赤色・ 白色微	1/4 以下	
3	十部器 坏	一×(7.00)×(1.90) 外面 ロクロ成形 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	青	雲母・ 赤色・ 白色微	1/4 以下	
4	土製品 支脚	外面 ヘラナデ		雲母長 石水色 白色少		1.26kg

A124

遺構 竈の周辺のみでプランを検出できた住居跡であった。壁はロームの壁であるが、掘り込みは浅く、竈の周囲で一部検出したのみ。斜めに立ち上がってゆく。床はロームを踏み固めた床で竈の周辺で硬化面を検出している。竈は天井部・袖部ともに無く、周辺で焼土を少量検出している。

遺物 全体の出土量は少ないが、床面直上から比較的少量に出土。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。

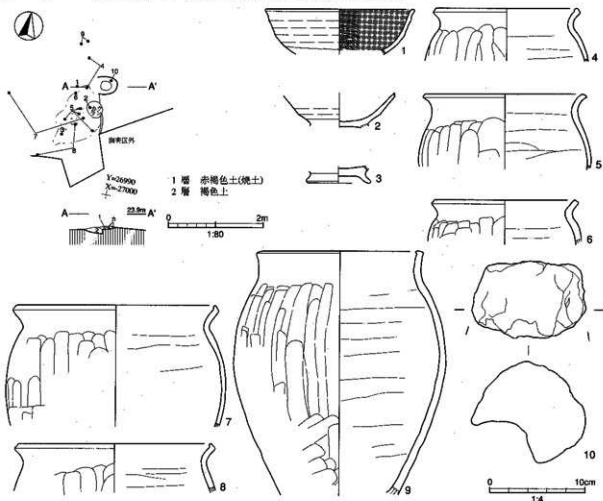


図146 A124

表73 A124遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	15.8×-×4.80 外面 ロクロ成形 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ 黒色	青	雲母・ 赤色微	1/4 以下	
2	土師器 高台付 杯	-×-×(3.70) 台径径 外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	青	雲母・ 長石・ 白色微	1/4 以下	
3	土師器 高台付 杯	-×-×(1.80) 台部径6.80 外面 ロクロ成形 内面 密なヘラミガキ 底部・台部-ナデ 底部-糸切り	青	雲母・ 石英・ 長石微	底部 台部	
4	土師器 甕	14.8×-×(5.60) 外面 胴上部-縦位のヘラケズリ 内面 横位のナデ	青	雲母・ 長石・ 白色微	1/2 口縁 頸部	
5	土師器 甕	16.4×-×8.20 外面 胴上部-縦位の静止ヘラケズリ 内面 横位のナデ	青	雲母・ 石英・ 白色微	1/2 口縁頸 胴上部	
6	土師器 甕	14.8×-×(4.70) 外面 胴上部-縦位のヘラケズリ 内面 横位ナデ	青	雲母・ 長石・ 赤色微	1/3 口縁 頸部	
7	土師器 甕	20.8×-×(12.9) 外面 胴部-縦位のヘラケズリ・横位のヘラケズリ 内面 横位のナデ	青	雲母・ 石英・ 白色微	1/4 以下	口縁部・胴部 遺存
8	土師器 甕	19.8×-×(5.20) 外面 胴上部-縦位のヘラケズリ 内面 横位のナデ	青	雲母・ 石英・ 白色微	1/4 以下	口縁部・胴部 遺存
9	土師器 甕	17.6×-×(25.9) 外面 胴上半部-胴中央部-縦位のヘラケズリ 胴下半部-横位・斜 位のヘラケズリ 内面 横位のナデ	青	雲母・ 白色微	1/4	
10	土製品 支脚	上部径 (10.0)×(7.00) 下部径 (11.5)×(6.00) 重量 570g		雲母・ 白色微	1/4 以下	

A125

遺構 ロームを踏み固めた床で、住居跡中央部は、やや軟弱。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。竈は北壁はほぼ中央で検出され、両袖とも残る良好な状態であった。覆土は色調を基本に22層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から少量出土。覆土下層から墨書土器(2)が出土。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。

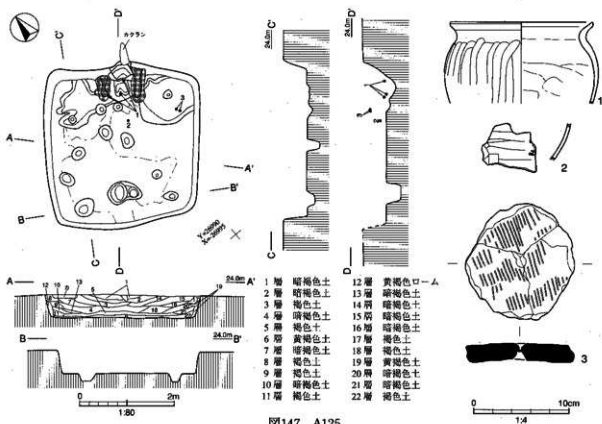


図147 A125

表74 A125遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口徑×底徑×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 壺	(15.0)×-(8.60) 外面 胴上部一縦位のヘラケズリ 内面 横位のヘラナデ	黄	雲母・ 赤色微	1/4 口縁 胴上部	
2	土師器 小型壺	外面 ロク口成形 体部外面一縦位のヘラケズリ 内面 ロク口成形	黄	雲母・ 赤色・ 白色微	1/4 以下	墨書 体部外面 「口」
3	土製円盤	6.20×5.70×孔徑0.50 外面 タクキメ 内面 当具痕	黄	石英・ 白色微	1/4 以下	須恵器壺片転用

A126

遺構 ロームの床で、全体に軟弱である。壁はロームの壁で、斜めに直線的に立ち上がる。竈は北壁やや西よりで検出されている。明瞭な袖部・天井部を検出することができず、遺存状態は良くない。明瞭な煙道も検出されず、竈として特殊な形態である。また、北壁東よりで炉跡を検出している。覆土は色調を基本に14層に分層。住居跡北側で若干の焼土を検出しているが、概ね、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土中にかけて比較的多く出土。床面直上から須恵器の線刻土器(1)、須恵器の墨書土器(3)が出土している。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と判断した。本住居跡は、栗谷遺跡の他の住居跡と比べ突出した規模・形態を呈し、竈の位置・構造も特殊であり、燃焼施設として炉を併用している。集落内における性格も、ここでは特定するには至らなかったが、単に居住用の住居跡に留まらず、特殊な性格を検討する必要があるだろう。

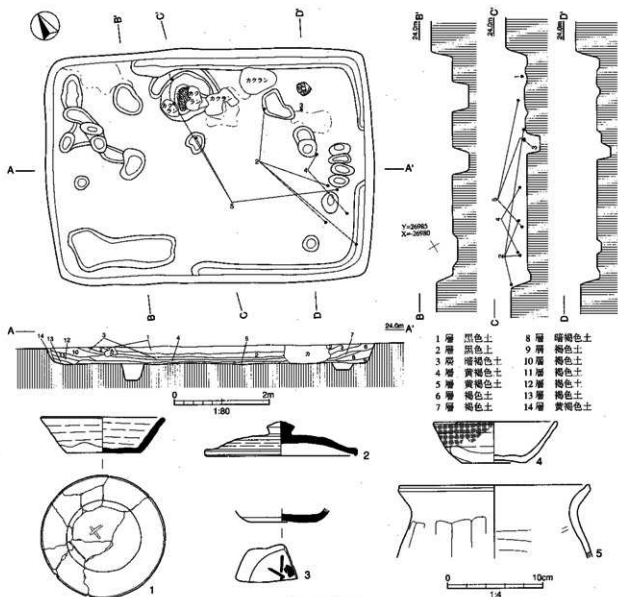


図148 A126

表75 A126遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法 蓋 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	須恵器 杯	13.0×7.80×3.80 外面 ロクロ成形 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	黒灰 軟	石英・ 長石・ 白色微	ほぼ 完形	線刻 底部外面 □
2	須恵器 蓋	16.1×-×3.60 外面 ロクロ成形 体部一回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	黄	石英・ 長石・ 白色微	1/4	
3	須恵器 杯	-×(7.00)×(1.40) 外面 ロクロ成形 体部下端一回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	黄	雲母・ 長石・ 白色微	1/4 以下	墨書 底部外面 □
4	土師器 杯	13.1×6.60×4.40 外面 ロクロ成形 体部下端一手持ヘラケズリ	暗淡茶 軟	雲母・ 石英微	完形	スス付着
5	土師器 甕	(20.0)×-×(7.70) 外面 胴上部一握位のヘラケズリ 内面 横位のナデ	黄	雲母・ 長石・ 白色微	1/4	

A127

遺構 ロームを踏み固めた床で、全体的に堅い。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。竈は北壁ほぼ中央で検出されている。両袖とも残る良好な状態であった。覆土は色調を基本に16層に分層した。住居跡南壁際、覆土中層で比較的多くの焼土を検出している。人為的堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土中にかけて比較的多く出土。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の住居跡と判断した。

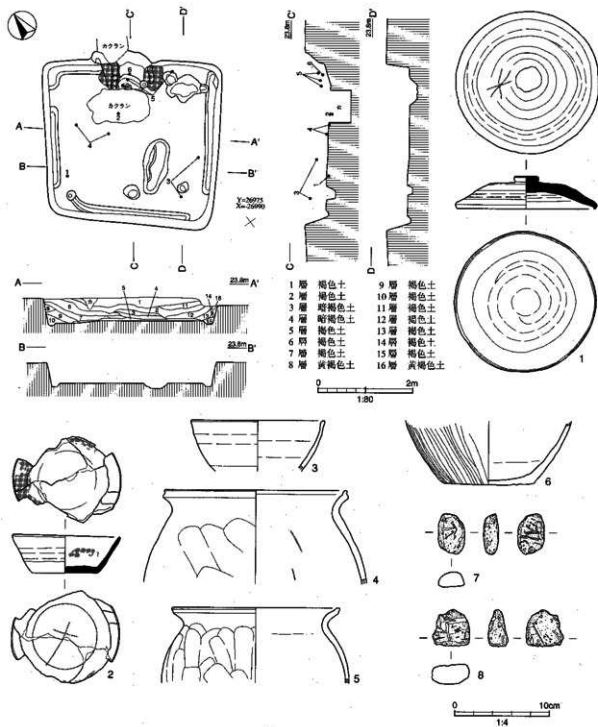


図149 A127

表76 A127遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 調成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 蓋	15.0×-×3.40 外面 ロクロ成形 体部下端-回転ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	青	雲母少 石英・ 長石微	完形	線刻 体部外面 「□」
2	須恵器 坏	11.4×6.90×4.10 外面 ロクロ成形 体部下端-回転ヘラケズリ スス付着 内面 ロクロ成形 スス付着	硬	長石・ 白色微	2/3	線刻 底部外面 「×」
3	土師器 坏	(14.2)×-(5.40) 外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	青	雲母・ 白色微	1/4 以下	
4	土師器 甕	(19.2)×-(9.90) 外面 胴上部-縦位のヘラケズリ 内面 横位のヘラナデ	青	雲母石 石英石 白色微	1/4 以下	口縁・上部遺存
5	土師器 甕	(17.8)×-(8.00) 外面 縦位のヘラケズリ 内面 横位のナデ	青	雲母石 石英石 白色微	1/2	口縁部 胴上部
6	土師器 甕	-×(10.6)×(6.80) 外面 胴下部-ヘラミガキ 内面 横位のナデ	青	雲母石 石英石 白色微		本業旗
7	石製品 軽石	4.30×2.80×厚さ1.60 4.4g 中型の軽石製品。一面が平坦であるが、全体の形状は長楕円形に近く中央短軸側をほぼ一周するように、溝状の刻みを持つ	青			
8	石製品 軽石	3.90×3.90×厚さ2.10 5.0g 中型の軽石製品。全体の形状は台形に近いが、各所の研磨痕を持ち、一面には溝状の刻みがし字状につけられる	青			

表77 竪穴住居跡一覧(3)

(単位m)

遺構番号	検出 調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位 置 周溝・備考
A-114	F10-14	不整形 N-34°-E 覆土中から少量出土	床面 ロームを踏み固めた床。東へ向かうにつれやや傾斜している。部分的に軟弱化している 色調を基本に4層に分層。自然堆積	カマド 周溝 検出されず
A-115	F10-15	方形 -×-×0.53 N-49°-W 覆土中から少量出土。床面直上・カマド前から坪一点出土	床面 ロームを踏み固められている。中央部が少しくぼんでいる。部分的に軟弱化している 色調を基本に16層に分層。自然堆積	カマド 2基有り。北東 コーナー拡張住居 周溝幅 0.14m
A-116	F9-87	長方形 4.60×5.43×0.53 N-5°-E 全体としての出土量は少ないが、覆土中層から比較的多く出土	ハードローム質でよく踏み固められた床だが、中央部はソフトローム質の軟弱な床 色調を基本に18層に分層。自然堆積	カマド 周溝 全周する 周溝幅 0.23m
A-117	F9-90	長方形 3.84×3.31×0.04 N-26°-E 全体としての出土量は少ないが、掘り込みが浅いためか床直遺物が多い	ソフトローム質のよく踏み固められた床 色調を基本に6層に分層。自然堆積	カマド 周溝 一部有り 周溝幅 0.22m

遺構番号	検出調査区	平面形 規模；長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位置 周溝・備考
A-118	G10-22	方形 2.32×2.24×0.50 N-27 ^o -W	ロームをよく踏み固めた床。住居中央に大型のピットを2基検出	カマド 周溝 全周する 周溝幅 0.23m
		覆土中から少量出土	色調を基本に13層に分層。覆土下層に焼土を多量に含み、焼失家屋である	
A-119	G10-14	方形 3.40×3.50×0.34 N-10 ^o -E	床 あまり踏み固められていない軟弱な床	カマド 周溝 全周する 周溝幅 0.20m
		覆土中から少量出土	色調を基本に16層に分層。自然堆積	
A-120	H8-56	不明 -×-×0.04	床 全体的に軟弱である	カマドか？ 周溝 検出されず
		覆土中から少量出土	色調を基本に2層に分層。自然堆積	
A-121	H8-28	不明 -×-×0.84 N-6 ^o -W	ロームを踏み固めた床で全体的に硬い	カマド 周溝 一部検出 周溝幅 0.09m
		床面直上～覆土中にかけて上層を中心に多量に出土。床面直上から刀子出土	色調を基本に17層に分層。一部分的に焼土を検出。おおむね自然堆積	
A-122	H8-7	不明 -×-×0.33 N-32 ^o -W	ロームの床でやや軟弱。硬化面一部にあり	カマド 周溝 一部検出 周溝幅 0.07m
		床面直上から覆土中にかけて多量に出土	色調を基本に12層に分層。自然堆積	
A-123	H7-97	方形 4.02×4.00×0.52 N-23 ^o -W	床 ロームを踏み固めた床で、中央部は軟弱。カマド周辺は特に硬い	カマド 周溝 一部検出 周溝幅 0.20m
		覆土中から少量出土	色調を基本に18層に分層。覆土中層で焼土を多量に検出。人為的堆積	
A-124	H7-90	不明	床 わずかに硬化している カマドの一部分を検出したのみ	カマド 周溝 検出されず
		床面直上で数点出土。墨書土器出土		
A-125	H7-90	不整形 3.33×3.14×0.44 N-42 ^o -E	床 ロームを踏み固めている。中央部よりやや西側に軟弱な床が広がる	カマド 周溝 検出されず
		覆土中から比較的多く出土	色調を基本に22層に分層。自然堆積	
A-126	H7-88	長方形 4.90×6.80×0.42 N-37 ^o -E	ロームの床で全体的に軟弱	カマドか？ 周溝 一部検出 周溝幅 0.24m
		床面直上から覆土中にかけて比較的多く出土。墨書土器出土	色調を基本に14層に分層。自然堆積	
A-127	H7-79	方形 3.30×3.54×0.42 N-40 ^o -E	床 ロームをよくつき固めていて全体的に硬い	カマド 周溝 約3/4周 周溝幅 0.13m
		床面直上から覆土中にかけて比較的多く出土	色調を基本に16層に分層。全体的に焼土を含み、人為的堆積	

(2) 掘立柱建物跡

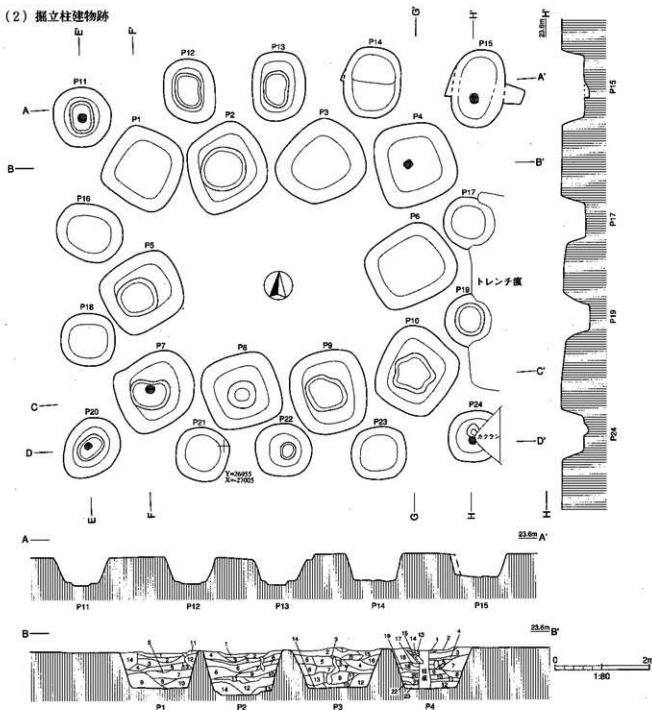


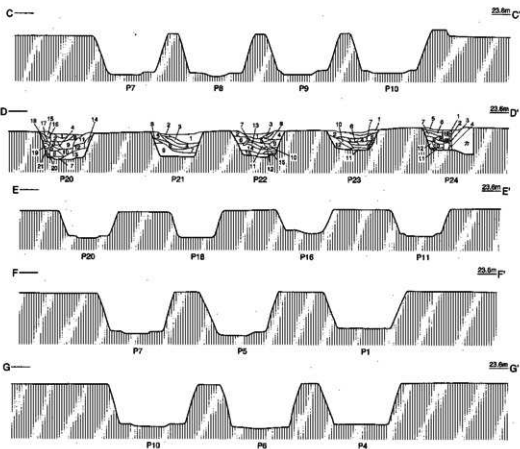
図150 B002

B002

遺構 柱穴列が二重に廻る、特殊な掘立柱建物跡である。建物の方位は、ほぼ東西南北にきっちりと配置されている。外側の柱列(P11~P24)の規模は、桁行四間(8.1m)×梁行三間(7.16m)であった。柱掘方の形状は不整形を呈し、きっちり掘り込まれている。柱痕は四隅で検出されている。内側の柱列(P1~P10)の規模は、桁行三間(5.46m)×梁行二間(4.68m)であった。柱掘方の形状は、外側の柱列よりも規模が大きく、隅丸長方形を呈し、外側の柱列よりも更にきっちり掘り込まれている。柱痕は土層断面において7カ所(P4,P5,P7,P11,P15,P20,P24)で検出されている。

遺物 柱穴内から土師器片が一点出土。

所見 出土遺物および規模形態等から、奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。四面廂の掘立柱建物跡の可能性もあるが、外側の柱列と内側の柱列の軸線が一致せず、なお検討を要する。



P1
 1層 褐色土
 2層 褐色土
 3層 褐色土
 4層 褐色土
 5層 褐色土
 6層 暗褐色土
 7層 暗褐色土
 8層 褐色土
 9層 褐色土
 10層 暗褐色土
 11層 黃褐色土
 12層 褐色土
 13層 褐色土
 14層 褐色土

P2
 1層 暗褐色土
 2層 暗褐色土
 3層 暗褐色土
 4層 褐色土
 5層 暗褐色土
 6層 褐色土
 7層 暗褐色土
 8層 褐色土
 9層 褐色土
 10層 褐色土
 11層 褐色土
 12層 褐色土
 13層 褐色土
 14層 褐色土

P3
 1層 褐色土
 2層 褐色土
 3層 黃褐色土
 4層 黃褐色土
 5層 褐色土
 6層 褐色土
 7層 褐色土
 8層 褐色土
 9層 褐色土
 10層 褐色土
 11層 褐色土
 12層 褐色土
 13層 褐色土
 14層 暗褐色土
 15層 褐色土
 16層 褐色土

P4
 1層 暗褐色土
 2層 褐色土
 3層 褐色土
 4層 褐色土
 5層 褐色土
 6層 褐色土
 7層 暗褐色土
 8層 暗褐色土
 9層 褐色土
 10層 褐色土
 11層 褐色土
 12層 褐色土
 13層 褐色土
 14層 褐色土
 15層 褐色土
 16層 褐色土
 17層 褐色土
 18層 褐色土
 19層 褐色土
 20層 褐色土
 21層 褐色土
 22層 褐色土
 23層 褐色土

P20
 1層 暗褐色土
 2層 褐色土
 3層 褐色土
 4層 褐色土
 5層 褐色土
 6層 褐色土
 7層 暗褐色土
 8層 暗褐色土
 9層 褐色土
 10層 褐色土
 11層 褐色土
 12層 褐色土
 13層 黃褐色土
 14層 褐色土
 15層 褐色土
 16層 褐色土
 17層 黃褐色土
 18層 褐色土
 19層 黃褐色土
 20層 褐色土
 21層 黃褐色土

P21
 1層 褐色土
 2層 暗褐色土
 3層 暗褐色土
 4層 褐色土
 5層 黃褐色土
 6層 褐色土
 7層 褐色土
 8層 黃褐色土
 9層 褐色土

P22
 1層 暗褐色土
 2層 褐色土
 3層 褐色土
 4層 褐色土
 5層 暗褐色土
 6層 褐色土
 7層 褐色土
 8層 褐色土
 9層 暗褐色土
 10層 暗褐色土
 11層 褐色土
 12層 黃褐色土
 13層 褐色土
 14層 褐色土
 15層 褐色土
 16層 褐色土

P23
 1層 褐色土
 2層 暗褐色土
 3層 褐色土
 4層 粘土壤
 5層 褐色土
 6層 褐色土
 7層 褐色土
 8層 褐色土
 9層 褐色土
 10層 褐色土
 11層 褐色土
 12層 褐色土

P24
 1層 褐色土
 2層 褐色土
 3層 褐色土
 4層 褐色土
 5層 褐色土
 6層 褐色土
 7層 暗褐色土
 8層 褐色土
 9層 暗褐色土
 10層 褐色土
 11層 褐色土
 12層 黃褐色土

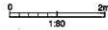


圖151 B002(2)

遺構 桁行三間(5.8m)×梁行二間(3.8m)の掘立柱建物跡である。桁行の主軸方位はN-24°-Eとなる。柱掘方の形状は不整形円形を呈し、しっかりと掘り込まれている。梁側の柱掘方が桁側の柱掘方と比べ規模が大きい傾向がある。柱痕は土層断面において5カ所(P3,P5,P6,P8,P9)で検出されている。

遺物 柱穴内から須恵器・土師器片が数点出土。

所見 出土遺物および規模形態等から、奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

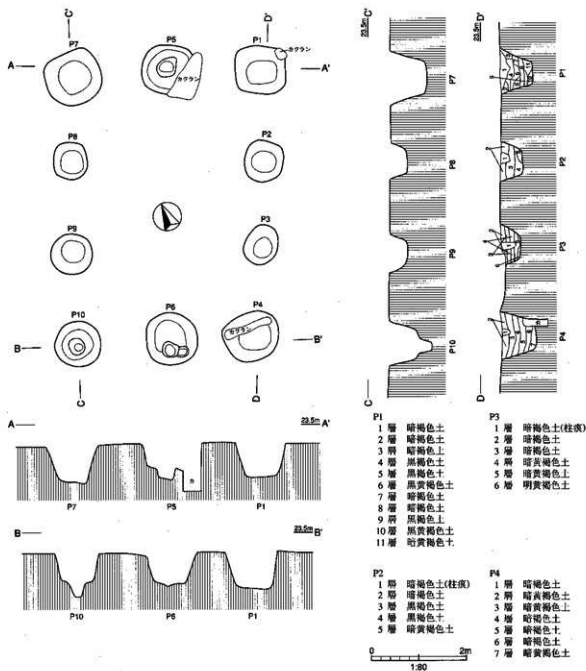


図152 B003

B004

遺構 桁行二間(5.5m)×梁行二間(4.5m)の掘建柱建物跡である。西側の桁側の柱穴は検出できなかった。桁行の主軸方位はN-31°-Eとなる。柱掘方の形状は不整形円形を呈し、しっかりと掘り込まれている。土層断面において柱痕は検出されていない。

遺物 柱穴内から須恵器片が1点出土。

所見 出土遺物および規模形態等から、奈良・平安時代の掘建柱建物跡と判断した。

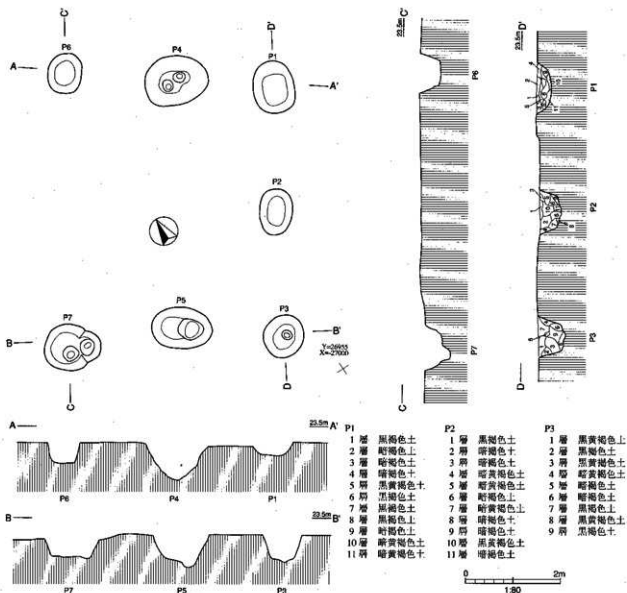


図153 B004

B005

遺構 桁行二間(3.2m)×梁行二間(3.0m)の掘建柱建物跡である。桁行の主軸方位はE-10°Sとなる。柱穴掘方の形状は隅丸長方形を呈し、しっかりと掘り込まれている。桁側の柱穴は梁側の柱穴に比べ規模が大きい。柱痕は土層断面において6カ所(P1,P3,P4,P5,P7,P8)で検出されている。

遺物 柱穴内から土師器片が1点出土。

所見 出土遺物および規模形態等から、奈良・平安時代の掘建柱建物跡と判断した。

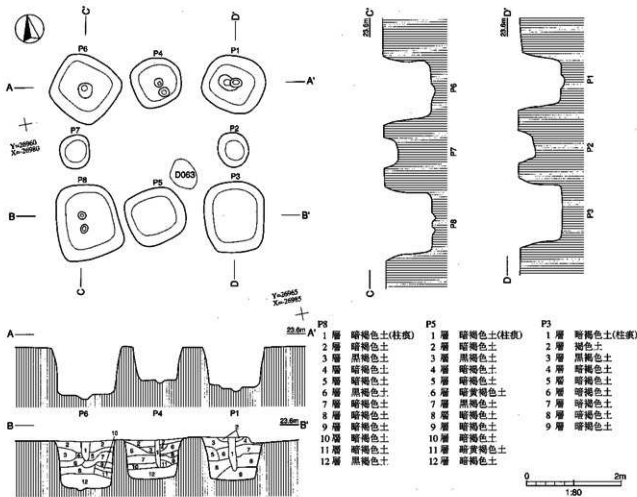


図154 B005

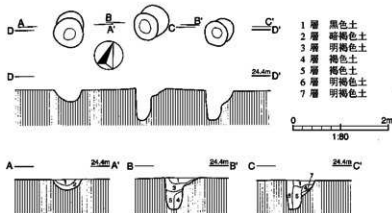


図155 B006

B006

遺構 調査区域縁辺部で検出された為、柱穴3基のみの調査となった。柱穴掘方の形状は不整円形を呈し、しっかりと掘り込まれているが、栗谷遺跡において検出された他の掘建柱建物跡と比較して、小規模である。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 規模・形態および覆土の観察等から、奈良・平安時代の掘建柱建物跡と判断した。

表78 掘立柱建物跡一覧表

(単位m)

遺構番号	検出区	間 数		主軸方位		柱穴規模 (長軸×短軸×深さ)		備 考
		長 軸	短 軸					
B002	I7-61	2×3	N-4°-W	P1 (1.56×1.54×0.76)	P2 (1.68×1.64×0.92)	遺物 柱穴内から土師器片 が1点出土		
				P3 (1.78×1.56×0.80)	P4 (1.66×1.64×0.84)			
		4.68	5.46	P5 (1.64×1.48×0.88)	P6 (1.78×1.56×0.94)			
				P7 (1.66×1.46×0.84)	P8 (1.56×1.50×0.88)			
		3×4	N-4°-W	P9 (1.72×1.56×0.86)	P10 (1.70×1.56×0.90)			
				P11 (1.24×1.18×0.56)	P12 (1.30×1.06×0.56)			
7.16	8.10	P13 (1.46×1.10×0.56)	P14 (1.46×1.18×0.56)					
P15 (1.64×1.10×0.46)	P16 (1.40×1.16×0.50)	P17 (-×-×0.56)	P18 (1.12×1.10×0.50)					
P19 (-×-×0.56)	P20 (1.36×1.08×0.58)	P21 (1.10×1.08×0.50)	P24 (1.16×1.08×0.54)					
P23 (1.16×1.08×0.40)	P26 (1.06×-×0.44)							
B003	I7-51	2×3	N-24°-E	P1 (1.04×1.00×0.78)	P2 (0.86×0.80×0.44)	遺物 柱穴内から土師器片 須恵器片が2点出土		
		3.8	5.8	P3 (0.84×0.66×0.40)	P4 (1.14×1.16×0.70)			
				P5 (-×-×0.72)	P6 (1.10×1.06×0.70)			
				P7 (1.16×1.10×0.78)	P8 (0.78×0.70×0.36)			
		P9 (0.84×0.84×0.36)	P10 (0.94×0.94×0.90)					
B004	H7-60	2×2	N-31°-E	P1 (1.10×0.86×0.30)	P2 (0.96×0.68×0.44)	遺物 柱穴内から須恵器片 1点出土		
		4.5	5.5	P3 (0.90×0.82×0.58)	P4 (1.30×1.02×0.74)			
				P5 (1.26×0.86×0.66)	P6 (0.82×0.70×0.42)			
B005	H7-69	3×3	N-10°-E	P1 (1.26×1.16×0.94)	P2 (0.70×0.64×0.36)	遺物 柱穴内から土師器片 1点出土		
		3.0	3.2	P3 (1.46×1.24×0.90)	P4 (1.04×1.00×0.72)			
				P5 (1.20×1.14×0.82)	P6 (1.32×1.28×1.06)			
		P7 (0.70×0.60×0.28)	P8 (1.56×1.28×1.04)					
B006	H8-56	×	-	P1 (0.58×0.58×0.24)	P2 (0.58×0.50×0.66)	遺物 なし		
				P3 (0.56×0.52×0.60)				

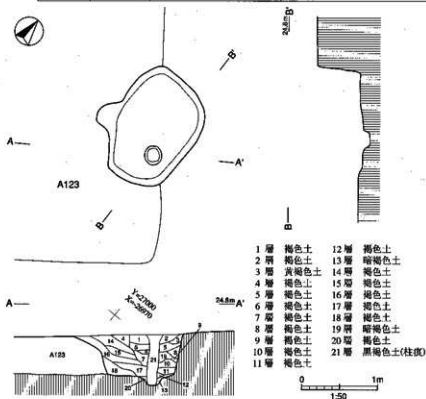


図156 D047

D047

検出地区 H7-98-3G

遺 構 長軸1.5m、短軸1.14m、深

さ0.68m、主軸方位N-2°-Wの土坑である。

平面形は隅丸長方形を呈する。A123と重複関係にあり、本土坑の方が新しい。底部はロームの底部でほぼ平坦であるが、小穴を1基検出している。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。覆土は色調を基本に21層に分層。人為的堆積による埋没が想定される。

遺 物 遺物は出土していない。

所 見 規模・形態・土層の観察からは、奈良・平安時代の掘立柱建物跡の柱穴に類似するが、他に組み合わせる柱穴が無いため、ここでは、用途不明の土坑としておく。

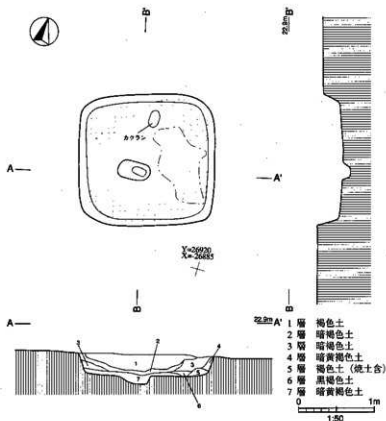


図157 D048

D048

検出地区 G7-19-3G

遺構 長軸1.76m、短軸1.74m、深さ0.3m、主軸方位W-17°-Sの土坑である。平面形は隅丸方形を呈する。底部はロームの底部で、ほぼ平坦であるが、小穴を1基、検出している。壁はロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。覆土は色調を基本に7層に分層。底部・壁際に比較的多量の焼土を検出している。人為的堆積による埋没が想定される。

遺物 遺物は出土していない。

所見 時期・用途等については、遺物が出土していないため、確定はしないが、規模・形態・土層の観察から、奈良・平安時代の火葬墓の一種かと考えている。

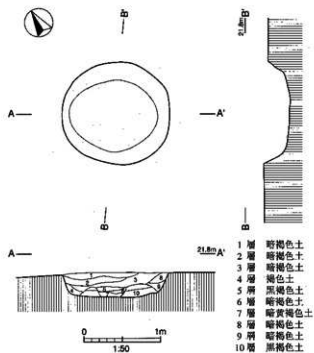


図158 D049

D049

検出地区 G7-19-3G

遺構 長軸1.4m、短軸1.36m、深さ0.32m、主軸方位N-60°-Wの土坑である。平面形は不整円形を呈する。底部はロームの底部で、ほぼ平坦である。壁はロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。覆土は色調を基本に10層に分層。覆土下層に焼土層を検出している。人為的堆積による埋没が想定される。

遺物 遺物は出土していない。

所見 時期・用途等については、遺物が出土していないため、確定はしないが、規模・形態・土層の観察から、D048同様、奈良・平安時代の火葬墓の一種かと考えている。

第4節 中世以降及び時期不明

栗谷遺跡Ⅰ地区における中世以降及び時期不明の遺構は、土坑21基、溝1条（栗谷Ⅰ地区で報告した溝と同一）、その他の遺構1基である。立地に特別な傾向は窺えず、遺跡全体に散漫と広がっている。大部分の遺構が時期、用途不明の遺構である。

以下、個別の遺構についての報告に移るが、詳細は以下の記述、遺構一覧表及び遺物観察表を参照されたい。

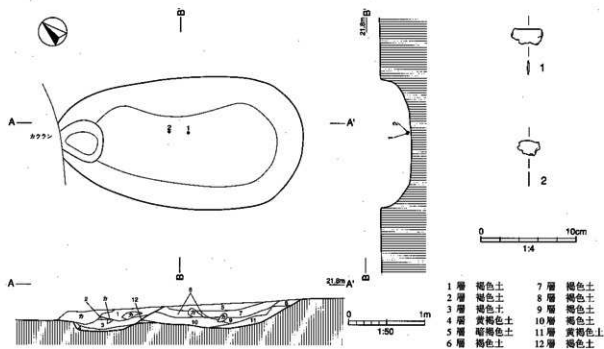


図159 D050

表79 D050遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	鉄製品 不明	(3.30)×1.50×0.20	2.3g				
2	鉄製品 不明	(2.30)×1.50×0.10	1.2g				

D050

検出地区 G9-56-2G

遺構 長軸3.28m、短軸1.7m、深さ0.4mの土坑である。平面形は楕円形を呈する。土層の観察で、2基の土坑が重複していることが判明した。それぞれの底部はロームの底部ではほぼ平坦であるが、新旧の土坑の間に若干の段差がある。ピット等の付属施設は検出されなかった。壁はロームの壁で、斜めに直線的に立ち上がる。覆土は色調を基本に12層に分層され、褐色土系の覆土が主体を成していた。それぞれ、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 底部直上から鉄製品の破片が2点出土。用途を特定するには至らなかった。

所見 鉄製品の破片が出土していることから、奈良・平安時代まで遡る可能性もあるが、時期

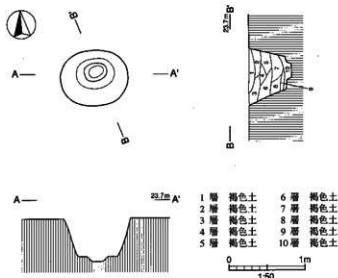


図160 D051

D051

検出地区 H7-79-1G

遺構 長軸0.78m、短軸0.72m、深さ0.56mの土坑である。平面形は楕円形を呈する。底部はロームの底部ではほぼ平坦であるが、小穴を1基検出している。壁はロームの壁で、斜めに直線的に立ち上がる。覆土は色調を基本に10層に分層され、褐色土系の覆土が主体となっていた。人為的堆積による埋没が想定される。

遺物 遺物は出土していない。

所見 規模・形態・覆土堆積状況から、奈良・平安時代の掘立柱建物跡の柱穴の可能性も考えられるが、遺物が出土していないこと、覆土の状況が、奈良・平安時代のものとは若干異なることから、ここでは中世以降の用途不明の土坑とした。

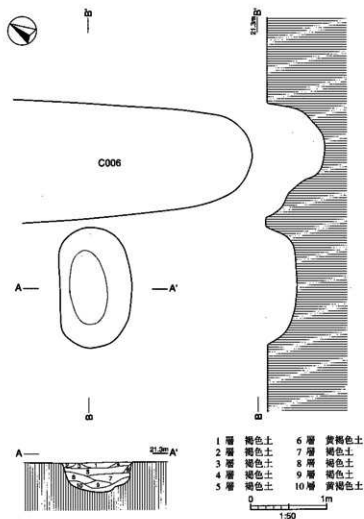


図161 D052

D052

検出地区 G9-45-2G

遺構 長軸1.58m、短軸0.92m、深さ0.38mの土坑である。平面形は楕円形を呈する。底部はロームの底部ではほぼ平坦である。壁はロームの壁で、斜めに直線的に立ち上がる。覆土は色調を基本に10層に分層され、褐色土系の覆土が主体となっていた。人為的堆積による埋没が想定される。

遺物 遺物は出土していない。

所見 中世以降の用途不明の土坑である。

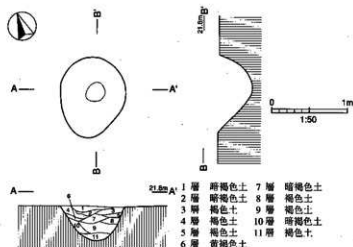


図162 D053

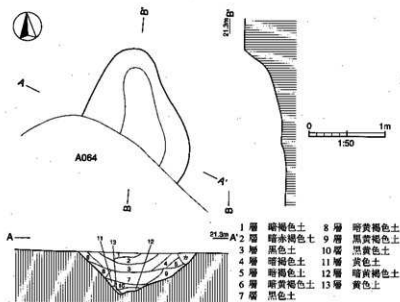


図163 D054

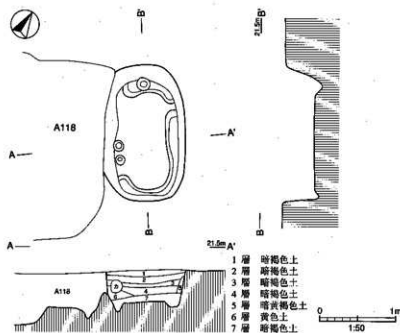


図164 D055

D053

検出地区 G9-28-1G

遺構 長軸1.06m、短軸0.86m、深さ0.46mの土坑である。平面形は楕円形を呈する。しっかりと掘り込まれ、断面は半球状で狭い底面から緩やかに立ち上がってゆく。覆土は色調を基本に11層に分層され、暗褐色土系の覆土が主体となっていた。

遺物 遺物は出土していない。

所見 中世以降の用途不明の土坑である。

D054

検出地区 G10-3-3G

遺構 深さは0.5mの土坑で、A064と重複関係にあり、規模・形態等は不明である。覆土の観察から土坑の方が新しいと判断した。覆土は色調を基本に13層に分層した。13～7層までの第1期と、6～1層の第2期に分けられて埋没したことが伺える。

遺物 遺物は出土していない。

所見 中世以降の用途不明の土坑である。

D055

検出地区 G10-22-1G

遺構 長軸1.06m、短軸0.86m、深さ0.46mの土坑である。平面形は隅丸長方形を呈する。底部はロームの底部でほぼ平坦。壁際に固溝が約3/4周し、さらに小穴を3基検出している。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。A118と重複関係にあり、覆土の観察から土坑の方が新しいと判断した。覆土は色調を基本に7層に分層した。暗褐色土系の覆土が主体となっていた。

遺物 遺物は出土していない。

所見 中世以降の用途不明の土坑である。

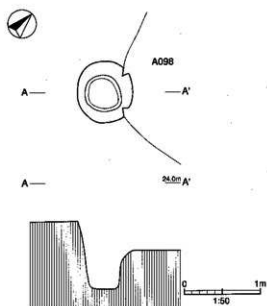


图165 D056

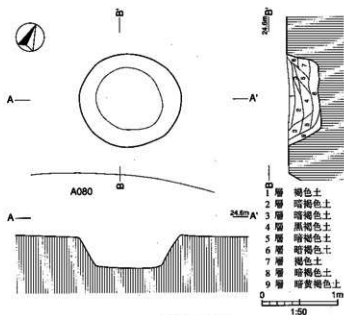


图166 D057

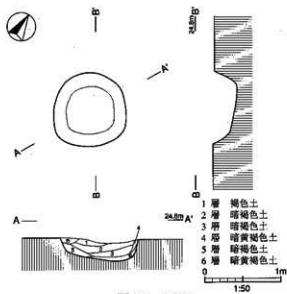


图167 D058

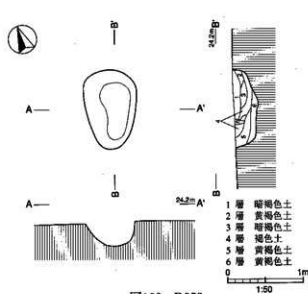


图168 D059

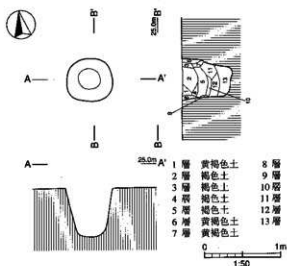


图169 D060

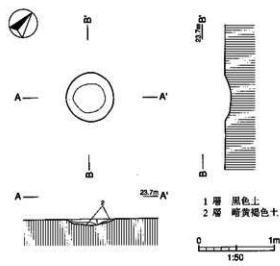


图170 D061

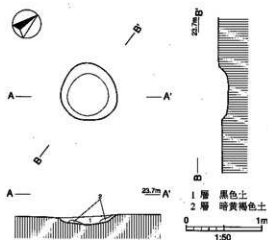


图171 D062

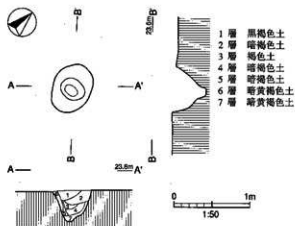


图172 D063

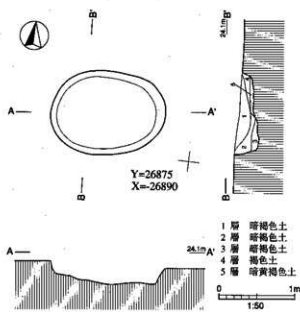


图173 D064

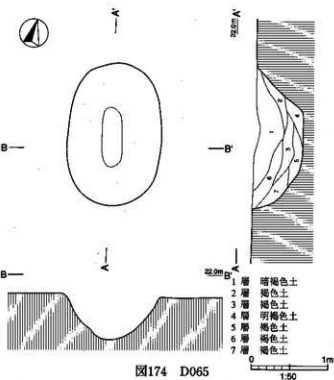


图174 D065

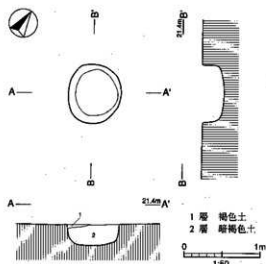


图175 D066

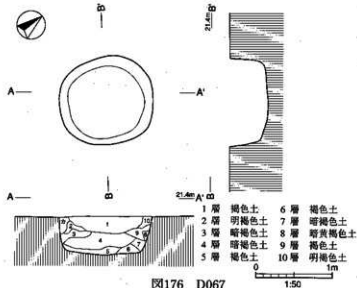


图176 D067

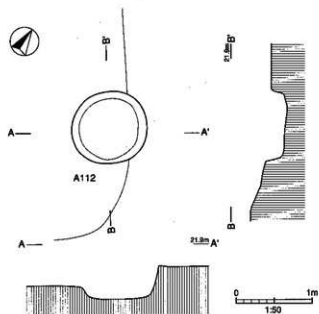


図177 D068

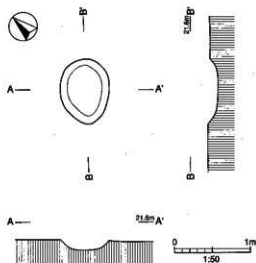


図178 D069

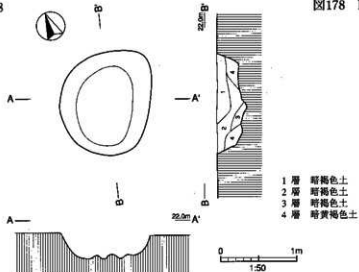


図179 D070

表80 土坑一覧表(2)

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他 備考
D-050	G9-56	不整形円形 3.28×1.70×0.40 主軸 N-47°-W	色調を基本に12層に分層。自然堆積	2基有り
		浅いくぼみ状の土坑	鉄器片-覆土中から2点出土	
D-051	H7-79	楕円形 0.78×0.72×0.56 主軸 N-90°-W	色調を基本に10層に分層。人為的堆積	
		しっかりとした掘り込みをもつ土坑	出土遺物なし	
D-052	G9-45	楕円形 1.58×0.92×0.38 主軸 N-61°-E	色調を基本に10層に分層	
		しっかりとした掘り込みをもつ土坑	出土遺物なし	

遺構番号	検出調査区	平面形 規模：長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他考
D-053	G9-28	不整楕円形 0.60×0.86×0.46 主軸 N-31°-E	色調を基本に11層に分層	
		しっかりとした掘り込みをもち、断面は半球状	出土遺物なし	
D-054	G10-3	不整形 -X-X- 主軸 - - -	色調を基本に13層に分層。2基にわかれ埋積。人為的埋積のうち自然堆積	
		しっかりとした掘り込みをもつ土坑	出土遺物なし	
D-055	G10-22	隅丸長方形 1.80×1.06×0.40 主軸 N-33°-W	色調を基本に7層に分層	A118と重複。本土坑の方が新しい
		底部は平坦。周溝・小穴を3基検出	出土遺物なし	
D-056	H8-71	不整円形 0.80×0.72×0.90 主軸 N-50°-W		A112と重複。本土坑の方が新しい
		しっかりとした掘り込みをもつ土坑 底部はほぼ平坦	出土遺物なし	
D-057	H8-73	不整円形 1.32×1.22×0.42 主軸 N-66°-E	色調を基本に9層に分層	
		しっかりとした掘り込みをもち、底部は平坦	出土遺物なし	
D-058	H8-84	不整円形 0.98×0.94×0.26 主軸 N-30°-W	色調を基本に6層に分層。自然堆積	
		しっかりとした掘り込みをもつ土坑	出土遺物なし	
D-059	H7-99	不整楕円形 1.03×0.63×0.30 主軸 N-19°-E	色調を基本に6層に分層	
		しっかりとした掘り込みをもち、底部は傾斜している	時期不明遺物2点出土	
D-060	H8-6	不整円形 0.60×0.56×0.64 主軸 N-11°-E	色調を基本に13層に分層	
		しっかりとした掘り込みをもち、柱状の土坑	出土遺物なし	
D-061	H7-68	不整円形 0.63×0.61×0.04 主軸 N-37.5°-W	色調を基本に2層に分層	
		浅く窪み状の土坑	出土遺物なし	
D-062	H7-68	不整円形 0.78×0.74×0.12 主軸 N-73°-W	色調を基本に2層に分層	
		浅く窪み状の土坑	出土遺物なし	
D-063	H7-69	不整楕円形 0.69×0.50×0.42 主軸 N-17°-W	色調を基本に7層に分層	
		しっかりとした掘り込みをもつ土坑	出土遺物なし	
D-064	G6-79	不整楕円形 1.50×1.10×0.26 主軸 N-82°-E	色調を基本に5層分層	
		しっかりとした掘り込みをもつ土坑	出土遺物なし	

遺構番号	検出調査区	平面形 規模；長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他考
D-065	G6-76	楕円形 1.90×1.24×0.62 主軸 N-11°-W	色調を基本に7層に分層	
		しっかりとした掘り込みをもち、断面は概曲している	出土遺物なし	
D-066	G6-62	不整形円形 0.79×0.78×0.28 主軸 N-33°-W	色調を基本に10層に分層。人為的堆積	
		しっかりとした掘り込みをもち、底部は平坦	出土遺物なし	
D-067	G6-63	不整形円形 1.24×1.18×0.50 主軸 N-44°-E		
		しっかりとした掘り込みをもち、底部は平坦	出土遺物なし	
D-068	G5-93	不整形円形 1.00×0.96×0.44 主軸 N-57°-E		A112と重複。本土坑の方が新しい
		しっかりとした掘り込みをもち、底部は平坦	出土遺物なし	
D-069	G6-3	不整形円形 0.88×0.64×0.12 主軸 N-45°-E		
		浅い窪み状の土坑	覆土中から小破片数点出土	
D-070	G6-15	不整形円形 1.36×1.18×0.36 主軸 N-20°-E	色調を基本に4層に分層。人為的堆積	
		しっかりとした掘り込みをもち土坑	出土遺物なし	

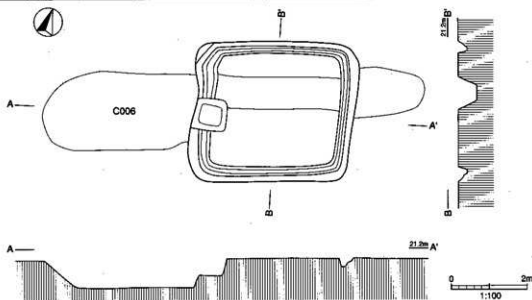


図180 I001

I001
検出地区 G9-44G
遺構 長軸4.18m、短軸3.68m、主軸方位W-17°-Sの方形の遺構である。C006と重複関係にあったが、覆土の観察から本遺構の方が新しいと判断した。床面はロームの床で、非常に堅く、ほぼ平坦である。付属施設として西壁際で方形の小穴を検出した。周溝は全周していた。壁については掘り込みがわずかであった為不明である。
遺物 出土していない。
所見 時期・用途不明の遺構である。

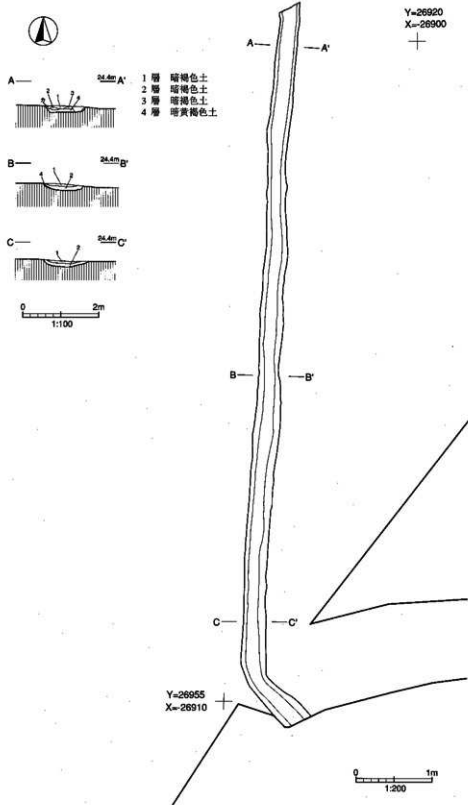


図181 E001

E001

検出地区

H7-1G その他

遺構
である。

栗谷 I 地区で報告した溝と同一の溝である。幅約 1m 程度で、深さは約 0.1m 程度の断面皿状の浅い溝

遺物

覆土中から小破片が少量出土しているのみである。

所見

時期・用途については不明である。

第3章 小結

第1節 縄文時代

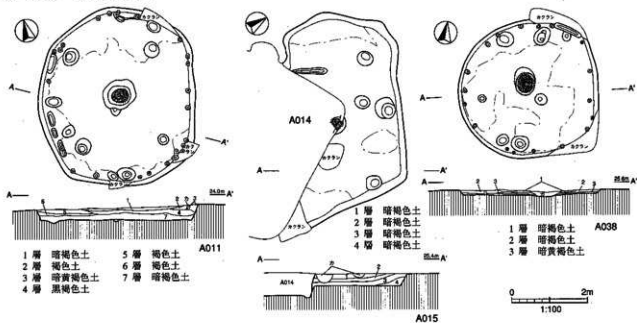


図182 栗谷遺跡 縄文時代竪穴住居跡

栗谷遺跡の縄文時代についてのまとめであるが、本報告書は3分冊の構成になっているため、現段階では、その全容はまだ明らかではない。特に3分冊目には縄文時代の包含層も報告する予定もあり、基本的に、最終的な考察は栗谷遺跡Ⅲで行うこととする。ここでは、1分冊目及び2分冊目の時点で気づいたことについて、若干、触れるにとどめておきたい。

第1項 竪穴住居跡について

栗谷遺跡Ⅰで検出された竪穴住居跡は3軒である(図182)。何れの住居跡も規模は、4.5m前後の不整形円形及び不整形の住居跡で、時期は加曾利E期の住居跡である。栗谷遺跡の台地北側縁辺部に展開している。また、他の地点に比べ、同地点での縄文時代中期後半～後期の遺物出土量も多い。

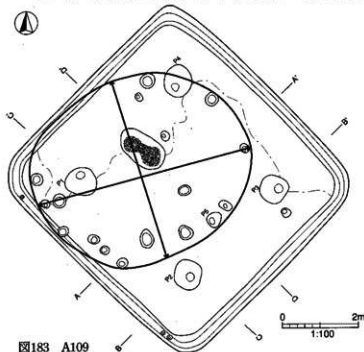


図183 A109

この傾向は、栗谷Ⅱ地区においても同様で台地北側縁辺部に該期の遺物出土量が多い。栗谷Ⅱ地区において住居跡は検出されなかったが、興味深いのは古墳時代前期の竪穴住居跡であるA109である。2章2節のA109の報告の部分でも若干触れたが、床面から検出されたピットの配列から遺構が重複していた可能性がある。ピットの配列から住居跡の範囲を想定したものが図183になるが、検出された他の3軒の住居跡と規模・形態が近似し、縄文時代の竪穴住居跡が存在していたことを感じさせる。

第2項 土坑について

栗谷遺跡Ⅰで検出された土坑は13基で、その中で、形状から陥穴と判断できるものが5基存在する。立地的には二群に分けることができ、栗谷遺跡が位置する台地の北側から入り込む谷の谷頭を意識した一群と、東側から入り込む小支谷の谷頭を意識した一群である。前者がD018・D019・D028があたり、後者がD032・D033が当たる。特筆すべきは、各群で陥穴の形状が分類できることである(図184)。このことが、時期差によるものなのか、集団の違いによるものなのか、或いは、対象とする獲物の違いに起因するのかが、現段階では判然としない。栗谷Ⅱ地区においては、陥穴は検出されていない。今後、八千代市のみならず周辺地域も含めた中で検討する課題であろう。尚、D028からは、覆土中から早期条痕文期の土器片が出土している。(註1)

栗谷Ⅰ地区での陥穴以外の土坑で出土遺物から時期を特定できるのは、D011・D014・D016で、それぞれ、加曾利E期・堀之内期・称名寺期にあたる。その他の土坑についても、中期後半～後期の時期が与えられるだろう。栗谷Ⅱ地区では土坑が11基検出され、時期的な傾向としては、栗谷Ⅰ地区と同様で、出土遺物から、加曾利E期～加曾利B期の時期が与えられる。更に栗谷Ⅱ地区においては、これらの土坑が比較的まとまった範囲に集中している(図185)。前項でも触れたが、この集中区に該期の遺物も比較的多く出土している。特にD044出土の深鉢は後期の埋蓋を思わせる状態で出土し、D045の北方8 mには、後期、称名寺期の深鉢を出土する土坑D034も検出され、D034は、同時に焼土も検出されている。これらのことから、この地区については、単

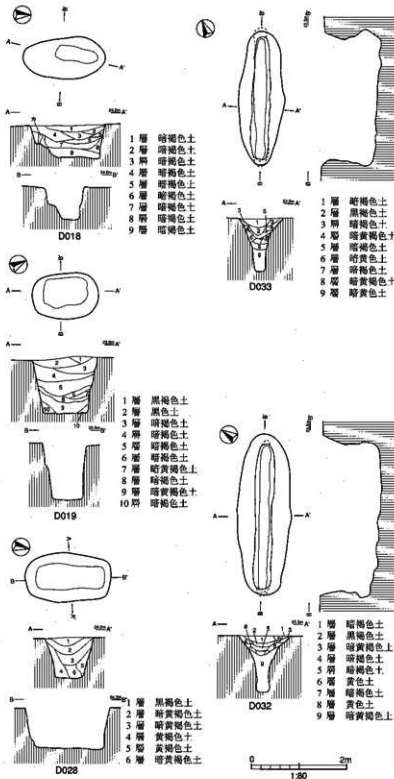


図184 栗谷遺跡 縄文時代陥穴

に土坑群ということに留まらず、住居クラスの遺構が存在していた可能性がある。前項で触れたA109もこの地区に含まれる。いずれにしても、図185に示した地区が栗谷遺跡における縄文中期後半～後期にかけての1つのポイントとなると言えるだろう。

炉穴については栗谷Ⅰ地区で22基、同Ⅱ地区で3基検出され、現段階で合計25基の炉穴が指摘できる。全ての炉穴から時期決定できる遺物が出土しているわけではないが、栗谷Ⅰ地区で調査されたF021のように早期条痕文系土器を出土する炉穴があり、他の炉穴も規模・形態の上で近似しているの、F021同様、早期条痕文期の所産である

として良いだろう。立地的には、台地北側縁辺部に比較的集中している傾向はあるものの、台地平坦部にも比較的多く検出されており、未だその全容を把握するには至っていない。同じ台地上に隣接して存在する上谷遺跡においては、相当数の炉穴が展開し、栗谷Ⅲ地区においても早期条痕文系土器群を出土する包含層を検出している。詳細については、今後の上谷遺跡の成果を踏まえつつ、栗谷遺跡Ⅲでの報告としたい。

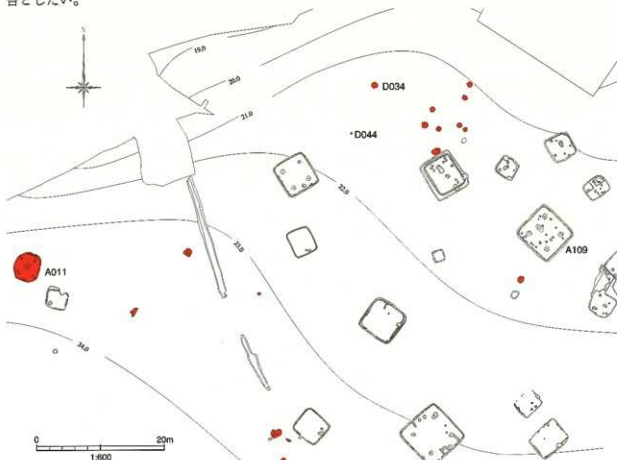


図185 栗谷遺跡 I・II縄文時代遺構集中区

第3項 まとめ

これまでの栗谷遺跡の縄文時代に関して、若干のまとめを行いたい。まず、早期については遺構としては検出されていないが、遺物として早期前半の撚糸文系土器群が少量ながら出土している。早期の主体となる時期は、早期後半・条痕文期となる。撚糸文期に比べ、遺物出土量も増し、遺構としては炉穴・陥穴等を検出している。

次に中期に目を向けると、台地北側縁辺部を中心にして、中期後半から竪穴住居跡群及び土坑群が展開する。これらの遺構群は後期に至るまで断続的に続くようである。栗谷遺跡の縄文時代の集落展開を考える上で、中期後半から後期にかけての時期が1つの重要な時期となるだろう。

また、注意しておかねばならないことは、早期・中期・後期と遺構・遺物が断続的にはあるが、検出されていることに対し、前期の遺構・遺物の検出例、出土量が極めて少ないことである。今後、栗谷遺跡のみならず、周辺の遺跡にも考慮に入れながら考えなくてはならない問題となるだろう。

以上、簡単ではあるが、縄文時代についての所見を述べてきたが、これは、あくまでも栗谷Ⅰ地区・Ⅱ地区の整理段階のものであり、今後の整理の過程の中で、大きく変わる可能性も含んでいる。いずれにしても、今後の整理作業の重要性を指摘して、縄文時代のまとめのひとまずの結びとしたい。

第2節 弥生時代中期

弥生時代については、栗谷遺跡全体をととして後期が主体となる時代であるが、II地区において、弥生時代中期の集落及び墓域がほぼ完結した状態で報告できた為、別に節を立てて弥生時代中期のまとめを行いたい。

第1項 出土遺物について

栗谷遺跡において検出されている弥生時代中期の遺構は、中期後半の宮ノ台期の遺構で、竪穴住居跡5軒、土坑1基、方形周溝墓11基である。これらの遺構から出土した遺物について若干の考察を行いたい。宮ノ台式土器の編年的研究は、近年、最も進展した研究領域であろう(註2)。各氏、細分を試みているが、その中で共通している部分は、施文方法における櫛描波状文の有無及び縄文への移行と、器面調整におけるヘラ磨きから刷毛目調整への移行に関してである。つまり、施文方法として櫛描文、調整方法としてヘラ磨きを行う段階から、施文方法として縄文を施し調整方法として刷毛目調整を行う段階に移行していくという点である。

栗谷遺跡においても、このような視点から出土遺物について検討を試みたい。本来、遺構出土遺物については、その出土層位は言うまでもなく、その属性が、廃棄によるものなのか、遺棄によるものなのかの検討を加えなければならない(註3)。しかし、残念ながらその時間的余裕もなく、なによりも筆者の力量不足からそこまでの検討を加えることは今回できなかった。ここでは、床面直上から覆土下層出土遺物を中心とし、なおかつ、器形の判る土器を基本的に遺構内一括資料として扱う。

以上のことを踏まえつつ、出土遺物を検討したい。宮ノ台期の遺構から出土した土器の器種構成は壺形土器・広口壺形土器・小型広口壺形土器・台付鉢(高坏)・甕形土器である。甕形土器は、3類に分類可能で、A類としては刷毛目調整を主体とする口縁部に刻み目を持つもの、B類として刷毛目調整を主体とする口縁部が波状を呈するもの、C類は口縁部が波状を呈するものの、必ずしも刷毛目調整を主体とはしないものである。器種ごとに出土した遺構をまとめると、

壺	A050-1,-8, A051-1,-2,-5,-6,-7			C006-1, C010-1
広口壺	A050-2			C008-1
小形広口壺	A050-3, A051-4			
台付鉢(高坏)	A050-5			
甕A類	A050-4	A052-3,-4		A054-3
甕B類	A050-6, A051-10	A052-1		A054-4
甕C類	A050-7, A051-3		A053-1,-3	C006-2

となる。A050に関しては、栗谷遺跡で出土している宮ノ台期の土器の器種構成が全て出そろっている(註4)、A050について若干の検討を加えたい。A050は栗谷遺跡出土の宮ノ台期の土器の中で、唯一櫛描文を施文する壺が出土しており、本遺跡の中では一番古い時期の住居跡になるかと思われる。その他に小型広口壺のA050-3は胴部に疑似流水文を施し、高坏A050-5や、甕A類のA050-4は口縁部に刻み目を施しており、宮ノ台期でも若干古手の様相を呈している。共に時期決定の鍵となる。

また、A050-5・A050-4と同様の口縁の作り方をしているものにA052出土の甕が挙げられる。

このことから、A050とA052を本遺跡での、ほぼ同時期の一番古い時期の住居跡群と捉えることができる。

次の段階として捉えることができるのが、櫛描文から斜縄文に施文方法が移行する時期のもので、方形周溝墓出土の遺物であるが、胴部下半に結紐文を施したC008-1・C006-1の段階がくると思われる。

C010-1とA051-1とは、共に、ヘラ削り調整を主体とした壺形土器で、大きさ・器形が近似しており、時期として極めて近い時期を想定できる。さらにC006-1と比較した場合、文様帯（結紐文）の有無、器面調整方法が、ヘラ削りが主体となるなど若干の変化の方向が見られる。全体的な器形はほぼ近似していることから、C006-1と同時期かやや新しい段階のものと考えられる。

出土遺物から見た栗谷遺跡の弥生時代中期の全体的な所見としては、宮ノ台期の中でも櫛描文が施文される時期から施文方法が縄文に変わる段階であると言える。また、縄文を施文する段階の中でも文様構成に羽状縄文や、回転結節文をもつ土器が出土していないことから、型式差として現れてこない極めて短い期間の集落であったと言える。以上のことを踏まえつつ、検討したものが図187になる。

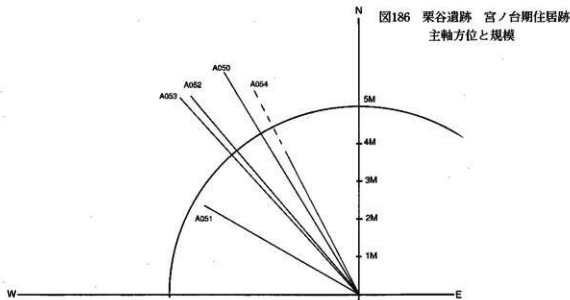
第2節 竪穴住居跡について





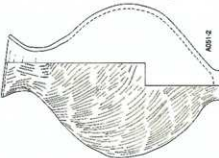






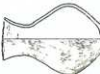





次に、竪穴住居跡について若干触れておきたい。栗谷遺跡において検出された弥生時代中期の竪穴住居跡は5軒で、未調査部分や調査前に削平された部分を考慮したとしても、急激に検出軒数が増加するとは考えられない。また、環濠も検出されていないことから、環濠を持たない時期の小規模な集落であったと言える。

住居跡の規模・形態については、7m前後の小判型あるいは隅丸長方形のものが多い。A050・A052・A053がこれにあたる。若干検討の余地が残る住居跡もあるが、何れもしっかりとした主柱穴を持ち、竪と出入り口施設を結ぶラインを主軸方向とできる典型的な4本柱の住居跡である。A054は、未調査部分が多く、規模形態が不明な部分が多いが、恐らく、これらの例に当てはまると思われる。また、これら4軒の住居跡のうち、A050・A052・A054については拡張を行っている。更に、A050・A052に関しては両住居跡も底部を穿孔している壺形土器を出土している等、共通項で括れる要素がある。

一方、残るA051に関しては、他の4軒とは様相を異にし、形態的には小判形で同じであるが、規模的に4.7mとやや小さくなる。また、柱穴に関しても不明瞭である。主軸方位からの検討をしてもA051は他の4軒とは様相を異にする。以上をまとめたものが、図186になる。規模・形態・主軸方位からは、A050に代表される4軒と、A051との2つにグルーピングできる。


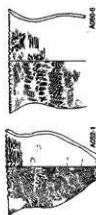



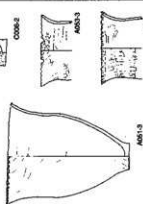
前節での出土遺物の検討からも、A050とA052は、ほぼ同時期であることが窺え、A051は、大きな時期差は無いと言いつながらも、やや新しい状況が見受けられた。これらのことから、栗谷遺跡における宮ノ台期の集落は、型式差として現れるほどは無い短期間で展開し、中でも細かく見れば2時期（恐らくは世代間の差）程度に分けることが可能かと思われる。



	壺	小形広口壺	広口壺	台付鉢 (漏鉢)	
A050 A052					
A054		  			C006 C008
A051 A053	     				C010

S=1/10

図187 栗谷遺跡宮ノ台期における土器家賃(1)

	型 A	型 B	型 C	
A050 A052				
A054				
A051 A053				

S-1710

図187 栗谷遺跡宮ノ台期における土器変遷(2)

第3項 方形周溝墓について

栗谷遺跡では、これまで14基の方形周溝墓が報告され、そのうち今回報告した11基については、弥生時代中期、宮ノ台期の所産である。今回報告した11基については何れも、四隅に陸橋を持つタイプの方形周溝墓で、宮ノ台期の典型的なタイプと言えよう。出土遺物もそれを裏付けている。宮ノ台期の方形周溝墓については、その築造に高い規格性があることは、従前から指摘されているところだが今回、栗谷遺跡において報告した11基についてはその好例になるだろう（註5）。

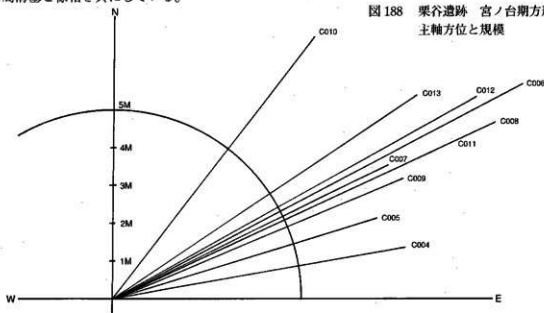
本遺跡における方形周溝墓は、まず、立地上の観点から大きく3つに分かれている。C004～C009のA群とC011～C014のB群、そして、1基のみであるが、C010のC群とに分類可能である。

各群を規模、主軸方向の面で検討を加えたい。なお、規模については各周溝の長軸を延長し、できた4角形の各辺の midpoint を結んだラインを規模とした。攪乱等で周溝が一部しか検出できない場合も復元的に規模を算定できるためである。主軸方位については、基本的に主体部の長軸で、主体部が検出されていない場合は、周溝墓の連結の方向を考慮しながら規模を算定したラインを主軸とした。以上の方法で作成したものが、第2章第2節に掲載した表11方形周溝墓一覧である。また、表11を基に作成したものが図188になる。

まず、A群についてであるが、C006とC008が規模的に12mと11mで他の方形周溝墓に比べ突出している。A群の核となるべき周溝墓と言えよう。A群の他の方形周溝墓は、C007とC009が8mクラス、C004とC005が7mクラスと規模が縮小されている。主軸方位からの検討を加えると、C006～C009までが65°前後で揃っているのに対し、C004とC005は70°を越え他とは違和感がある。規模と主軸方位の双方を考え合わせると（遺構配置図を見れば一目瞭然のことかもしれないが）、A群については、更にC006～C009のA-I群とC004とC005のA-II群に分類できる。

B群については、C012が11mで他の方形周溝墓に比べ規模が大きく、C011とC013は9mクラスである。主軸方位については、ほぼ65°前後で揃っている。また、群として連結の方向がA群と平行関係にある。C014については、周溝の一本しか調査できなかった為、詳細は不明だが、B群に含まれるものと考えている。A群同様、規模と主軸方位の双方を考え合わせると、C012が11mで規模的にやや大きいものの、ほぼ均一な群構成をしていると言える。

C群のC010は、規模が8mクラスで他と大きくは変わらないが、主軸方位については、38°と他の方形周溝墓と様相を異にしている。



A～C群までの規模、主軸方位の検討をしたところで、各群の比較検討をしたい。規模と主軸方位で同一性が窺えるのがA-1群とB群である。またC群（C010）は、規模と他の方形周溝墓と同規模であるが、主軸方位が大きく違い、立地上も他と離れている。栗谷遺跡の弥生時代中期宮ノ台期の方形周溝墓群は大きく3群に分かれ、各群は3～4基を1単位としている。各単位を構成している各周溝墓は緊密な関係があることは言うまでもないが、その中で、A-1群とB群に類似性が見られ、C群が規模、主軸方位、立地で他と様相を異にしている状況が窺える。以上を図示したものが、図189になる。



図189 方形周溝墓の群構成

次に時期的な問題であるが、時期決定ができる遺物が出土している方形周溝墓は、C006・C008・C010の3基である。これら3基を手がかりに検討をしてみたい。C006とC008とから出土した壺形土器及び広口壺形土器は、それぞれ、単筋斜縄文による横走帯と結紐文を組み合わせた文様構成を持ち、ほぼ同時期のものと考えられる。C006とC008が同じA-1群であることから、それを裏付けている。一方C010出土の壺形土器は、ヘラ削り調整の無紋の土器で、C006とC008に比べやや後出的である。このことからA-1群とC群には若干の時間差があり、墓地造営にあたりA-1群がやや先行的で、その後やや遅れてC群の造営が始まったことが窺える。

規模及び主軸方位と時期的な検討からA-1群とB群に類似性があり、A-1群とC群には時間差があり、A-1群が先行的でC群が後出的であることが言える。ここで問題となるのが、今まで検討の対象になっていなかった、A-2群である。A群の核となるべき方形周溝墓がC006・C008であることは、既に述べてきたところだが、A-2群を構成するC004・C005はC006・C008に比べ規模が縮小され、主軸方位がずれていることから、A-1群造営後に造営が始まったと言えないだろうか。

出土遺物が少ないこともあるが、遺物からの検証が足りない感否は否めない。しかし、これまでの検討から、墓域が形成される過程を考えると、A-1群の造営が始まった頃、時期を相前後してもう1つの系統の集団がA-1群に平行する状態でB群の墓域造営を始め、平行した2群の墓域が形成されたと言えないだろうか。そして、A-1群の造営が終了した頃、引き続き、同じA-1群の系統をひく集団がA-2群の造営を始め、その時点で、やはり時期を相前後してもう1つの系統の集団がC群（C010）の造営を始めたと考えられる。このように考える時、栗谷遺跡の方形周溝墓群の形成過程について整合性のある説明ができると言えないだろうか。更に述べると（あえて大胆な想定が許されるならば）、栗谷遺跡の方形周溝墓群の墓域構成原理については、2系統2時期の要素が働いていたと考えられるのである。

第4項 まとめ一集落と墓域の関係を中心として一

最後に集落と墓域の関係について若干述べておきたい。第2項において集落はごく短い期間で展開し、細かくみれば2時期に分かれることを述べた。方形周溝墓の展開を検討した際も同様に2時期に分かれることを検証してきた。出土遺物の項でも触れたが、住居跡A053出土の壺と方形周溝墓C010出土の壺は極めて近似しており、同時期性を窺える。またA053とC010は、それぞれ集落の2期目、墓域の2期目に対応している。集落が2期区分されることと墓域が2期区分されることは、偶然ではないように思われる。A050に代表される集落の第1段階の住居群の人々が墓域A-1群或いはB群に葬られ、A053に代表される集落の人々がA-2群或いはC群に葬られたと考えられはしないだろうか。墓域A-1群におけるC006とC008において型式差として認められない壺及び広口壺が出土している。このことは、A-1群の墓域形成が急速に進んだことを示している。その後、相前後してA-2群及びC群が形成されたことが窺え、C群のC010と住居跡A053が同時期性を示すことは、まさに、集落の展開と墓域の形成過程がリンクしている様子を窺い知ることができる。

集落と墓域の展開について、いまだ少し敷衍したい。宮ノ台期における方形周溝墓の墓域の構成原理に関わる部分である。第2章第2節第1項(3)方形周溝墓の部分でも繰り返述べてきたが、連接する方形周溝墓については、土層の観察から同様の堆積状況を示し、当然のことながら新旧関係にはない。つまり、各墓域群において築造の前後はあるものの、3~4基が1単位として完成された時、その単位内のすべての周溝墓が墓として機能或いは認識されていたと考えられるのである。方形周溝墓の被葬者がいかなる存在かは、世帯共同体内の家長層が主体部に葬られ、その系譜をひくものが次々と葬られ墓域を形成したとする考えは依然根強い。しかしながら、栗谷遺跡の例を見る限り、栗谷遺跡の周溝墓群は土器型式として差がでないほどの時間差で急速に次々と造営され、1単位が完結された時、「墓」が1単位として維持されている状況が窺える。代々の家長層の墓と考える時、3~4基を1単位とする墓域が完成するのに50~100年の年月を要することになり、栗谷遺跡にそれほど長期にわたる宮ノ台期の集落が展開していたとは考えらず、そうした単位が更に2期に区分できるとしたら、宮ノ台期に収まる時間幅ではなくなってしまう(註6)。短期間に形成された栗谷遺跡の方形周溝墓群の墓域構成原理を考える時、集落内の同じ世代の(兄弟姉妹或いは夫婦関係)死亡順に墓が築造され、世代が変わった段階で墓域の単位も変わったと考えられないだろうか(註7)。

以上、論証に欠ける雑駁な文章が続いたが、墓域構成原理として死亡順に周溝墓が築造され、1つの単位として葬られたのは同世代の人間と考えると、栗谷遺跡の集落規模と展開された期間の説明が最もうまくつこうに思われる。ただしこれは栗谷遺跡の時期、存続期間等が遺物からの検証が弱くいくつかの前提条件が付帯していることは事実である。また、いくつかの前提条件をクリアできたとしても、これが、栗谷遺跡における特例なのか、或いは、下総地域における弥生時代中期宮ノ台期における普遍的なあり方なのかという他遺跡との比較検討といった作業は、今回全く検証できなかった。その他にも出土遺物として石器の分析や、方形周溝墓の主体部の問題等手つかずの問題も多い。いずれにしても栗谷遺跡が弥生時代宮ノ台期の様相を伝えてくれるものは多い。今後も研鑽を続けていきたい。

第3節 弥生時代後期

弥生時代後期は、栗谷遺跡の中心的時期にあたる。栗谷遺跡Ⅰ地区では16軒、栗谷Ⅱ地区においては45軒の竪穴住居跡を検出している。栗谷Ⅲ地区においても未整理ではあるが、相当数の弥生後期の竪穴住居跡が整理される予定である。栗谷遺跡の弥生後期の大きな問題点は、所謂、印手系土器の編年的問題と、久ヶ原、弥生町式に代表される南関東系土器の混在の仕方にあると考えられる。しかし、この問題は现阶段では未だ整理がしていない。基本的には第3分冊、或いは、それ以降の問題になると考えている。本節では、これらの問題に近づくために、现阶段で気づいた点について若干述べることにする。

第1項 蓋形土器と蓋形土器を出土する住居跡について

弥生土器の器種構成としては、壺・瓶・高坏が一般的である。従来、印手系土器の器種構成上の特徴としてこれらの器種の形態的分類が困難であることが指摘されてきた。栗谷遺跡においても、そうした状況は同様であり、加えて、栗谷遺跡で器種構成を複雑にしているのが蓋形土器の出土である。蓋形土器は、所謂、印手系土器文化圏の中でも出土例の少ない器種である(註8)。栗谷遺跡で蓋形土器を出土する住居跡は、いずれも栗谷Ⅱ地区の住居跡でA062・A066・A071・A080・A081・A083の6軒である。栗谷遺跡の弥生後期の集落の中でも、台地の南側縁辺部に集中する集落からの出土に限られているようである。また、図190に示されるように蓋形土器を出土する住居跡の特徴は、A062・A083を除くと何れも小判形的大型住居跡からの出土である(註9)。大型住居跡からの出土であるからこそかもしれないが、遺物の出土量が多く、出土する遺物の種類も土器に限らず豊富な構成をしている。特にA080からは、床面直上から弥生の金属製品が共伴している。蓋形土器を出土する住居跡は、集落の中でも特殊な位置を示しそうである。栗谷Ⅲ地区で報告する予定の地区にも後期印手系の土器を出土する大型住居跡が検出されている。今後以上のようなことも念頭に置き、整理を進めていきたい。

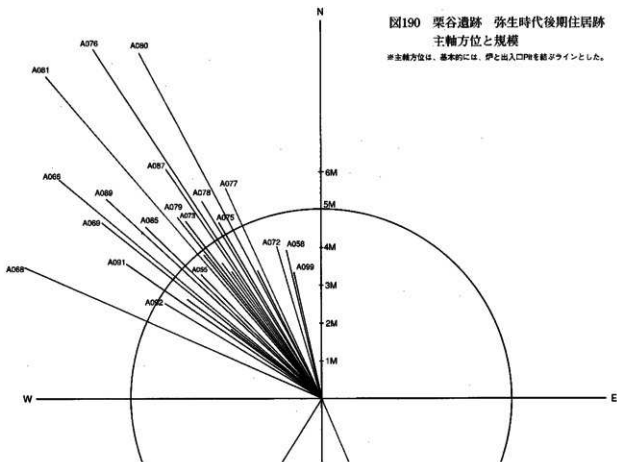


図190 栗谷遺跡 弥生時代後期住居跡
主軸方位と規模

※主軸方位は、基本的には、伊と出入口を結ぶラインとした。

第2項 蓋形土器とその類例等について

蓋形土器そのものに注目すると、つまみの部分で型式的変遷が追えそうだが、今回はそこまで整理するには至らなかった。それぞれの、出土例と共伴する遺物を图示したものが図191になる（註10）。

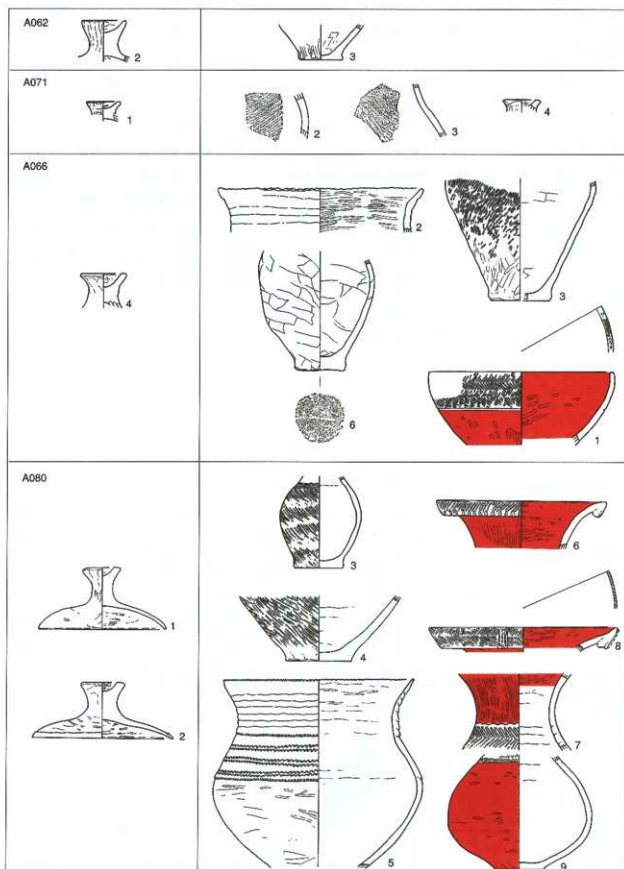
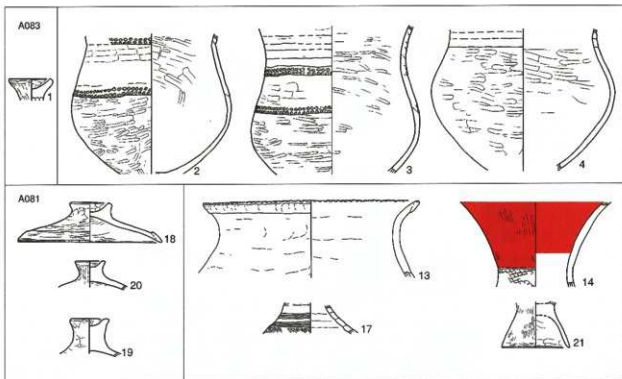


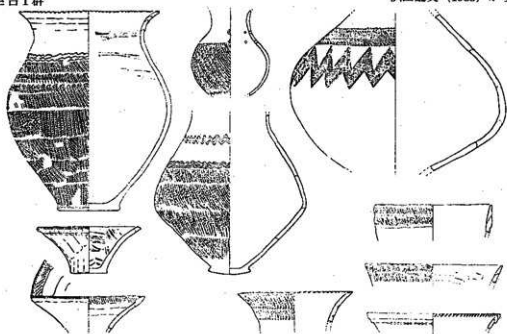
図191 蓋形土器と供伴遺物について S-1/4



ここまでまとめた時点での所見を若干述べておきたい。蓋形土器とそれに共伴する印手系土器と南関東系土器との関係である。小型の住居跡（A062・A083）から出土している蓋形土器は、印手系土器と共伴する傾向にあり、一方、大型の住居跡から出土している蓋形土器は、A071のように若干検討の余地を残すものもあるが、印手系土器、南関東系土器ともに共伴する傾向にある。特に久ヶ原式の影響が強く、甕形土器の頸部において輪積痕を残す甕が共伴している。

蓋形土器は、筆者が勤務する八千代市においては初めての出土例で、類例等を他に求めなくてはならないだろう。ここで注目されるのが、千葉県印旛郡栄町所在のあじき台遺跡である（註11）。あじき台遺跡は印旛沼北岸に位置し印手系土器群を出土する弥生後期から古墳時代を主とする遺跡であるが、蓋形土器を出土する遺跡として知られている。浜田晋介氏は、あじき台遺跡の整理を通して、あじき台遺跡出土の後期印手系土器を櫛描文の在り方から、「あじき台Ⅰ群」と「あじき台Ⅱ群」に分類されている（註12）。浜田氏は、櫛描波状文を主体とする土器群を「あじき台Ⅰ群」とし、櫛描麻状文を主体とする土器群を「あじき台Ⅱ群」とし、その変遷はⅠ群からⅡ群へと時期差をもっていると捉えている。また「あじき台Ⅰ群」の土器群を久ヶ原式土器と共伴し南関東系土器群の影響が強いとし、対して、「あじき台Ⅱ群」の土器群については、その器種組成に南関東系土器群が、構成要素として存在しないとしている。さらに、蓋形土器は、この「あじき台Ⅱ群」に伴う傾向があるとしている。参考までに「あじき台Ⅰ群」土器と「あじき台Ⅱ群」土器を浜田氏の論考から抜粋したものが図192になる。

ここで問題となるのは、蓋形土器の共伴関係が、あじき台遺跡と栗谷遺跡では逆転するというところである。つまり、あじき台遺跡において蓋形土器は、久ヶ原式土器等の南関東系土器の影響が強い「あじき台Ⅰ群」土器に後続する「あじき台Ⅱ群」土器に共伴する傾向があり、「あじき台Ⅱ群」土器は、久ヶ原式土器等の南関東系土器の影響が弱い。それに対して、栗谷遺跡は蓋形土器が、久ヶ原式土器等の南関東系土器と共伴する傾向にある。



あじき台Ⅱ群

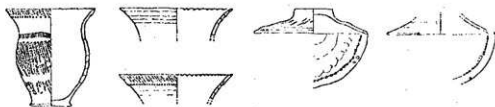


図192 あじき台遺跡出土遺物 S-1/4

第3項 まとめ

これらのことは何を意味するのか。検討すべき点は2点あると考えている。まず、両遺跡で出土している蓋形土器そのものの検討である。図191と図192を比較すれば明らかなように、同じ蓋形土器であるが、両者の形態は異なっている。次に、両遺跡の位置する地点である。同じ印手系土器を出土する弥生後期の遺跡であるが、栗谷遺跡は印旛沼南岸に位置し、あじき台遺跡は印旛沼北岸に位置する。同じ印旛沼南岸に位置する佐倉市所在の吉見台遺跡B地点(註13)5号住居跡で出土している蓋形土器は形態的にも栗谷遺跡出土の蓋形土器に近似している。それぞれの地域での土器における系統差、時期差があり、南関東、北関東それぞれの影響力の差など、全てが関係していると考えている。所謂、印手系土器、印手系文化圏と総称されることも多々あるが、同じ印旛沼周辺の様相を垣間見ても、一括りでは括れない複雑な様相が当該地域にあることを指摘して、栗谷Ⅱ地区における弥生時代後期の小結としたい。

第4節 古墳時代

栗谷遺跡において古墳時代の竪穴住居跡は、I地区・II地区を合わせると28軒である。古墳時代前期に相当するものが23軒（立て替えの住居跡2軒を含む）。古墳時代中期に属するものが4軒、古墳時代後期に属すると思われるのが1軒、検出されている。このうち古墳時代前期に相当する23軒については栗谷遺跡I地区・II地区の範囲の中で、一群を形成しているため、若干の考察を行いたい。

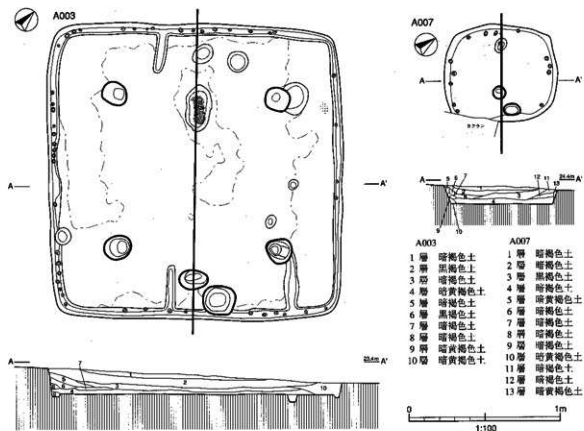


図193 古墳時代前期竪穴住居跡の2類型 S=1/100

第1項 竪穴住居跡の平面形態等について

栗谷遺跡における古墳時代前期の竪穴住居跡の形態・規模等についてであるが、形態については、基本的に2種類に分類できそうである（図193）。ここでは、暫定的にA類とB類としておきたい。A類は、4本柱の隅丸方形の住居跡で、炉は中央からやや壁よりに作られている。貯蔵穴と出入り口施設を伴う典型的なタイプである。B類は、明確な主柱穴を持たないタイプである。炉は中央から住居跡のコーナー側に作られることが多く、さらに、炉の長軸の延長に出入り口施設を作る傾向があり、出入り口施設の脇に貯蔵穴を作る。形態については隅丸長方形である。

住居跡の主軸方向は、A類・B類共に一般的傾向と同じく、北西方向を示している（註14）。ここで、注意したいのが、B類の住居跡に関しては、出入り口が住居跡の長辺側の壁に作られ、長辺側の壁中央ではなく、どちらかによっていることが多いことである。横長の住居の正面の片側によった場所に入出口を作っていることを想定させる。主軸方向と考え合わせると、住居跡の上層構造のみならず、住居内の空間利用のあり方、さらには、集落の景観の復元等を考える上で示唆に富むことが多い。今後、類例を増やし考察してゆきたい問題である（註15）。

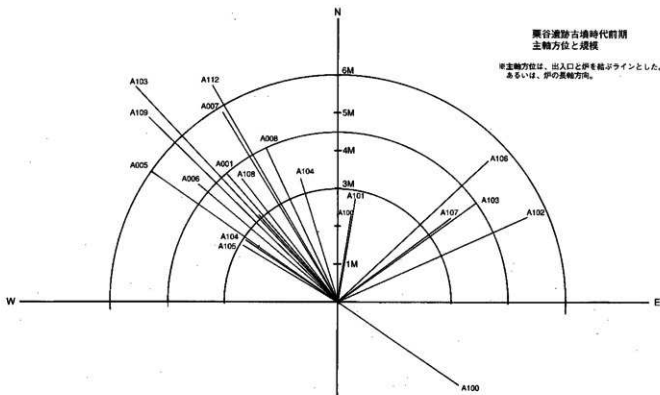


図194 古墳時代前期竪穴住居跡の2類型 S=1/100

さらに、住居跡の規模について考察に加えていきたい(図194)。A類の住居跡は、6m前後の大型住居跡に属す。B類の住居跡については、4.5m前後の中型のものと同3m前後の小型のものと同に分類できる。前者をB-1類、後者をB-2類としたい。具体例としては、A類に、A003・A009・A109が挙げられ、B-1類に、A102・A103などが、B-2類に、A004・A007などが挙げられる。

住居跡の規模・形態については、当然、その中間的なもの、或いは、そのどれにも属さないものなどがあるが、全体的には、以上の大別2類型(細分3類型)が認められると言えよう。また、この2類型は、集落構成とその展開を考える上でも、重要な鍵となってくると思われる。現段階では詳細な分析までは至らなかったが、予察として、恐らく大型住居であるA類(或いはB-1類)の住居跡を中心として、小型(B-2類)の住居跡、数軒が1つの単位となりそうである。また、栗谷遺跡のこの2類型は、隣接する上谷遺跡においても看取され、栗谷遺跡近隣においても、該期の基本的なパターンになりそうである。

第2項 集落の変遷について

集落の変遷は本来、遺物による分析を待たねばならないが、まだ、その分析がされていないため、現段階では、分析に当たり、見通しとなるべき数点の事柄に関して述べることにする。

栗谷遺跡の古墳時代前期の遺物として注目したいものに、A107出土の特殊な小型器台が挙げられる(註16)。小型九底壇と小型器台が一体化した器種で極めて希な器種と言えよう。両者が分離した状態の段階(A001)、両者の機能が結合したA107の段階、さらに、器種として簡略化されるA009・A004と変化の方向が追えないだろうか。

また、特殊な遺物としては、土鍾が挙げられる。A002・A005・A006からの出土である。A005・A006は、規模・形態・主軸方位も近似しており、さらに、両住居跡とも立て替えを行っており、諸状況が類似している。この3軒は、ほかに時期決定できる遺物の出土が無い中、共通する遺物として土鍾を出土している。同時期として捉えてよいと思われる。ほかに土鍾を出土する住居跡としてはA109がある。

最後に、全体的な見通しとしては、大きく4段階に分けることが可能かと思われる。1段階目としては、装飾的な壺を出土する段階で、A109が挙げられる。次の段階として、小型器台及び小型丸底埴を出土する段階で、この段階がおよそ2段階に分けることができよう。2段階目の住居跡としては、A001が、3段階目の住居跡としてA004などが挙げられるだろう。4段階目としては、高坏脚部が長くなる段階でA112が挙げられる。

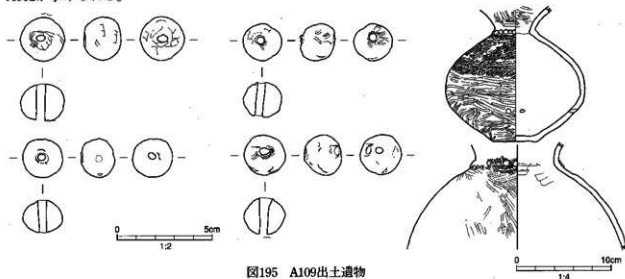


図195 A109出土遺物

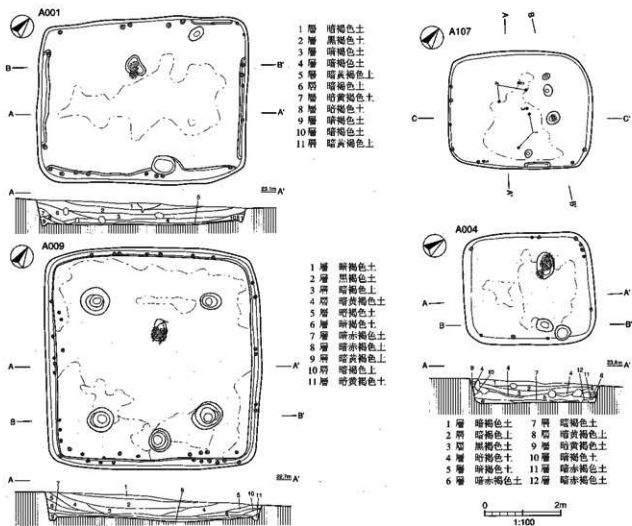


図196 小形器台出土の住居跡

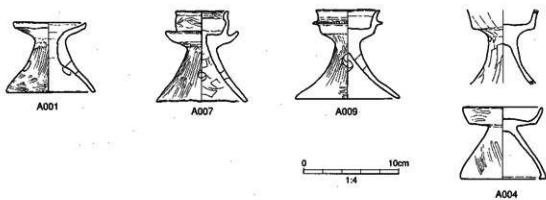


図197 小形器台の変遷

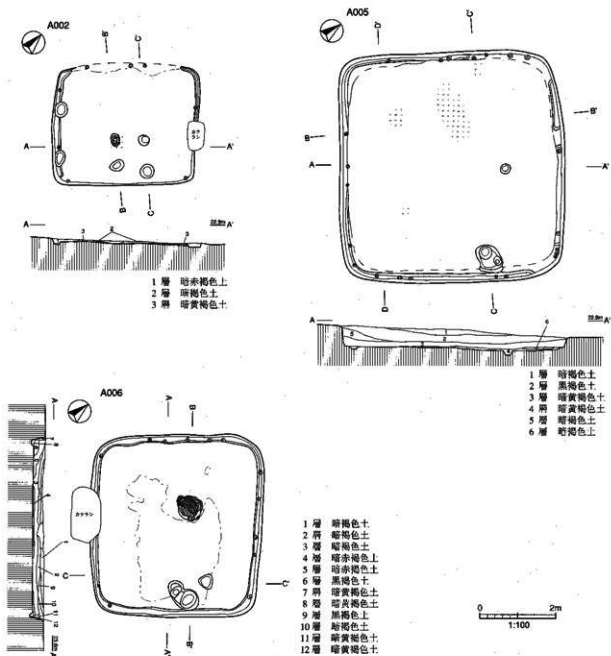


図198 土錘出土の住居跡

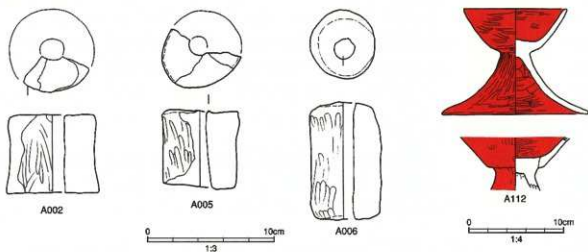


図199 A002・A005・A006・A112出土遺物

第3項 まとめ

栗谷遺跡Ⅰ地区及びⅡ地区で調査された古墳時代の集落は、古墳時代の集落としては、小規模ではあるものの、弥生時代終末期から古墳時代前期（所謂・五領期）を通して継続的に営まれている。また、この時期に至り、住居跡覆土のセクションに人為的な埋め戻しのセクションが現れることも集落展開を考える上で興味深い。

更に、古墳時代前期の集落は、古墳時代中期にかけても引き継がれたものと言えよう。今回、詳細な報告はしなかったが、A008・A028・A032・A037が古墳時代中期の住居跡になると思われる。A028・A032・A037は、古墳時代前期の集落からやや離れた栗谷遺跡の台地上の奥まった平坦面に位置し、前期の集落と立地を異にする。同一の台地に所在する上谷遺跡では、上谷遺跡の北側、つまりは、栗谷遺跡と隣接する地点に古墳時代中期の集落が展開している。前期から中期への集落展開を考えるにあたっては、両遺跡を含めて考えていく必要がある。

また、装飾的な壺を出土するA109であるが、栗谷Ⅰ地区で報告された方形周溝墓C001と併行する時期を与えられるかもしれない。集落と墓域との関係で捉える上で、注目されることは、弥生時代中期の宮ノ台期の方形周溝墓群との比較である。宮ノ台期の方形周溝墓は3～4基を単位とする集団墓の様相を呈していたのに対し、弥生時代終末期から古墳時代初頭の集落と墓域の関係は、集落に対し墳墓が単独で造営、単独墓の様相に一変する。このことは、単位集団とその首長との関係、及び、その関係の変化に起因していると思われるが、ここでは、こうした事実関係を指摘するにとどめておきたい。栗谷Ⅲ地区においても単独で造営される方形周溝墓を報告する予定があり、更に検討を加えていきたい。

以上、問題点の指摘に終始した感があるが、今後の上谷遺跡の成果も踏まえながら、古墳時代の遺構・遺物について検討をしていきたい。

第5節 奈良・平安時代

栗谷遺跡における奈良・平安時代の主たる遺構はⅠ地区で竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡1棟、Ⅱ地区で竪穴住居跡14軒、掘立柱建物跡5棟が検出され、これまでに、竪穴住居跡30軒、掘立柱建物跡6棟が整理された。Ⅲ地区においても相当数の遺構を整理する事になるため、栗谷遺跡の奈良・平安時代の整理は、まだ半分程度が終了した段階である。前節まで同様、若干の気づいた点を今後の整理の予察として述べておきたい。

第1項 集落の群構成について

集落の群構成は、本来、遺物の分析を経て、時期区分が必要とされる所であるが、現在、遺物の詳細な分析には到っていない。ここでは、あくまで景観上、ひとまとまりとして捉えられるものを群と捉えておき、呼称については、今後の整理によっても変更が予想されるので、暫定的にA～D群の4群としておく。

まず、A群として挙げられるのは、栗谷遺跡の台地北東先端部に立地する一群である。この群は、栗谷Ⅲ地区で整理予定の一群と一体化すると思われる。B群は、栗谷遺跡と上谷遺跡とを隔てている小支谷を取り囲むような形で立地する一群で、栗谷遺跡の台地南側に展開すると言えよう。調査できなかった県道部分を隔てて、上谷遺跡が展開する。上谷遺跡で報告された、A023・A021は、栗谷のB群に含まれるだろう。県道部分が調査されていないものの、上谷遺跡A023・A021を含めると、ほぼ完結した群構成を示すだろう。C群としては、栗谷Ⅰ地区で報告された台地北西側縁部に展開する一群が挙げられる。D群として挙げるのが、栗谷Ⅲ地区で報告する予定の台地北側縁部に展開する一群である。詳細は整理を待たなければならないが、D群については、更に2つの支群に分けることも可能かもしれない。

各群の構成であるが、大まかに言って、各群、竪穴住居跡10～15軒程度がひとまとまりになり、その中に1～2棟の掘立柱建物跡で構成されている。そして、各群がそれぞれ1～2時期に分けることが可能になるかと思われる。

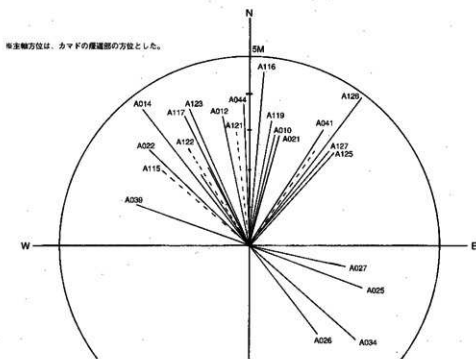


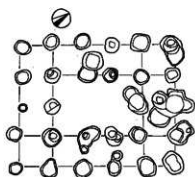
図200 奈良・平安時代 竪穴住居跡、主軸方位と規模

集落の群構成は、時期だけでなく、隣接する上谷遺跡との関係で捉える必要があり、今後変更を迫られることも、当然予測しているが、現段階の予察として栗谷遺跡における、奈良・平安時代の集落展開の単位として、以上のような4群を設定しておきたい。なお、参考までに、これまで整理された竪穴住居跡について、主軸方向と規模を整理したものをグラフとして掲げておく。

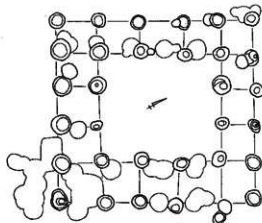
第2項 掘立柱建物跡について

栗谷遺跡における掘立柱建物跡は、前節で述べたように、これまでに、合計6棟が報告され、各群に1～2棟の比率で存在し、各群の中核的遺構になっていると思われる。規模的には2間×2間・2間×3間のものが多く、掘立柱建物跡としては、小規模のものと言える。各柱穴の形態は、隅丸方形を意識してはいるものの、明確な規格性をもっているほどではなかった。更にそれぞれ2間×2間・2間×3間の掘立柱建物各1棟がセットとなって、各群に存在する傾向がある。

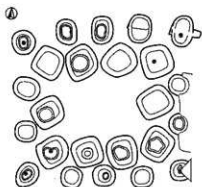
こうした掘立柱建物跡群の中で、際だつ存在として注目されるのが、B群に立地するB002である。B群には2間×2間・2間×3間の掘立柱建物跡が各2棟づつ配置され、更に四面廂を思わせるB002が配置されている。近年、印旛沼周辺地域の奈良・平安時代の集落において、四面廂の掘立柱建物跡の調査例が増えている（註17）。ここでは、それらとの若干の比較を試みてみたい（図201）。



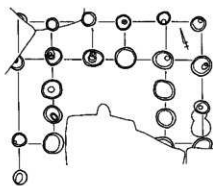
白幡前遺跡



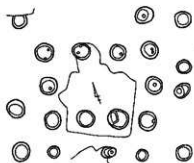
高岡大山遺跡



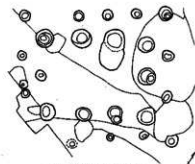
栗谷遺跡



高岡大山遺跡



高岡大福寺遺跡



吉見台遺跡B地点

図201 四面廂掘立柱建物跡の比較

S=1/200 各報告書から加筆して転載

まず、近隣の検出例としては、八千代市萱田所在の白幡前遺跡の例が挙げられる。掘立柱建物跡全体としては、栗谷遺跡検出例のものと、近似しているが、柱穴間の距離、各柱穴の形態等で差異がある。更に、最大の差異は、白幡前検出例のものは、外側の柱穴列と内側の柱穴列の軸線が一致しているのに対し、栗谷遺跡検出例の掘立柱建物跡は軸線が一致しない。白幡前遺跡と同様の例としては、佐倉市高岡大山遺跡で検出された二例を挙げる事ができよう。規模の点で、栗谷遺跡、白幡前遺跡で検出された例より一回り大きい、白幡前遺跡同様、外側の柱穴列と内側の柱穴列の軸線が一致している点では、白幡前遺跡検出例に近似していると言えよう。

次に佐倉市高岡大福寺遺跡検出例と佐倉市吉見台遺跡B地点検出例の掘立柱建物跡を見てみたい。柱穴の規模、形態、柱穴間の距離等において、栗谷遺跡検出例と差異はあるものの、外側の柱穴列と内側の柱穴列の軸線が一致しない点は、栗谷遺跡検出例と共通するところだろう。特に吉見台B地点検出例の掘立柱建物跡は、内側の柱穴が規模的に大きく、外側の柱穴が小さいことも栗谷遺跡検出例と類似する。

こうして見てくると、所謂、四面廂の掘立柱建物跡は、外側の柱穴列と内側の柱穴列の軸線が一致し、建物として規格性の高いものと、柱穴列の軸線が一致しない、建物として規格性のやや劣るものに分類でき、栗谷遺跡検出例の掘立柱建物跡は後者に属すると言えないだろうか(註18)。また、白幡前遺跡の例では、周辺で仏教的色彩の強い遺物が出土しているのに対し、栗谷遺跡では、そうした遺物は出土していない。隣接する上谷遺跡では仏教色彩のある墨書土器が出土しているため今後の報告も待たねばならないが、四面廂の掘立柱建物跡の性格として、従来言われているような、四面廂=堂=村落内寺院と言うような、公式的理解は、栗谷遺跡に関しては、慎重にならざるを得ない。今後の栗谷遺跡及び上谷遺跡の整理の進捗にあわせ、検討していきたい。

第3項 墨書土器等

栗谷遺跡出土の奈良・平安時代の遺物として、注目されるのが、墨書土器をはじめとする出土文字資料である。現在まで、30軒の竪穴住居跡が報告されているが、そのうち14軒の住居跡で墨書土器あるいは刻書土器が出土している。報告された住居跡の内、A群では1軒、B群では9軒、C群では3軒の竪穴住居跡から文字資料が出土している。D群は、栗谷Ⅲ地区で報告する予定である。これまで報告された墨書土器等、出土文字資料は30点になり、これらをまとめたものが、表81になる。

以上、若干の気づいた点を述べてきた。結果として、まとめというより、整理の途中経過と、今後の予察程度のものになってしまった。墨書土器の問題は、いずれにしても上谷遺跡の出土例とあわせ、編年的分析も踏まえながら、考察してゆかなければならない課題である。

表81 栗谷遺跡出土文字資料一覽表

群	遺構・遺物番号	種別	釈文	器種	部位	方向	備考
1	A	A116-9	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
2	B	A120-4	墨書 □	土師器 坏	底部 外面		
3		A121-3	墨書 天	土師器 坏	胴部 外面	正位	
		墨書 久	底部 外面				
4		A121-4	線刻 加	土師器 坏	底部 内面		
5		A121-6	墨書 久	土師器 坏	体部 外面	正位	
6		A121-9	線刻 □	土師器 坏	底部 外面		
7		A121-19	墨書 久	土師器 坏	体部 外面	正位	
8		A121-20	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
9		A121-21	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
10		A121-22	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
11		A122-3	線刻 □	土師器 坏	底部 外面		
12		A122-8	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
13		A125-2	墨書 □	土師器 甕	胴部 外面		
14		A126-1	線刻 ×	須恵器 坏	底部 外面		
15		A126-2	墨書 □	須恵器 坏	底部 外面		
16		A127-1	線刻 *	須恵器 蓋	外面		
17		A127-2	線刻 ×	須恵器 坏	底部 外面		
18		A039-5	墨書 西	土師器 坏	底部 内面	正位	
		墨書 西	体部 外面				
19		A041-1	墨書 奉?	土師器 坏	体部 外面	正位	
20		A041-2	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
21		A041-3	墨書 帝?	土師器 坏	体部 外面		
22		A041-13	墨書 □	土師器 坏	底部 外面		
23		A042-11	線刻 □	土師器 甕	底部 外面		
24		A044-1	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
25		A044-9	墨書 ハ?	土師器 坏	体部 外面	逆位	
		墨書 ハ?	体部 内面		正位		
26		A044-10	線刻 □	須恵器 甕	底部 外面		
27	C	A021-2	線刻 ×	須恵器 坏	底部 外面		
28		A025-3	墨書 加木有□	須恵器 蓋	外面		
29		A034-1	墨書 竹野	土師器 坏	底部 外面		
30		A034-5	墨書 □	土師器 蓋	外面		

- (1) 原稿入稿直前に中村信宏氏の栃木県登谷遺跡における陥穴の形態分類・時期・使用法についての分析を知った。栗谷遺跡における陥穴を検討する際にも非常に有効と思われるが今回は詳しく触れることができなかった。第3分冊の課題とした。
 『登谷遺跡』 2002 茂木町教育委員会
 中村信博 2003 「栃木県茂木町登谷遺跡における陥穴の時期と使用法」
 『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』
- (2) 小倉淳一 1993 「千葉県佐倉市大崎台遺跡の宮ノ台式土器について」『法政考古学』第20号
 1996 「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」『史館』第27号
 黒沢 浩 1993 「宮ノ台式土器の成立東海地方の櫛描文土器群の動向から」
 『駿台史学』第89号
 1997 「房総宮ノ台式土器考房総における宮ノ台式土器の枠組み一」『史館』第29号
 1998 「続・房総宮ノ台式土器考一房総最古の宮ノ台式土器一」『史館』第30号
 また、安藤広道氏の一連の研究がある。今回、安藤広道氏（東京国立博物館）及び、黒沢浩氏（明治大学考古学博物館）の両氏には多大なるご教示を賜った。記して感謝する次第である。
- (3) 小倉淳一 前掲論文（1993）
- (4) 今回、出土遺物の中で石器について触れることはできなかったが、A050・A051からは多量の石器も出土している。安藤広道氏から、主に長野県産の石材で、長野で制作された製品を持ち込んだものが多いとのご教示を得た。
- (5) 方形周溝墓については山岸良二氏（東邦大学付属高等学校）から多くのご教示を得た。
- (6) 原稿入稿直前に春成秀爾氏をはじめとする国立歴史民俗博物館の研究グループから弥生時代の開始年代について約500年早まるという衝撃的な発表があった。本稿にかかわる部分も少なくないが今後の動向に注目してゆきたい。
 春成秀爾他 2003 「弥生時代の開始年代—¹⁴C年代の測定結果について」
 『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』
- (7) 墓域の構成原理については大村直氏も同世代間の埋葬を指摘されている。今回、弥生時代中期の小結をまとめるにあたっては、大村氏の下記論文が参考になった。
 大村 直 1991 「方形周溝墓における未成人中心埋葬について—家族墓・家長墓説批判」
 『史観』第23号
- (8) 深谷昇氏（栃木県上三川町教育委員会）ご教示による。
- (9) 弥生時代終末～古墳時代初期にかけての関東における鉄鎌の出土は千葉県を中心として増加している。栗谷遺跡出土例は直刃鎌を思わせる鉄製品で直刃鎌とした場合、本地域の弥生時代後期の交易のあり方などに示唆に富む。以下の文献を参考にした。
 松井和幸 1985 「鉄鎌」『弥生文化の研究5 道具と技術I』
 笹森紀己子 2003 「弥生時代後期の鉄鎌について」『埼玉考古38』
- (10) ここでも前節（弥生時代中期）で記したとおり、床面直上遺物～覆土下層出土遺物について、遺構内一括遺物として取り扱う。
- (11) 『あじき台遺跡』 1983 あじき台遺跡調査団

- (12) 浜田晋介 1983 「印旛沼周辺地域における弥生時代後期の様相—あじき台遺跡出土土器を中心として—」『物質文化』第41号
 なお、本文では、一部、浜田氏とは見解を異にしている部分があるが、筆者は、浜田氏の先行研究に対して敬意を払うものであって、氏の見解を批判することが目的ではないことを明記しておく。
- (13) 『吉見台遺跡B地点』 1997 (財) 印旛郡市文化財センター
 吉見台遺跡B地点5号住居跡からは、後期印手系土器と南関東系(久が原式土器)の両方が覆土中から出土しているが、同時に中期宮ノ台式土器も出土している為、出土状況に検討の余地が残る。
- (14) 古墳時代前期の竪穴住居跡の主軸方位の決定は、4本柱の住居跡は、炉と出入口施設を結んだラインを、主柱穴が明確ではない住居跡については、炉の長軸を主軸方位とした。
- (15) 八千代市川崎山遺跡においては、住居跡の短辺方向に出入口施設を設けている例が報告されている。
 小川和博 『川崎山遺跡』 1999 八千代市川崎山遺跡調査会
- (16) 菊池健一氏(千葉市加曽利貝塚博物館)ご教示による。
- (17) 『白橋前遺跡』 1991 (財) 千葉県文化財センター
 『高岡遺跡群』 1993 (財) 印旛郡市文化財センター
 『吉見台遺跡B地点』 1997 (財) 印旛郡市文化財センター
- (18) 吉見台遺跡B地点を整理された林田利之氏は、四面廂を3群に分類されている。

写 真 图 版



空撮 (1) 弥生時代中期 住居跡 A050 A051 A052



空撮 (2) 弥生時代中期 住居跡 A053 A054



空撮 (3) 弥生時代中期 方形周溝墓 C004 C005 C006 C007 C008 C009



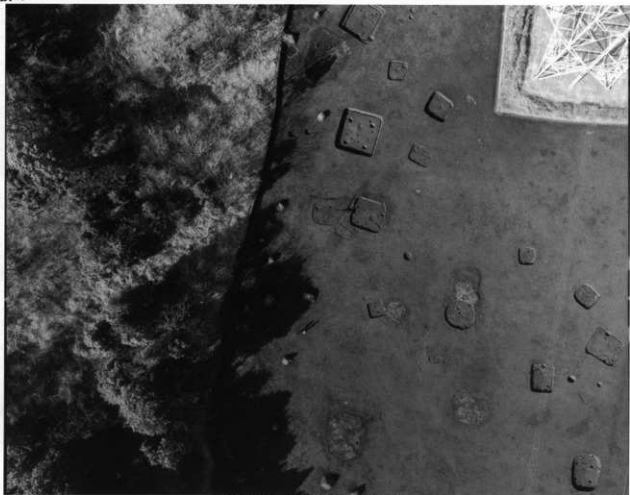
空撮 (4) 弥生時代中期 方形周溝墓 C011 C012 C013 C014



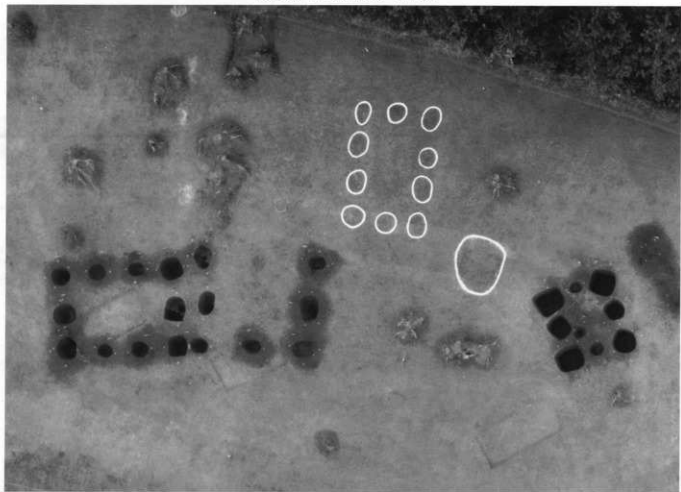
空撮 (5) 弥生時代後期 住居跡



空撮 (6) 弥生時代後期 住居跡



空撮 (7) 古墳時代前期 住居跡



空撮 (8) 奈良 平安時代 掘立柱建物跡



空撮 (9) 奈良 平安時代 掘立柱建物 その他



調査前現況



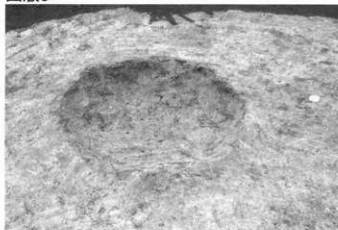
プラン検出状況 (1)



プラン検出状況 (2)



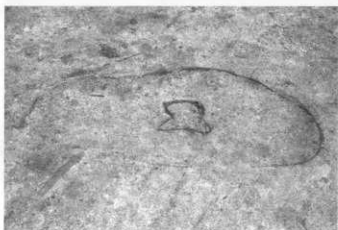
プラン検出状況 (3)



F023



F024



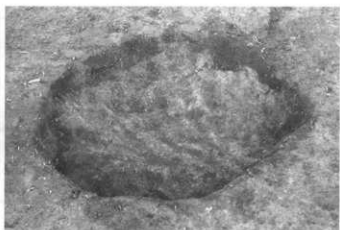
F025



D034



D035



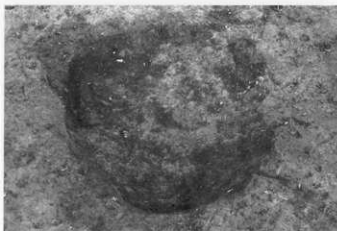
D036



D037



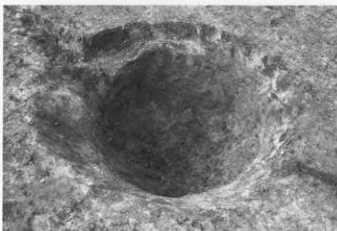
D038



D039



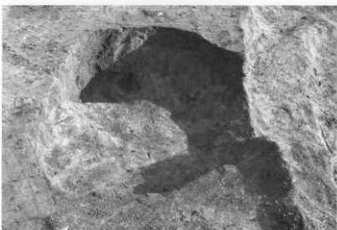
D040



D041



D042



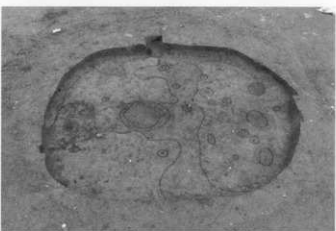
D043



D044



A050



A051